

川柳塔

創刊大正十三年 通卷一一二三号
令和二年十二月一日発行 毎月二日発行



日川協加盟

第26回 川柳塔まつり特集

No. 1123

十二月号

寒中見舞募集

○ 本誌 令和3年2月号掲載
○ 締切 12月21日(月)



川柳塔社事務所 宛

本社句会は3月まで誌上句会です。

本社句会の再開時期につきまして検討致しました結果、インフルエンザ流行期でもある冬期を避けて、4月からと決定致しました。1～3月は引き続き誌上句会と致します。

それぞれの応募用紙は前月の塔誌に同封致しますので、奮ってご応募くださいますようお願い申し上げます。

川柳塔社

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア (ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

鶴 彬

小 島 蘭 幸

先月号の巻頭言、「窓の月」下段の杉浦アナの文中、私のミスと校正ミスが重なり、大きな誤りがありました。大変申し訳ありませんでした。次のように訂正致します。

「鶴彬は石川県出身の川柳作家、太平洋戦争中、多くの反戦の句を詠み、投獄、一九三八年八月、赤痢に罹り未釈放のまま淀橋区柏木町豊多摩病院に移り、九月十四日に死去されました。鶴彬の命日が九月ということでのこの句を詠まれたのでしょうか」

NHKひるまえ川柳、お題「月」の録画を見て確認しますと、杉浦アナは、一九三八年の九月と書いておられましたので少し安心することが出来ました。

鶴彬が大阪衛戍監獄に収監されたのは二十二歳の時です。大阪城公園に建立されている顕彰碑の側に、鶴彬没後七〇年記念碑があります。

鶴 彬（つる あきら）

この地にはかつて大阪衛戍監獄があり、一九三一年（昭和六年）治安維持法違反で二二歳の川柳作家鶴彬が収監され、一年八ヶ月の呻吟の日々を送っていました。

暁をいだいて闇にゐる蕾

鶴彬は暁の日を見ることなく二九歳で獄死しました。私たちは戦争へと進む時代に抗し、強靱な精神力で不屈の川柳を体現した鶴彬を偲び、没後七〇年を機に、鶴彬を顕彰し記念植樹を行うものです。

鶴彬没後七〇年記念

寄贈 百日紅

二〇〇八年九月一四日

鶴彬顕彰実行委員会

令和二年九月十四日、鶴彬の命日に、第13回碑前祭が開催されました。

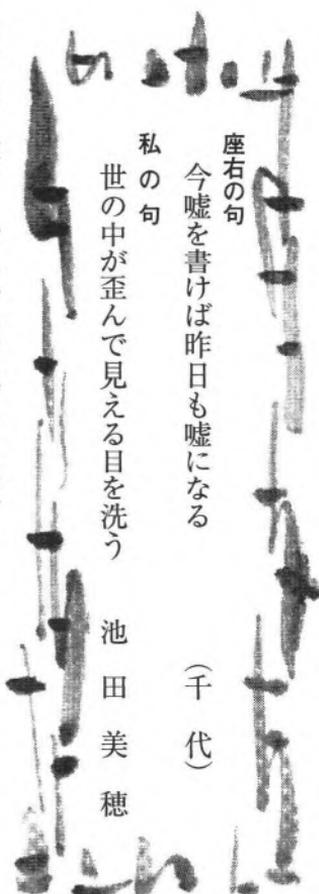
鶴彬の作品

もう締くずも吸へない肺でクビになる

タマ除けを産めよ殖やせよ勲章をやらう

五月一日の太陽がない日本の労働者

出征の門標があつてがらんとつ小店



座右の句

今嘘を書けば昨日も嘘になる

(千代)

私の句

世の中が歪んで見える目を洗う

池田美穂

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「秋田・田沢湖町」

■巻頭言 鶴 彬……………小島 蘭 幸 ……(1)

面白みのある川柳……………村上玄也 ……(2)

川柳塔(同人吟)……………小島蘭幸選 ……(4)

川柳塔の川柳讃歌⁽⁹⁾……………木津川 計 ……(38)

西尾菜句集『水鶏笛』……………自選集 ……(39)

句集の森……………原 章 峰 ……(43)

温故知新……………西出楓楽選 ……(43)

水煙抄……………吉村侑久代 ……(44)

英語 de Senryu ⁽⁸⁾……………木津川 計 ……(66)

誹風柳多留一三篇研究 4……………田辺聖子さんの功績 ……(67)

せんりゆう飛行船⁽¹⁰⁾……………新家完司 ……(67)

面白みのある川柳

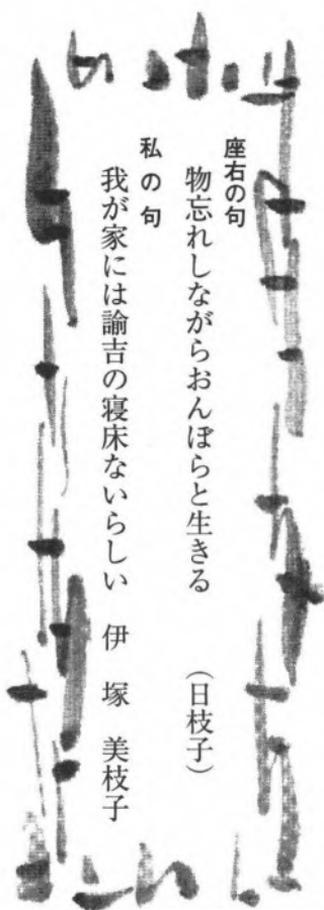
村上玄也

最近ユーモアのある川柳が少なくなってきたと言う話をよく耳にする。もつと川柳に楽しさと言われながら一向にその方向にはないようだ。

ユーモア川柳についての主張をいくつか引用したい。一つは川柳塔(二〇一五年七月号)記載の江畑哲男氏の「リアリズムの復権」からで、要約すると「最近の川柳は面白みに欠ける。文芸的ではあるが、川柳の三大要素たるユーモアをどこかに置き忘れてしまったかのようにである。大会などの川柳が妙に「高尚化」「文芸化」する傾向がある。更に面白くない川柳の底流には最近川柳界の傾向として難解句や道句の一部の流行がある」と。

次に川柳を始めた頃に読んでいた「オール川柳」一九九九年一月号に河内天笑川柳塔理事長(当時)の「笑い」について「笑いに対する評価の低さ、難しさを

愛染帖	新家完司選	(68)
檸檬抄「エール」	石橋芳山・古今堂蕉子共選	(72)
一路集「渋い」	坂本蜂朗選	(76)
「あーあ」	福西茶子選	(77)
初歩教室「都合」	居谷真理子	(78)
第26回 川柳塔まつり誌上大会	(80)
『麻生路郎読本』余滴 ⁽⁶¹⁾	栗原道夫	(96)
インスピレーション・ナビ 印象吟	大西泰世	(98)
川柳塔鑑賞	平井美智子	(100)
水煙抄鑑賞	牧野芳光	(102)
各地柳壇（佳句地十選／岸本宏章・山岡富美子／杉野羅天・山田葉子）	(103)
二〇一九年度（令和元年度）川柳塔総務部報告	(115)
柳界展望	(116)
十二月各地句会案内	(118)
■編集後記（ひとこと／栃尾奏子）	朱夏・勝弘	(120)



座右の句

物忘れしながらおんぼらと生きる

（日枝子）

私の句

我が家には諭吉の寝床ないらしい 伊塚美枝子

痛感」と題する一文が掲載されていた。そこには笑いかユーマアが一段下にみられることが多いのが残念であると書かれていたが今もそんな風潮があるようだ。

二〇一七年四月から川柳塔さかいの句報に「堺にゆかりの川柳作家抄」を連載することになり、堺に関わりのあつた作家の句集を読んでいくうちに気付いたのが、いずれの作家の句にも共通して川柳の基本である「穿ち」「軽み」「笑い」の要素があり、川柳の面白みはやはりユーマアなのだ改めて感じさせられた。

そこには人肌の温みや、思わず膝を打つような、そして日常の生活が身近にあつて「遊び心」さえ感じさせる句が多かつた。それこそが川柳の面白さではなからうか。

それに対して最近では詩性川柳と言われる句や所謂難解句の方が評価されているような気がする。「ユーマア句が大会などで上位に入り難い」と言う筒井祥文氏の意見（前述の川柳塔誌）には同感である。川柳をもっと楽しく面白みあるものにしたいたいものである。



小島蘭幸選

米子市 吉田陽子
お静かにコロナが目覚めてはならぬ
衣替えオールシーズンマスクして

テレワーク無縁専業主婦の身は
あたたかくて脆い高齢者のハート
今まではやる気ここから根気要る
ラストシーンのように名月見ていたり

大阪市 小野雅美

見る角度変えても好きになれぬ人
触れないでこころのメッキ剥げるから
脳細胞若返るよう笑おうか
悩み事何だったかとひとり酒
友からのラインで気づく誕生日
お気に入り着のまま衣替え

越谷市 久保田千代

コロナ禍に届いた元氣出る句集
越して来て言わず聞かずに慣れて秋
紙一重その中程を今生きる

しっかりと戴く喜寿の花の束
趣味ひとつ転がし明日の夢を見る
パソコンが友の代わりをする時代

大阪市 谷口 義

傘ばつと開くと冬になっていた
初対面の神さまにお願い申し上げ
ごはん食べようかと自分に言っている
飯の世と思えない程生きてます
正代も大関になったことだし
楕円形になって時どき浮いてます

大阪市 平井美智子

不確かな生と確かな死の狭間
縞馬の少し緩んだ縞模様
消しても消してもワタクシが残る
遅咲きの花です待っていて欲しい
いいやんかお互い無事にきたんやし
籠盛りの秋を買って道駅

枚方市 栃尾奏子

ぶつかつていいあなたならわたしなら
トーストが二枚並んで焼けました
やかんシユンシユン二人で風邪をひきました
不自由を二人楽しむ庭がある
還暦の断捨離残ったのは絆
もう一度手をつなぎなくなる家路

笠岡市 藤井智史

オオイヌノフグリを咲かす夫婦愛
夫の座の椅子取りゲーム勝利する
悔しさのダイナマイトを爆破させ
雲海は晴れてあなたと仲直り
愛の最大公約数は好きだ
柳友の訃報に誓う日本一

鳥取市 岸本宏章

病棟の窓に台風音もなく
言い訳はするなと丸い月が出る
メニユーから不漁続きのサンマ消え
心配の種を探して生きている
延期したオリンピックの灯も揺れる
増税が待っていていそうな世の流れ

藤井寺市 太田扶美代

ゲンコツで涙を拭いた秋のはじまり
もう一人のわたしとわたし睨めっこ
少しずつ忘れてこんなトコに居る

手のひらに載せて楽しむもしかして
歩いて来たのを忘れ自転車を探す
言い出せぬ夫の声がやさしくて

羽曳野市 三好専平

かしましい蛙コロナを怖れない
あれをせよこれをせよとは無策なり
白い傘いつもの土手を通りけり
キャバクラも知らずに老いてテレビ席
マスクではとても隠せぬ裏の顔
虹の橋わたっていった鷺一羽

桜井市 安土理恵

パツチリと眉毛マスクにも馴れて
秋が来て元気になった夏野菜
正座して夕日みているうちのネコ
夫の話ふいに回路が変化する
うたぐり深い妻になりたくないけれど
眠ってるあなた大きな赤ちゃんね

尼崎市 山田耕治

自転車で転けた亡妻がやめると言っている
無駄にするまい八十からの時間
ステイホーム赤いバイクを待っている
朝あるき氏神様で折り返す
アルバムの重さ家族の歳月よ
片恋ももう思い出となる煙

東大阪市 西村 哲夫

自慢げに語る人生聴いてやる
渾身の言い訳無視と成りにけり
奇跡無用 えにしのいのち燃やそうか
慰めはいらぬお酒を注ぎなさい
仏像も消毒される順を待つ
五七五リズムに合わぬ経を読む

米子市 竹村 紀の治

仲直りしたあとの酒たまらない
反省が足りんと肝臓ひとり言
日の丸の赤いところに一億人
まだ少し残っています羞恥心
ほころびを縫う針と糸それに酒
通風を思えば軽いコロナちゃん

犬山市 金子 美千代

生かされてすべてに感謝年かなあ
鶏と卵か経済とコロナ
ごほうびのステーキほろ酔いのワイン
巣ごもりの弊害ついにした膝に
久々のブルアップアップの河童
地方紙に載った帽子にマスクして

羽曳野市 吉村 久仁雄

スッピンと白髪でしかと生きる妻
負け方の美学を今日も褒められる
虫の音を求めて今日は万歩超え

どん底を見てきた友が明る過ぎ
思い通りの暮らしはきつとつまらない
年月日曜日確かめてから起床

奈良市 大久保 眞澄

小銭がないので素通りする神社
見た筈の場所で見つかる探し物
お願いです取説は紙でください
脱ハンコ手持ちぶさたになる社長
七転びですか鯖読んでませんか
絆とか愛とか聞くと痒くなる

岡山市 永見 心咲

何やってたんだか二千二十年
剥製になって浮世とディスタンス
金魚にも年越し蕎麦を二、三本
気にかかるロイヤルファミリーも風も
平等に歳を貫つて恙無い
次の間へ通されましたあらたまの

西宮市 緒方 美津子

GoToの手はじめに行く墓まいり
ほどほどの幸せきのこ飯がある
ばあちゃんの元気を飾る柿のれん
墓終い淋しそうです彼岸花
修復に血と汗を見る城の石
喪のハガキ書く土砂降りの雨の中

定年後風の吹くまま二十年

歩数計付けて散歩に行けという

二人の子五十を越えて無事異郷

誇らしい母校への寄付惜しくない

豊かさの中で感謝が育たない

古傷は人目を避けて土用干し

唐津市 坂本峰朗

雲楽しジュゴントナカイ龍金魚
雲百態おとぎの国にいるみたい
雲も虹も追えば儚さだけ残る

寝屋川市 伊達郁夫

現役時代語る洋酒の空の瓶

善行も写して欲しい監視アイ

一冊の出会いに花が咲きました

赤トンボ囁いたのは風の私語

まだ少し磨き足りない母の墓

巣籠りをしすぎて爪が良く伸びる

広島市 岸本清

のどぐろを凌ぐ高値の秋サンマ

秀吉を彷彿させる菅総理

コロナ禍で格差貧困浮きぼりに

賭事も酒も欠かせぬ自制心

弱い者いじめのような総裁選

今更に星に願いをかけました

弘前市 稲見則彦

帰り道朝とは違う風と逢う

クラス会君で呼ばれて畏まる

断捨離をすればわたしが消えそうな

友送ることも三密天仰ぐ

津軽には鳥居に鬼と僕がいる

プロポーズ若気の至りだとしても

嘘をつく罪悪感と快感と

悲しみに触れると雲は雨になる

淋しいと書いた背中に雨が降る

徐々に惚けて行きましょ後は夢の中

うたた寝という極楽のロスタイム

三日月よ私も満たされてはいない

西予市 西田美恵子

西予市 黒田茂代

日本の四季は豊かでカラフルで

文化財戦火をくぐり抜けた城

今昼寝の時間か雲が動かない

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

今立つた席をもう拭かれてる

我慢する夫と遠慮深い妻

あれもこれも父と母との血が交ざる

春夏秋冬だまされやすい小さき指

馴れ初めを知る沿線の吾亦紅

まぼろしを追つてる限り生きられる

長岡京市 山田 葉子

ウイズコロナの歩幅で秋にたどりつく

競う気はないが歩幅に歳が出る

古い記憶美しくなる物語

こんな失敗したことないが口癖に

口が悪いだけだったのねガード解く

肩叩きあるまで夢を見ていよう

藤井寺市 高田 美代子

何時からか灰皿並べない句会

三泊四日検査入院旅気分

異状なし帰りに寿司をお土産に

クシヤミしてコロナ差別をふと思ひ

神様は酒豪お供えたとある

塩味の効いたことばをふと洩らす

岡山県 藤澤 照代

秋うらら夫婦喧嘩も負けて勝つ

ドングリころころ心もまるくまるくなれ

月光へ咲くしか知らぬ月見草

編棒が居眠りしてる日向ぼこ

コスモスが素直になつて風を抱く

ほめられてほめられることもつとする

河内長野市 村上 直樹

想い出を辿りGOTOフルムーン

一万歩マスクで隠す不精藍

形状記憶夕飯前の缶ビール

チョイ役を主役に上げた妻の風邪

忘れたいことほど夢は覚えてる

人世のドラマ帰趨は神まかせ

三田市 福田 好文

検査入院すれば近所が痛にする

女子会に無口な人が見当らぬ

撮るたびに遺影を意識する八十路

早や傘寿白寿無理でも米寿なら

正座出来ぬ喪主に遺影の苦笑い

のほほんと生きた顔には皺がない

松山市 宮尾 みのり

祭り笛聴こえず秋も遠ざかる

旅人ははしゃぎひっそり小市民

不要不急あの子や孫に何時会える

洋画ファンだったスターの名も言える

シリアスなドラマは老いの胃にもたれ

ハッピーエンドのドラマ今夜は眠れそう

寝屋川市 森 茜

ピンポーン秋のタッチで宅急便

古都の秋亡母居ますよう機の音

三三五五閉門せまる朱雀門

歳月は人を待たずと言う輪廻

金木犀香るや遠く去りし家

大通りの夫婦喧嘩は天晴れな

和歌山市 柏原夕胡

春の夢描いて球根を植える

コロナ禍の中で喘いでいる葦だ

三年間寝込みちよびつと脱皮する

疑問符を抱いてひとりっ子にさせた

認知症のニコニコ顔の義父を見た

末期ガンの亡父ほんとに強い人でした

鳥取市 谷口 回春子

らしさかららしくなつたと妻が褒め

断捨離をもつたいないが通せんば

過疎の村仄かに匂う牛舎の香

クワガタもカブトも負けた熱帯夜

爺ちゃんの頭を撫でる紅葉の手

薔薇書けばちよびり脳に元氣出る

三田市 多田雅尚

いい汗をかいて終つたボランテア

衣更え時季も周りと少しずれ

GOTOか自粛で迷う老い二人

近頃の台風進路読めません

無防備に息も出来ない令和の世

早々と桜見る会中止とな

八王子市 川名洋子

寒暖に老いの身体が揺れ動く

忍び寄る老いにこつそりスクワット

まるい背を叱つてくれる彼岸花

腕組んで歩きたいねとメールする

満月にススキを少しブレゼント

緞帳を下ろしたように寒さ来る

貝塚市 石田ひろ子

情念を秘め竜胆のこむらさき

草叢の蟋蟀心透き徹る

食欲の年相応を越えている

独り居の情性で付けているテレビ

華だつた時代を捨てるハイヒール

GOTOの応援貰う旅鞆

大阪市 田中 ゆみ子

ちゃん付けで呼ばれる此処が故郷だ

人の気配感じていたく夜のラジオ

飽きる程日本海を見て帰る

にこり酒筋書どおりにはゆかぬ

あわてるな毎朝杖に言い聞かす

髪切つた位で忘れないあなた

岩国市 上村 夢香

高嶺の花とわかつていても書く手紙
わたくしに勇気をくれる厳しさは
秘めているパワーむくむく目を覚ます
旅プランいい日旅立ち聴きながら
友からの苦い薬が効いてくる

宇部市 平田 実男

心までおしゃれして出る美容院
失敗のほうにもあつた生きる糧
手間ひまをかけな野菜が風に舞う
安倍よりもちよつと手強い菅総理
曇つてる鏡美人にしてくれる

防府市 坂本 加代

コンタリのシエルター欲しい自治体に
一代で終える自宅は木造で
褒め合つて明るい仲間競い合う
にんげんのふんいきつくる好きな道
またはない今やらないと流れ去る

鳥取県 門村 幸子

夢のように歳を重ねて日々新た
ひとりでも退屈しない取り得もつ
ゆつたりと癒しのコース本屋まで
たこ焼きを見ると素通りできぬ質
国勢調査少子化続くまだつづく

鳥取県 斉尾 くにこ

一晩で夏と秋とが切り替わる
おはようもごちそうさまもなんか雑
宿題の多重債務と格闘中
政界も柳界も古希は現役
褒められて育つたんだね花時計

鳥取県 竹信 照彦

一寸そこまでもマイカー歩かない
お茶もチンコーヒーもチン僕もチン
炊飯器の音で目覚める朝まだき
洗濯機皿洗い機ボク風呂洗い
デジタル化すればどうなる高齢者

鳥取県 細田 裕花

若い子と観ると楽しいバラエティー
胃袋を褒められやつと検査済む
正論はすばらしいけど支持されず
晴天の柿はにこにこ上機嫌
ピカピカの東京嘆息の田舎

鳥取県 山下 節子

柿たわわ過疎にポツンと一軒家
手伝いが出来る幸せまだ元気
ボランティアあつて災害地の励み
月並な暮しいちばん安心す
敬老会元気な人が参加する

鳥取市 池澤大鯨

新刊が文庫になるを待っている
強弁と話題そらしとしたたかだ
一応は相手の意見聞いておく
テイクアウト食事は気軽に済ましてる
話し合い堂々回りだ休憩しよう

鳥取市 奥田由美

希う夫との縁次の世も
二十年も使い馴染まぬ夫の姓
単身赴任が半年で消す所帯臭
ガラス越しの面会時間もどかしい
暗号の一つ忘れたマイカード

鳥取市 加藤茶人

味噌汁は少し温めの距離が良い
おろそかにするな原石かも知れぬ
母は見たベッドの下は子の秘密
言うまでもない あんたなら出来る
厨房に男が入る家事育児

鳥取市 岸本孝子

女です三度まかなう業もらう
また出費メガネの度まで進んでた
頼みごとすればお辞儀も深くなる
それぞれの好物煮込むおでん鍋
首たれた花がゴクンと水を吸う

鳥取市 倉益一瑤

中八の中にわたしの芯がある
灰汁抜けた日から崩れてきた背骨
良妻の仮面ときどきずり落ちる
冗談などと軽あるく逃げられた
西の窓陽気な色を着ておこう

鳥取市 田賀八千代

許し合うたびに熟していく林檎
取り合った母の膝いま介護受け
疲れたな脳の扉が動かない
くつろいでいませんふて寝しています
ご免なさい言えずため息ばかり吐き

鳥取市 棚田大

幼児の手伝う姿学ぼうよ
幼児に難問問われくらくらに
おしゃべりに課題問うたら静まった
てつきりを心に入れて生きて行く
日本国コロナコロナで何処へ行く

鳥取市 永原昌鼓

肘タツチ流行っていますプロ野球
コロナにはまだ会わないが怖ろしい
選ばれて生まれたらしい胸を張れ
肩並べ学んだ肩も減りました
時々は忘れていきます飲みぐすり

鳥取市 中村 金祥

押し入れの中に私の性が見え
コロナ禍へ姥捨山が消えていく
輝きを失い貴方まで去った
嵌るもの有って悩みが薄くなり
紺碧の空につぶやくのはよそう

鳥取市 夏目 一粹

戦争は駄目と一言強く言う
てつきりと貯金の底が見えてきた
この坂は緩いが下りない坂だ
生かさず殺さず良心飼っている
老いるとは必ず命ちぢむこと

鳥取市 副井 ゆたか

八十路坂川柳テニス出来る幸
巣ごもりに力をくれるクラシック
少々の湯割り私をハイにする
獣被害そのお返しはジビエ肉
占いは当たる時だけ記憶する

鳥取市 福西 茶子

何も無い日つくづく平和だと気付く
亡母さんは四十二わたし直ぐ八十路
のんびりが続き物忘れが続く
キッチンを譲り肉食が増える
夏過ぎているのに未だ草むしり

鳥取市 前田 楓花

うつむくと淋しい影がついてくる
さよならを言われたように花が散る
ダメだとしてもずっとあなたが好きだから
好きなカップ選んで至福のティータイム
十円を探して五百円を落とす

鳥取市 山下 凱柳

GO TOトラベル罪滅ぼしにフルムーン
GO TOキャンペーンで全部使った給付金
ダイエットGO TOイートが邪魔をする
倦怠期これ幸いとデイスタンス
コロナ情報一つで株価乱高下

鳥取市 吉田 弘子

好物と花で仏壇満ちている
生きてきたご褒美ですか老後とや
乗り越えた大波小波そして今
親族の訃報順番ふと思う
人生のおまけと今日はゴロ寝する

倉吉市 猪川 由美子

時の人トランプ病んで大ニュース
GO TOキャンペーン未だコロナで違和感が
自死もまた連鎖反応か哀しい
あと三月今年コロナで明け暮れる
他人のミス許す頃合い難しい

倉吉市 岡崎 美知江

がんばろういくつになつてもこぶし振る

人生の裏を見て来た目が動く

人の心動かすペンに力ある

ヘルパーが動くとき空気暖かい

母さんの一声朝が動き出す

倉吉市 田中 紀美恵

いつ見ても退屈しない夫の鼻

平均寿命越えたが死は怖い

コロナ禍が怖くて家で寝てばかり

心配りがうまく出来ない老いの坂

フラフラ一度も出来ぬ八十路では

倉吉市 牧野 芳光

青春の欠片を拾い研ぎ直す

友達で他人気ままな事も言う

歩数計刻むトイレの行き来して

海外旅行禁止ポツカリ穴が開く

しわくちやになつてしまった里の秋

米子市 池田 美穂

県外の子供の顔を忘れそう

つるつるの脳とお肌は反比例

熊とまだ背くらべしたことが無い

近ごろの台風機嫌悪いこと

松茸を食べてもなんのことはない

米子市 伊塚 美枝子

うさ晴らししているような雨の神

太陽がかくれんぼした二度寝する

紫外線服の上から肌を焼く

自肅中テレビ見過ぎて名探偵

肌の色差別の抗議マスク文字

米子市 後藤 宏之

寿命です堪忍袋取り替える

モットーを時々変えて生き残る

どんまいと肩を叩いてくれた母

化粧して別人になり同窓会

本物の恋でないから風で飛ぶ

米子市 後藤 美恵子

水遣りをサボった庭の秋佐し

食卓は冷凍もののサンマ高

世帯主譲った後も口を出す

滑舌に本の音読ひとり居り

耳よりな話は独り占めにする

米子市 中原 章子

ひらめきが涸れないように水をやる

秋日とお墓まいりに気が晴れる

キャッシュレス時代の波に戸惑いが

不器用が一本道しか進めない

人生が延びていいこと少なすぎ

米子市 成田 雨奇

まあこんなものかと思う過し方
ウイルスにいろんな長が試された
ちゃんと日が暮れる何もしなくても
お祝いを包む迷惑かけるかも
粗衣粗食物置小屋で吟醸酒

米子市 野川 宣子

背負い込んだ荷物にいつも潰される
無造作に置かれた野菜弟か
尻込みをしている間に神無月
リモートもオンラインにも無縁
ほどほどに帰れる辺で遊んでる

高根県 伊藤 寿美

コロナ鬱になってしまった秋の蝉
心残りを洗ってくれた蝉しぐれ
法律遵守餓死した判事がいた昭和
賭けマージャンで辞めた検事がいる令和
GOTOで逢いたい亡夫が居る彼岸

松江市 石橋 芳山

じゃがバターほどの魅力もなく独り
性欲のズズズイッと真っ平
その気しなくてダルマさん転んだ
点にしか見えない街でならんでる
その嘘はバレてる柘榴割れている

松江市 藤井 寿代

ジタバタしてももう遅い相手はバトカー
ラブレター乱れた文字に酒を注ぐ
コロナ禍で残ったのは年金組
彼氏から戦友になり続く縁
尾崎豊にもう戻れないアイラブユー

松江市 松本 知恵子

松茸山行きたいけれど亥の区域
御呼ばれの服も増えずに秋になる
いい季節宍道湖秋の空映す
密さけて楽し近場の山歩き
秋雨の森こころ静かになってゆく

出雲市 伊藤 玲峰

原章峰師御逝去辛い(令和二年九月十六日)
穏やかな旅立ち告別の列へ
宮の森コンサート中止となって淋しいね
隣町のお寺で月見素晴らしい
日本の四季神は素敵なアーティスト

出雲市 岸 桂子

生涯を無題と書いて生きようか
日めくりの一枚にある哀の記憶
表札はずっと変えないまま生きる
真実を味方につけて動じない
約束はまだ果たせない墓洗う

雲南市 菅 田 かつ子

久野川の鴨と親しくなった橋
恋をした孫が素敵になつてゆく
おいおい亡夫に呼ばれたとこで覚め
思い出の日記あなたが側に居る
散らばった我がオアシスで書く一句

岡山市 高 岡 茂子

コロナ禍でも秋を知らせる金木犀
休暇とり祭り太鼓を打つ息子
太鼓響くが見物禁止の神楽舞い
倉庫では悄気て欠伸の山車御輿
御苦労さまと遅咲きの曼珠沙華

岡山市 田 中 恵

夕焼け小焼け今日もハードル下げました
台風が進路を変え晴の国
素っぴんになれば飛び出す国訛
米作り止めて貴重に思う米
あいまいな記憶手帖に叱られる

岡山市 山 縣 のぶ子

秋祭コロナが奪う鉦太鼓
純白のマスクを往来さすコロナ
祭ボケの所為にしようか句が出来ぬ
早朝の草取り奉仕気が入る
萩こぼれ咲いて昭和を顧みる

岡山市 大 石 洋子

開けっ広げの窓に遊びにくるトンボ
ひがんばなはぐろとんぼにすじぐもに
プロポーズの言葉かさこそ枯れ葉色
卵焼きうまくできた日スキップする
よく働くよ短かい指の私の手

岡山市 工 藤 千代子

可愛いかったと過去形になり逃げられる
かな文字のように揺れてる妻の椅子
台風のようなお人で泣き虫で
くしゃくしゃの一日伸ばす熱めの湯
あんぱんの好きな男と五十年

岡山市 丹 下 凱 夫

新聞受け確かめて見る休刊日
何ひとつ不満はないが句ができぬ
豊年満作秋晴れを褒めそやす
赤色でなくてはならぬ曼珠沙華
一本杉に雲の行方を尋ねている

岡山市 前 田 恵美子

月は見ただけまだお迎えは要りません
食べる事好きでいつでも台所
やりくりの楽しみ残す貯金箱
「もういいよ」言ってくれないお医者様
地物松茸買えて喜ぶ夫の顔

竹原市 石原 淑子

倅せな香り新米炊き上がる

胸キユンキユン央ちゃんのつぶやき川柳

生き返る心の中の白い花

学校の傍までコロナクラストー

丑年がオリンピックを連れて来る

三原市 鴨田 昭紀

これまではクイックこれからはスロー

ストレスに聴かす清流のせせらぎ

竜宮城に浸り現実から逃げる

秋空にトランペットが突き刺さる

モチベーションを保ち続けているメロン

松山市 栗田 忠士

解凍の秋刀魚を食べて我慢する

訳ありの訳が分からぬほど旨い

けんけんばやがて大人になっていく

使いたくはないが余生という言葉

コンニャクにも表と裏があるらしい

松山市 古手川 光

秋祭り淋し聞こえぬ笛太鼓

阿波おどり よさこい 野球拳もばあ

試練と思おう人生行路雨嵐

大臣答弁ふとロボットかと思う

百年山 登山八合目の半ば

松山市 柳田 かおる

しかるべき位置に戻すと咲きました

渴いたココロへこすもす風にゆれ

誰とでも仲良くなれる秋桜

お祭りは無いのに香る金木犀

久し振りうれしい友と会う句会

今治市 永井 松柏

名刺の鐘は白亜紀から響く

近道を選ぶと落とし穴がある

亡き友に捧ぐ「石狩挽歌」です

ナビにない小径でわたくしをさがす

6Bの鉛筆で書く懺悔録

土佐清水市 辻内 次根

何はさておきマスク忘れないように

澄んだ空作業ズボンに穿きかえる

しみじみと昨日と比べて見てる顔

窓開ける遠くで人の声がする

肉じゃがが少し飲みたい気にさせる

東かがわ市 川崎 ひかり

ひとりの死がらりと変わる予定表

貰うまで楽しみだった給付金

いつの日か確定にする予定表

ゴクゴクと生きてる音で水を飲む

巣ごもりに慣れてゆったり生きてます

北九州市 小松紀子

息子と婿が誕生祝してくれた
明るい色の服が好き八十なり
息抜きも手抜きもします平和なり
ないものねだりをしないマイライフ
アルバムに昔の夢が写つてる

唐津市 山口高明

維持管理神宮ひとり沖の島
軍歴は無くとも軍事評論家
残滓の出る豊かさに気が付かず
引き際を知らぬおとこの悪あがき
ひそやかに少人数の家族葬

熊本県 岩切康子

陽が照ればシャッター上げて障子開け
内服と目薬済ませ散歩する
ゴミ出しに眼鏡と帽子欠かせない
コロナ禍が怖いか柿の実は成らず
古里の夢会いたくなくて電話する

熊本市 杉野羅天

栗割れてわれに淋しき秋となり
実りよし農夫の顔の笑み深し
芒伸ぶコロナの秋も知らず伸ぶ
何者だ隠しキープを飲む奴は
野良で咲き夢追いかける吾亦紅

札幌市 小沢淳

都落ち酒が強いが先に着き
ぬけぬけと嘘つく割に歯が白い
朝起きて今日する事がある幸も
腰痛に元の四足に戻りたい
逆らつた子供に今は介護され

男鹿市 伊藤のぶよし

目覚ましはキジの声です過疎の郷
絶妙のカメラ目線が僕の味
オマケはオマケ訳ありだつて気にしない
おだてには昔も今も乗っている
待つことも正解と知る丸い背

弘前市 今愁女

自粛すも早や数か月変化恋う
シルクロード語り良ければ音楽も
ピストル撃つドラマは嫌い直ぐに消す
崇高に照らす中秋名月は
春は来ないコロナ収束するまでは

塩竈市 木田比呂朗

酷使した老眼鏡も拭く師走
おでん鍋もうコンビニの顔になり
年末に体温計も買い替える
ウイルスを横目で意識する第九
ケータイをスマホに変えて年を越す

さいたま市 星野 育子

ロボットが案内も配達もする

学問の自由保障はどうしてる

足並が不揃いですねデジタル庁

家事だって上手く出来る日出来ない日

今一度世界の平和ないだろう

上尾市 中村 伸子

特別に切手を選っている手紙

娘からエールマスクの宅配便

免許証返納夫の足になる

開店時間に合わせていますお買物

三人掛けの真ん中開けて座ってね

朝霞市 前田 洋子

火事跡へ草は遠慮のないようす

ハルカスをTOKYO TORCH 抜く野望

酒税また細工に酒が不味くなる

運動会熱を測られ孫を観る

私をニートなのかと孫が聞く

東京都 川本 真理子

外国の客に薦める広島路

テレビ局ある街角の空模様

月を見るのは悲しい時がやや多い

ほんの少しくまくいかない歳になる

私の空私のメリーゴーランド

横浜市 川島 良子

心臓が飛び出しそうな子の転職

美男美女マスク外せばただの人

異国語が飛び交う介護ケアホーム

「長生きしてね」なんと嬉しいメッセージ

横綱休場自由自在すぎないか

横浜市 菊地 政勝

正論を吐いて損得考えず

スマホなど持たずに用が足りている

ほとんどは妻が喋ってめし終る

サブリなど飲まず毎日ウォーキング

耐えて待つそんなことでは遅れとる

愛知県 早川 遡行

タマゴ割るのにも料理の上手下手

もう十年若かったらなア穂高岳

コロナ禍を家に籠って老いていく

買い換えたスマホに悪戦苦闘する

約束をコロナの所以にして疎遠

大山市 関本 かつ子

十五夜を仰ぎお芋を半分こ

寄り道はないのかただいまが早い

三食を残らず食べて骨粗しょう

お隣の人も気付かぬ家族葬

ハイタッチ出来ぬ友とも久し振り

鈴鹿市 小河柳女

雑踏で泡になつて消えてゆく

太陽の糸にぶらりと弾む旅

白鳥になり帰りたい母の胸に

体内宇宙ひとつずつ消えて 空

悲しみは遠くに捨てて生きていく

富山市 島 ひかる

国勢調査二人住いで直ぐ終る

八十七歳自主返納へ誉め言葉

運転免許採らせなかつたのは夫

使い方ひとつで世界見るスマホ

コロナ禍の終息願う蜃気楼

可児市 板山 まみ子

免許証無事故のうちは返さない

トイレにも季節の花をさりげなく

シミにシワ隠す手立てをまだ知らぬ

長生きも笑える日なら何時までも

来年は切つてしまおう落葉掃き

京都市 清水英旺

二合目まで何とか無事の八十路坂

コロナ菌の逆鱗に触れたトランプ氏

なにごとく密やかにやれば快感

忘れたこと自覚があれば脈がある

仏壇の奥笑む父母のツーショット

京都市 藤井文代

エスカレーターへもどかしくなる出ない足

無記名なら本音しつかり記します

隠すとこ素つびんですと白マスク

出る杭も打つてもらえぬ歳になる

コロナ禍に慣れても自粛には憂い

八幡市 今井万紗子

孫とする脳内パズル待つた無し

目薬差して明るいニュース捨てます

足して引いてこれも人生まあいいか

子供はいいなどの子もみんな笑顔もち

何時の日も二つ並べて敷く布団

大阪市 磯島 福貴子

金平糖トゲトゲ数え偲ぶ過去

くじけそう効果が見えぬジム通い

八〇二〇誇れるものはこれ一つ

印章文化残してほしいハンコレス

エメラルド婚よくもここまでしみじみと

大阪市 井丸昌紀

ケータイが響くいつもと違う音

ドラマ見る時だけ好きになれる国

コロナ収まらぬまま夏そして秋

日にひと口食べぬと済まぬチョコレート

由緒ある区の名消したい都構想

大阪市 岩崎公誠

吉と凶どちらが出てても前向きに

提灯屋少なくなつて文化財

地方紙に包んだ語は母の便

終電に昔の顔はもういない

巣ごもりで人間の明日試される

大阪市 岩崎玲子

夜だけはしっかり寝たいおばあさん

日日マスク五感が鈍くなる悲し

こんな事でええのかちよつと振り返る

神木にタッチしたからがんばれる

ヘソクリを隠した場所を再確認

大阪市 内田志津子

潤いを下さい愛を下さい

観光地渴いたままのBGM

身の丈に合った暮して白飯で

躓いた石としばらく睨めっこ

母さんの煮物が旨い千枚田

大阪市 宇都満知子

なにくそと四葉踏まれる場所にいる

ひんやりリビングスリッパを履き出す

風は冬へと心春へと気がはやる

満面の笑顔にハート日向ほこ

お好み焼きに祖母の味母の味

大阪市 江島谷勝弘

好きだった穴場コロナで廃業に

この頃は一円玉も落ちてない

あいも変わらず派閥政治がつづきよる

健康診断判定はDでした

駒ならば妻は王将私は歩

大阪市 榎本日の出

気持良いリング温泉家にあり

ちぐはぐに生きた暮しを認め合う

終点の間際でリズム狂い出す

転んでも明日に出逢う風を待つ

終点に夫待ってる縄梯子

大阪市 榎本舞夢

ようやく秋街はコロナでまだ静か

運動会旅行観劇活気付く

驚いたコロナ感染トランプ氏

子防接種インフル今年行くと決め

明日は明日楽しく過ごす夢を見る

大阪市 大川桃花

スイッチオフで独りに戻るリモート飲み

コロナ巣籠り筋肉作り大流行

福耳の野党党主で運が無い

あの時になるかも知れぬ今の今

自分流押しつけてくる歯医者さん

大阪市 大 治 重 信

ぐうたらとずばらが暑い夏を越え

コロナ禍が多く知恵を授けゆき

金剛の朝の霧消え秋の空

鬼と合い雷の音今朝の夢

何事も便利に済ます暑い夏

大阪市 笠 嶋 恵 美

髪カット気分転換うまくゆく

毎朝トマト儀式のように食べている

しっかりと長生きせねば花届く

老いたれば老いを楽しむ外はない

恩返し出来た一句に手を合わす

大阪市 金 川 宣 子

まだ我慢できてる禁酒四ヶ月

補聴器を外して聞こう風の声

秋味覚片っ端から食べ歩き

ふるさとの記憶をたどる一人旅

日帰りの旅で充分リフレッシュ

大阪市 川 端 一 歩

コロナめが世界の騒ぎ見ているぞ

自粛中古い映画を観て泣いた

地球の明日考えてみて恐ろしい

ボクにしてみれば古本宝もの

地を這った人が見ている政

大阪市 古 今 堂 蕉 子

ああ体力線香花火の如くなる

トレモロのギターも秋の色で鳴る

世話になるそんな日もやと萩の道

トランプにコロナもあきれ引き下がる

デリバリープラスチックの山作る

大阪市 近 藤 正

総理以外六人削る者はなし

コロナ禍は自助共助では生きられぬ

内閣葬二億も要るか大勲位

顧みて恥じること無しいま傘寿

政令市維新の毒に堪えている

大阪市 坂 裕 之

まだ会えんコロナ何時まで邪魔をする

本音出すはずの会議でおべんちゃら

控え目に発言したが睨まれた

昭和の血しっかりと抱いて令和いく

笑ってた彼がきつちり場を締める

大阪市 高 杉 力

未来から見れば一番若い今

決めきれずいつもミックスモダン焼

僕にだけパンかライスか訊いてくれ

今晚は暇かと飲めぬ上司から

揺りかごも墓場もネットシヨッピング

大阪市 高杉千歩

令和二年施設三度目クリスマス
年中セール誓文払いなつかしい
戎さん天神さん大黒さん車椅子
遊歩道車椅子から降りてみる
三度目の新年我が家さえ忘れ

大阪市 津村志華子

生きただけ舐めた味ですサシスセソ
境界で勝ち気なバラが燃えている
頑なにマスクは白で押し通す
リン打てば通じたのかな灯がゆれる
お断りしよう祈禱の長寿箸

大阪市 寺井弘子

可なく可なく朝の挨拶両隣
晩学に創作意欲呼びさます
不器用もマスクつくり手に手が動く
職人肌納得が行く仕事ぶり
人生のところどころにあった句

大阪市 中井萌

蕎麦の花賞でつ食する蕎麦旨し
山里に行列出来る蕎麦の店
これ程にマスクは命守るんだ
片減りの靴でコロナを掻いくぐる
なあ秋刀魚もつと肥れよ私ほど

大阪市 原田すみ子

老人の悴出るサブリと体操
全力で咲いて枯れてる彼岸花
いつの間にか夫も見せる主婦の顔
かあさんの声と匂いに抱かれたい
絵文字ひとつ微妙な綾にピタリ合う

大阪市 平賀国和

GOTOでコロナのガード低くなる
コロナ対策インフル予防予約する
いい機会映画楽しむ家籠もり
気休めに今日の運勢確かめる
目標は金婚式を祝うこと

大阪市 宮崎シマ子

浴室の窓より匂う秋の色
嫌なこっちゃ医者百歳までの大鼓判
友の話同じ苦労よ私も
こちらも怖い終電から女ついてくる
半熟の優しさを待つ乙女

大阪市 山本加お里

耳手術三〇分で良く聞こえ
盆三日夫がずっと見えかくれ
あったかいいつも夫の服まとい
マスクつけ口紅へらぬ日も長い
自肅中たずねてくれた鳩一羽

大阪市 横山 里子

縄文の血がどんぐりを拾わせる

ねこじやらし妙に似合った備前焼

秋深し何もすることなく暮れて

シッブ臭齡八十よく転ぶ

約束の日時違える友が増え

大阪市 若本 安代

プランだけ組んでほどこいて過ぎた夏

気休めはいらない胸に響かない

友見舞う優しい嘘は罪ですか

ひらがなで話してくれる真の友

充電し誘いの電話待ってます

堺市 奥時 雄

予防線張るよな気象聞かされる

江戸の世も御輿担がぬ秋は無い

過疎の村淋しさ募る秋祭り

ふる里は猪の留守見て仕事

旧友と励ましあつて電話切る

堺市 柿花 和夫

二日目は揺り籠となるツアーバス

罪を憎んで人を憎まずなんて無理

秋茜に宿を貸してる彼岸花

十二月八日を知らぬ議員たち

穂芒に夏の思い出揺れている

堺市 源田 八千代

謙虚さと思ひ遣りこそ全てです

観月へ竜胆 芒 吾亦紅

片足立ちでソックス履くのもリハビリ

家事畑仕事みなりハビリとなっている

コロナ禍に振り回されて早や師走

堺市 齋藤 さくら

そのうちと言うには長いコロナ禍だ

いいかげんマスク取りたくなって来る

かと言うてコロナに罹るのは怖い

耳掃除爪を切るのは妻の役

しあわせは三度の飯と仲間居る

堺市 坂上 淳司

さんま焼く煙が充ちていた長屋

温暖化がさんま遠く追い遣った

かなくてきはあるが乗せたいさんま無し

目黒のさんまを所望の殿も目に泪

さんま定食の品書きはもうお蔵入り

堺市 澤井 敏治

まだかまだかと宵の口から月見酒

帰省子がのっそり起きてくる月夜

GOTOの耳に届かぬ飢餓の声

もみじ舞う風にも彩のあるように

眠たかろう夜も照らされるもみじ

堺市 遠山 唯教

こころゆたか寂しがり屋が本を読む

老いてなお惑わされずに功德積む

真夜中のちあきなおみが離れない

お彼岸に仕切り直しのひとり言

寂しさに慣れて紡いでふたりきり

堺市 内藤 憲彦

コロナ禍で会えない人に年賀状

苦勞掛け最後は母の杖になる

オール電化よウフフお隣に言われ

編集長が5Bで書けという殺氣

格差広げる大国のエゴイズム

堺市 矢倉 五月

方向音痴夢の中でも出る冷汗

日替りのドラマをくれる三才児

曜日かまわず老母がランチ誘てくる

インクたっぷり補充して書く恋情

カタカナが苦手な脳にコロナ刻印

池田市 太田 省三

クラス会鉄板ネタに座が和む

コロナ禍に銀座の恋も湿りがち

寝室に夫婦の時差がある夜長

朝食をしつかりとつてクリニック

長い夜独り独りで見るテレビ

河内長野市 大島 ともこ

懐に飛び込み人の温み知る

通せんぼされると闘志湧くタイプ

虎の子の儲けコロナに持つてかれ

冗談から始めた同居五十年

ゴミを拾ったつもりが手にはダンゴムシ

河内長野市 梶原 弘光

忘れずに葉飲むのもボケ防止

その若いの後期のボクをつかまえて

補聴器を確かめここだけのハナシ

喜寿控え知らないことが多過ぎる

記憶力落ちてトラウマまで霞む

河内長野市 木見谷 孝代

さらさらと黄金の海の鳥威士

コスモスが揺れる畑はパラダイス

彼岸花塔誌をマネて描いてみる

オカン凄いと子に褒められてむず痒い

自分の歩幅つかんだ頃に喪が明ける

河内長野市 黒岩 靖博

喜寿傘寿祝いゴールは白寿越え

祝い酒三日三晩の寝正月

自己中も気配り出来る孫になり

かましい妻のソプラノそっと聞く

子のサイン気づかぬ大人悲劇生む

河内長野市 辻村 ヒロ

隠しごとあつたはずだが忘れてる
新聞とメガネ捜して朝が来る

脳に刺激クイズ番組選んで見る

世間体迷う気持ちに輪をかける
なるようになるかと悟つた老いの日日

河内長野市 中島 一彌

秋刀魚食うしみじみと俺日本人

七輪で焼くから秋刀魚秋の音

水割りから熱燗になる秋になる

検査良し家路を急ぐ手におはぎ

ルビなしで読めぬ名前は親のエゴ

河内長野市 藤塚 克三

明日退院きれいな夕陽湧く希望

言葉より握り返した手が嬉し

余裕の顔他人に見せる俺の意地

平穩を崩す気ままが先に出る

前置きが長くて嫌な予感する

河内長野市 山岡 富美子

沈静化したまま私のマグマ

いつの間に知らない国が地球儀に

世の動き川の流れが速すぎる

雑念が邪魔する白紙とのバトル

華やぎは一瞬でした彼岸花

岸和田市 岩佐 ダン吉

聞きますがあなた何色なんですか
無口だが話しわじわ染みるもの

外された急所私は敗けている

正論と思う私は変われない

たくさんの余白を持つている強み

四條畷市 吉岡 修

6Bで黒ぐろと書く自信作

一本の鉛筆だつた立ち上がり

怒らなくなつただんだん仏顔

声出して言わぬと神も知らん顔

大仏と仰ぐなんでも頼れそう

吹田市 太田 昭

不器用で群れに入れぬ猿もいる

胸底に刺さつたままの棘を抜く

追い出した鬼がときどき顔をだす

足の裏に一度も礼を言つてない

パソコンとスマホがあつて恙無し

高槻市 片山 かずお

テレワーク定着させたのはコロナ

働き方を見事に変えさせたコロナ

外出自粛少うしボケが出かかった

山の道畦道軽トラが主役

指定席隣に美女はまず来ない

高槻市 初代 正彦

高槻市 原 洋志

ムダ話これもふたりの潤滑油

ゴミ当番てんやわんやの妻の留守

車庫入れの不得手私もせっかち派

巣籠りもいつかはきつと語り種

メモを取る仕草にふっとお人柄

高槻市 杉本 義昭

川柳の醍醐味ニヤリユーモア句

正代優勝体で泣いた郷土愛

生きている証拠だ骨が折れている

賄賂にはあまり効かない図書館カード

コロナウイルスにいつも見られている自粛

高槻市 富田 美義

お隣へ寄り添い笑みのスマホ撮り

公園の老いの耳にもマスク掛け

外出は玄関迄とコロナ禍で

どの子等もマスクを掛けて日焼けナシ

大卒は知識バツカリ結果出せ

高槻市 富田 保子

重いのは荷物でなくて心かな

形見分け亡母の温み手に触れる

欲張って見ると疲れる美術館

毎日を話し育った菊の花

目の覚めた時が私の朝である

また今日も愚痴聞かされる缶ビール

モチベーション掛け声だけで上がらない

巣ごもりのライフスタイル等身大

肩腰膝無料サブリに助けられ

やんわりとGOTO策にのってみる

高槻市 松岡 篤

良い子感メール何度も開けてみる

そろそろに花開きそう孫の恋

古里の過疎の片棒私です

恋敵互いに孫が五人ずつ

インバウンド来ぬうち古都へ行っておく

高槻市 安田 忠子

秋桜がやさしく揺れて人恋し

五百羅漢数えて探す母の顔

ガラケーで事たりているアナログ派

ふと止まり何処へ行くのか考える

露天風呂捻った腰を忘れさせ

豊中市 池田 純子

こんがり焼き立てパンのような秋

コロナ禍の運動会はおとなしい

アレグロで走ってみたいおばあちゃん

焼きいも英字新聞着て御座る

末っ子にあれもこれもと降ってくる

豊中市 上 出 修

無料バス今日も一日バスの旅
とんぼの目首をかして世相見る
罪を悔い今は聖人君子です
長生きができると信じサブリ飲む
飲んだ後やつぱり締めはラーメンで

豊中市 きとう こみつ

通天閣を見ようエツフェルをおもいだし
古いアルバムもう想い出を捨て去ろう
朝は味噌汁私根っから日本人
麻生氏さえ言いまちがえるスガとカン
一生の不覚青のり付いてた菌

豊中市 藤 井 則 彦

長生きをするにも貯金気にはなり
執着を諦め肩の凝りも取れ
童心にかえるお昼のメロンパン
自分らしく生きれば悔いることはない
記憶力薄れて和み出す余生

豊中市 松 尾 美智代

矢の様に過ぎて行く日に目眩する
毎日がジムと家事とで明け暮れる
コ罗纳自粛解けて仲間が集う駅
距離置きながら神戸へ老いのハイキング
みんなシニア次は会えないかも知れぬ

豊中市 水 野 黒 兎

歳月の重さじわりと膝に来る
傘寿過ぎ四季の巡りは光速で
仕事終え誘蛾灯めくネオン付く
心込め書いた手紙に花切手
卒寿へとなお別れ道多い坂

富田林市 片 岡 智恵子

十五歳が九十歳の敗戦記
電話やさしく切れて会えない友や友
菊凛と咲いて明日への気をもろう
来年の約束共に老いている
運命をはね返す力の弱し

富田林市 中 村 恵

やわらかな哀しみヒロインはわたし
一喝をされた手足が動きだす
激励の拍手に推され逆上がり
とにかく仲間がいるだけで愉快
比べてはならぬ昨日のわたくしと

富田林市 山 野 寿 之

さつと来てさつと帰っていく息子
なぜなぜの光る無垢の瞳好奇心
三密も守り夫婦のデイスタンス
無花果に生ハムを巻き赤ワイン
菜園の曲がり胡瓜も同じ味

寝屋川市 富山 ルイ子

羽曳野市 徳山 みつこ

敬老の祝有馬へ家族連れ
昔昔子供と行った古泉閣

いざに備えて筆筒にほどほどの諭吉
おせつかい焼いて下さい寂しいの

古泉閣五十年前行っていた

GOTOトラベルコロナも財布も怖い
夢をみる私も薔薇も期限なし

ねね橋に秀吉橋を写真撮る

神さまもたまに誤作動するこの世

大阪マスクやつと国産見つけた

羽曳野市 藤原 大子

寝屋川市 平松 かすみ

九十で逝った夫を追いかける

コロナ禍もいずれ歴史の一頁

真つ直ぐに歩く夫に嫉けられ

悔しいが自粛ぐらしに慣れてきた

いい日だな大きく開くしじみ貝

あの時に会いにいけばと悔いばかり

お二階へ伸びたゴーヤに実がひとつ

見ぬ振りができずまたもや口が出る

全身を洗う左手ぎこちない

風向きの変わらぬ内に頼みごと

羽曳野市 磯本 洋一

東大阪市 佐々木 満作

勝負には涙と笑いセットなり

ファッション性高くなってきたマスク

万歳で予算が決まる永田町

間の手が演技に障る鬻り付き

妻旅行干物と酒で夜が白む

点滴が命を繋ぐ秋彼岸

この一手孫に待ったのオンライン

あやふやな態度に妻のストライキ

人口減議員削減他人事

今年はもう誌上句会で幕閉じる

羽曳野市 宇都宮 ちづる

枚方市 谷 英也

癌は癌初期と聞いても鬱状態

コロナ禍で静かに家で酒祭り

持つべきは友と言われてこそばゆい

間開け心は密に快活に

夏の終り夫が網戸をはり替える

飽きもせず道草ばかり秋の空

返納したら孫が乗る気の新車買う

禁煙の勧め主治医の匂うヤニ

手料理にいつもソースをかける夫

巣ごもりで今日も細胞しおれてる

緊急事態のらねこ歩く嵐山

枚方市 丹後屋 肇

台風コースコンビニの棚空にする

どんでん返しあるから面白い浮世

野球と謂う訳語が弾む瀬祭忌

デジタル庁へ振りかぶる蟻螂の斧

枚方市 藤田武人

GoToに紛れ出張費を浮かす

いつまでも箸転け笑う家内です

人混みで見つけた一枚の論吉

何気ない日々を願って引く御籤

こんにはマスク外して名が判る

枚方市 藤村亜成

許容範囲抜けたぶんだけ老いてくる

大切な返事なかなか筆が進まない

老人のあなどりがたいしたたかさ

建前論頭に納得させるだけ

神の必然人は奇跡とのたまいまし

枚方市 山口弘委智

誰も明日あるを信じて一人旅

友人の友人も居て密となる

妻の留守ぱつと五感を解き放す

老いてなお母の記憶の確かさよ

一文字の孫の返信わが宝

紆余曲折僕のファミリーストリイ

藤井寺市 鈴木いさお

誕生日かそうかと渋い茶を啜る

妻と娘このごろやたら仲がいい

遠き人しのぶ三十三回忌

半沢直樹のない日曜なんて

藤井寺市 吉田喜代子

夏が行き朝の味噌汁旨い事

田舎道恋しい人や彼岸花

急に來たてんでこ舞いの秋日和

老夫婦愛していると云われたい

うまい事丸め込まれた気もするが

箕面市 大浦初音

どの人も誇れるものを持つている

趣味をもつ心豊かに生きる術

百歳になつてはきたいスニーカー

歳とれば丸くなるとは嘘だった

スペイン風邪コロナもくぐる一〇二歳

箕面市 酒井紀華

秒針がコツコツすすむ秋ひとり

満月と話せば勇氣湧いてくる

持ち前の明るさきつと福をよぶ

お隣の差入れうれし栗御飯

掘炬燵足もこころもほつとする

箕面市 出口 セツ子

夫も子も居ても独りの夜長です
我慢せず私らしくに生きる老い

一年の違い大きい体力差

熟睡ができず小説読みあさる

どんな時も明日を信じて生きている

箕面市 中山 春代

立読みのマスクが視野のじやまをする
引く事に慣れてコロナの日を過ごす

ペランタの人に道聞く行き止まり

大地割るマグマの如く曼珠沙華

古里が倍ほど遠くなるコロナ

箕面市 広島 巴子

神々し日の出に祈る今日の無事

新蕎麦の喉越しすつと里の秋

インフルの予防接種を開始日に

秋祭り自肅に孫の笛太鼓

イベントの駅弁買って旅気分

八尾市 寺川 はじむ

賞味期限切れてあけすけ言える術
あけすけもトランプ流儀攻めの術

触れてるうちにだんだん嵌り出すスマホ

川柳に触れてがむしやら電子辞書

味覚の秋へ甘さに負けてまたメタボ

八尾市 村上 ミツ子

コロナ禍へ密に咲いてるまんじゅしゃげ
昨日もきょうもずっと雨降っている

コロナ禍のふるさと遠いまだ遠い

戻ってはきたがわたしの椅子がない

三度のごはん幸せを食べている

八尾市 山根 妙子

金蚤が弱って光る秋寂し

猛暑耐え月下美人がそっと咲く

コスモスが揺れてあの歌口ずさむ

項目がだんだん増える給付金

朝ドラの軍歌で父と別れた日

神戸市 上田 和宏

妻という得難き宝得ておりし

偕老二人コロナで籠るのも楽し

徳を積むつもりで聞くよ妻の愚痴

鼻毛一本抜き取るまでの格闘技

断捨離を本気ですれば生きられず

神戸市 奥澤 洋次郎

アホなとこだけ受け継いでいる二人
遊ぶんはいいが運動かなわんな

カタカナで目隠しされるアナログ派

帰る人はいなくなる家彼岸花

手を離れた風船十月の天の中

神戸市 敏 森 廣 光

貧しさは平氣と言った妻どこに

どうしようワクチンあると言われたら

マスクの上目と眉だけで勝負です

金婚まであと五年です我慢しよ

秋風にふわりのつてる秋刀魚の香

神戸市 富 永 恭 子

一点の非も無い身かと問うバツタ

妹の丹精届きふかし芋

氣遣いが過ぎて話が進まない

子育てに移住も視野のテレワーク

雨降れば休みたくなるスクワット

神戸市 能 勢 利 子

注意してもらえらうちはまだ若い

マニユアルより孫の説明よく分かる

台風がゴーツーの邪魔して中止

ステイホーム体重計が見張ってる

百歳とのピンポン動画宝物

神戸市 松 倉 正 美

川柳にどつぶりはまり依存症

陽気な友逝つて寂しい家族葬

月明り妻がはにかむ露天風呂

半沢直樹三密で唾飛び散らす

つい飲み過ぎる買い溜めをした発泡酒

神戸市 山 口 光 久

折折の花が心を慰める

這い這いに期待してます未来地図

GOTOキャンベーン心にゆとり取り戻す

人並の暮しでいいと自己暗示

油断した途端に怪我をしてみましょう

神戸市 山 口 美 穂

口だけは元氣つすよと長電話

もう少しを生きるこの世がつらすぎる

言うだけは言うたが分からんやろうなー

ままならぬ脚へ一日ありがとう

亡父母が亡姉を呼んだと思ってる

神戸市 山 崎 武 彦

プライドを捨てると消えた肩の凝り

久し振りの反省会に生き返る

羽ばたこう花の匂いを抱く少女

夢追いの明日へ羽ばたく子の瞳

生きていく答欲しくて旅に出る

明石市 糺 谷 和 郎

古里の山河老いを暖める

子の巢立ち親は言わずに見てるだけ

猫舌も寒い日だけは爛が好き

病窓の夕日は落ちるのが早い

懐の寒さジョークで温め合う

尼崎市 近 兼 敦 子

心から笑える今に手を合わせ
心配をかけぬ声色知っている
旅先の計画いつも妻まかせ
長男はサンタ信じる芸達者
卒寿過ぎ父は可愛くなりました

尼崎市 永 田 紀 恵

ユニークと言えばなんとかなる評価
イントロの長い乾杯気が抜ける
みかんむく女の肌着剥ぐ気分
百までの伴侶は酒と決めている
考えはまとまったかなロダン君

尼崎市 藤 井 宏 造

うれしい日お頭付きのシシャモ買う
休肝日たかが一日でも試練
妻との出合い僕の大きな分岐点
ふる里をしみじみ思う大落暉
オットット油断大敵新型コロナ

尼崎市 藤 岡 り こ

旅行中入院かなと噂立つ
安心するとコロナ禍すぐに二波三波
本屋さんのはずがやっぱり飲んできた
つまみ喰いやはり子どもが見てました
身なりかまわぬ娘でもマスクは忘れない

尼崎市 藤 田 雪 菜

何気なく聞いた話にあるヒント
此処だよと草むらからの虫の声
墓参りおはぎ手作り媚を売る
野山に秋を描こう風の使者を待つ
入れるものないポケットが大きすぎ

加西市 山 端 な つ み

電柵し人と猪との闘ぎ合い
軽四の荷台でさつとお茶タイム
青空の下まだ稲作が出来る幸
身体と農機どちらが先にくたばるか
跡取りのいない我家の農不安

川西市 山 口 不 動

ナオミ勝つ黒いマスクにパワーあり
明け遅しトイレで覚めて二度寝する
我が身には四連休もざわめかず
朝冷に長袖出すと決めて起き
スマホ料下げる公約小さきひと

三田市 足 立 つ な 子

無聊とな言ってみたいよこの雑事
いつまでも吸えるはずない甘い汁
内定式孫の笑顔のオンライン
市議会選存じ上げない人ばかり
子供のころ聴いた話が役に立つ

三田市 上田 ひとみ

もう一年金風吹いてくる頃に

やさしい絵届きましたよありがとうございます

三食をしつかり食べていますから

私を納得させるそのセリフ

さあここでスイッチバック致します

三田市 大西 重男

ステイホームいやいや皆んなGOTOだ

ステイホームつついっ出ますひとり言

店先の試食なくした新コロナ

退職金の利息で年に煙草十二個

一日も無駄に出来ない余命です

三田市 尾崎 一子

マスクして病院行きのリュック持つ

出たついで買物しよう楽しもう

転んだらリュックが頭飛び越えた

無理するな欲もほどほど歳ですよ

酢橘ジュツ秋刀魚を焼いて晩ごはん

三田市 九村 義徳

手探りで生きがい探す喜寿の脳

三・一未だに増える汚染水

ポイントをずらす与党のテクニク

買わないと損した気する五倍デー

対策は手洗いうがい出かけない

三田市 谷口 修平

千年の風雪刻む屋久の杉

滑らかな口調で湧いた猜疑心

爽やかな彼女が好きなレモンティー

訳ありのヘルバーさんの細い腕

三日目は巨大になっていたキユウリ

三田市 野口 真桜子

恋慕の記憶再生ボタン押す熟女

夕風にひとりぼっちの砂の城

正直で寡黙な父の老いの恋

忍び逢う覚悟を決めて居待ち月

切り取り線あたりで私泣きはじめ

三田市 松本 ゆかり

セーラー衿白さ目にしむ衣替え

蒼すぎて秘め事すける秋の空

古都の秋それ行け紅葉する前に

村おこし案山子は数で応援す

直撃の予報もはずす神の村

三田市 村田 博

守備範囲狭めて取れた喉の棘

内緒話ポッケの底は孔だらけ

墓場まで針千本を抱いて行く

貧乏揺すり出れば湧き出す悪巧み

飲み放題タイムリミット来る無念

高砂市 松尾 柳右子

久し振り頑張る友の句が温い
送迎のデイサービスに救われる

献立もおいしく映える秋の膳

娘等の手を借りる八十路をつつがなく

デイサービスみんなマスクで目が笑う

宝塚市 丸山 孔一

私より先に逝くなどお互いに

人畜無害それでも恋の灯は点る

バス停に止まらぬバスが過疎を行く

新曲もお披露目出来ず歌手は泣く

マスクして駄洒落殺して卓囲む

丹波篠山市 酒井 健二

聞き流す術が近頃上手くなる

正直に話してロクなことがない

美しい足のチラ見は三度まで

バス停の先頭なぜか気張ってる

呑み代も自由も有って死ねますか

丹波篠山市 長谷川 善輔

稀に見る名月台風の予兆

大臣が誰に変わるが世は変わるまい

子を叱る気力も根気もなくなりて

台風来たる黒豆収穫気が焦り

平和だ猫の尾っぽで起こされる

西宮市 亀岡 哲子

不器用で下戸だが仲の良い親子

雨酷暑ごめんなさいと秋の天

名月を甲子園から教えられ

月見団子食べてお散歩して帰る

老いて尚お喋り好きな雀たち

西宮市 福島 弘子

老猫に寄り添うやんちゃ猫愛し

改めて家族の絆知るコロナ

声に出す般若心経朝清し

初飛来コロナ恐れぬヒヨの声

自粛にも慣れた強がり臍曲り

西宮市 福田 正彦

GOTOもトランプ並に些と不安

風食らい雲見て今日を満喫す

除外した人の評価が赤裸裸に

新型コロナ感染数が麻痺してる

討論会罵り合って本望か

南あわじ市 萩原 狸月

膝へ来る猫の重さにゆるむ頬

目鼻立ち微妙にずれて人気者

パンデミック地球の狭さ思い知り

熱戦も次の横綱見当らず

常識にかくも差がある三世代

奈良県 安福和夫

インフルの罹患コロナの比ではない

怖れ過ぎの声あちこち出始める

自粛してワクチンを待つ他はない

天命を受けてコロナが世直しか

非接触検温できる素晴らしき

奈良県 谷川 憲

青空にコスモス映えて人出なく

コロナ禍は世界の格差えぐり出す

コロナ禍を余所に虫鳴き花は咲く

インフルのワクチンだけは打ちにいく

喜寿過ぎて友もそれぞれ持病持つ

奈良県 中堀 優

第三のビールまたまた値上げなの

突っ込みがすごい昔はデカだろか

牛のごとノロノロだけど前を向く

何だっって定石ばかりいう彼氏

あの事を聞くと寝ていた血が騒ぐ

奈良県 長谷川 崇 明

コロナ禍に超音速の虫の声

空き缶に百円入れて買う野菜

茄子キュウリ側にマスクが二百円

郵便局誌上続きで顔見知り

久し振り酒酌み交わす俺お前

奈良県 渡辺 富子

ちぎれ雲つくづく思うひとりきり

想い出を乗せた浮き雲あかね色

断捨離の出来ぬ想い出燃え残る

終章へ神の伴走期待する

人間が絶滅危惧種になる気配

奈良市 宇賀 史郎

ハンドルの遊びに学ぶ暮らし方

子のピンチどうにも出来ず血が騒ぐ

どちらかが体調崩すフルムーン

意思疎通マスク越しよりメモを書く

恨消えぬ隣に日本ある限り

奈良市 加藤 江里子

コロナ禍でも忘れてならぬ温暖化

あどけなきマスク姿の三歳児

月を観るしばしコロナは忘れましょ

ワクチンに未来を託し生きてゆく

虫の音に癒されている昨日今日

奈良市 高橋 敬子

だからだを変えらる秋日のスニーカー

置いた眼鏡に試されている記憶力

やり出すと無限に増える家の用

遅くなる日の出目ざめも遅くする

こんなもんかと楽しみな日にくる嵐

奈良市 辻内 げんえい

注意してそれでも転けて歳を知る
百寿まで粘ってきつと生きてやる
平熱も油断大敵マスクする
新種目指しメダカ飼育が趣味こえる
自由にしていいとは言えぬ内の孫

奈良市 山本 昌代

コロナ禍に友と交わしているエール
お食事も斜め向いで食べてます
ギョツとハグとても嬉しいお出迎え
あのときの言葉刺さったままでいる
食欲は旺盛ですとスニーカー

奈良市 米田 恭昌

コロナ禍に自粛自粛とやるせない
コロナ禍に擁護め直す厚労省
豪雨災害山の叫びが聞こえそう
娘の手術会えも出来ずに祈るのみ
また今年も虎は遠吠えするばかり

生駒市 飛永 ふりこ

爽やかに揺れるコスモス芯ぶれぬ
紅葉にホップステップほら弾む
じゃんけんぼん最初はグーと言ったのに
歩きなさい言わんばかりに膝痛む
父植えた松葉牡丹が本気出せ

香芝市 大内 朝子

こぼれ萩心残りがございます
この年で誤嚥をしたら大変ね
顔の皴気にした頃は若かった
まだ何か起きる予感の澄んだ空
生きてます国勢調査明記する

香芝市 山下 純子

GoToで北へ南へフルムーン
コロナも知らず輝く棚田黄金色
明日香村の案山子今年は巣にこもる
澄んだ空だけ地球は病んでいる
散歩道雑種のポチは脇歩く

和歌山市 上田 紀子

辻一つ曲がれば秋が顔を出す
平凡な暮らしに馴れて覇気薄れ
繕いながら一頑張りの七十路坂
生き上手自分のカラー崩さずに
守り神消え命綱さえ切れる

和歌山市 土屋 起世子

古びても昭和の利器がいと嬉しい
躓いても諦め切れぬ夢がある
独り住みひとり芝居がうまくなる
すいすいと進んで壁にぶつかった
目に見えぬ壁で出口が分からない

和歌山市 古久保 和子

その愚痴はとろ火にかけてきたようだ
掛け声がなければ腰が上がらない
切り身では泳げないこと教えねば
本好きも昼寝の人も図書館へ
夏過ぎて体重計はもう乗らぬ

和歌山市 堀 富美子

うつコロナ今日もハートと闘ぎ合い
久びさに子と再会へマスク越し
デパ地下でうつを晴らしている試食
お若いと言われた背なを曲げられぬ
軽がるが重荷になった布団干し

和歌山市 松原 寿子

一人居て得意メニユーが失せている
面影がある日上座へ追い求め
いっぼんの釘に助言が生きている
逢えぬまま暦も流れ枯れていく
つまり迷いが深くなつて秋

岩出市 藤原 ほか

じつくりと煮込むと母に近づける
駆けてみるやはり性にはあつてない
グーチヨキパ決断する時使つてる
迷つた時もあつたが幸せだ
パソコンに悪戦苦闘日々つづく

海南市 小谷 小雪

いたいけな子供もマスク新社会
雨降りも中くらいならいらつしやい
少子化にグランド広く広くなる
できるなら可燃であつてほしい恋
自粛しても恋という木に水をやる

紀の川市 山東 日出男

被災地にタオラーたちの救世主
神妙に白旗かかげ午前様
戦場に行けば仏も鬼になる
出世魚とこゝろ変われば名も変わる
台風の巨大化生んだヒトの罪

橋本市 石田 隆彦

胸張つて歩くと叱る影法師
新しい朝を踏み出す靴光る
抽象な答弁謎を深くする
公文書お見せする時黒く塗る
痴呆防止知力を絞り五七五

ひとこと募集

一行15字 25行まで 採否は編集部に一任の事

川柳塔の

川柳讃歌

⑬

上方芸能評論家 木津川 計

若人を死ぬ気にさせた「海ゆかば」

丹後屋

肇

肇さん、辛い歌を思い出させてくれました。「死ぬ気」に僕をもさせた歌なのです。いまこの歌を聴くと涙が出てくるのです。「海ゆかば水漬く屍山行かば草生す屍大君の辺にこそ死なめかへりみはせじ」、この歌を歌って特攻の学徒は散っていったのです。敗戦時、僕は十歳。一日も早く少年航空兵になりたかったのです。国民学校（小学校）へ入ったその日から「鬼畜米英」「撃ちてし止まん」の教育でした。肇さん、戦後の有り難さです。

喝采も花道もない母である

藤澤 照代

照代さん、僕はいますぐ貴女のお母さんに会いにいきます。手を取ってお礼を言いたい。よく照代さんを育ててくださいました。当り前の普通の主婦なればこそ華やかな場に出ることもなければ栄光の花道を歩むこともな

かったのです。ひたすら家族のために尽し続け、何一つ求めようとせず、自らを犠牲にして働いたのです。お母さん、せめてこれからは安心して好きなように過ごしてください。それが照代さんの贈る心からの喝采と花道です。

懸命に生きてきて只のばあさん

米澤 俣子

俣子さん、「只のばあさん」である筈がありません。「懸命に生き」てこられたのですね。うれしく楽しい日より辛い日や泣きたいときが多かったことでしょうか。一つ一つ乗り越えてきたのです。どれほどの努力や考えが必要だったことか。アフリカでは一人の老人は一つの図書館に値いすると言われ、尊重されるのです。貴女も地域や川柳塔の図書館なのです。その蔵書を周りの方たちや柳誌の仲間に見せてあげ、よろこばせてください。

これだけは言う孫三人を有り難う

伊藤 寿美

寿美さん、よかつたなあ。三人のお孫さんに恵まれたのです。僕には一女二男の子供がいて、都合四人の孫がいます。わが子以上に孫が可愛いのはなぜかと思うに、可愛いが暇がなかったのです。わがことに懸命でかまえないかったです。現役を退いて知る老後の有り難さです。孫には将来への希望がありま

す。その希望を三人にも抱ける寿美さんの喜びです。「有り難う」は三人を生み育てたお子さんへのお礼でもあります。幸せ一杯です。振り向けば共に歩んできた轍

久保田 千代

僕はいま「川の流れるように」を思い出しているのです。「知らず知らず歩いてきた長く長いこの道、地図さえない、それもまた人生」と千代さんはご主人との暮しを振り返るのです。でこぼこ道や曲がりくねった道だつた。せめてこれからは川の流れるようにゆるやかであってほしい。千代さん、叶えられませう。共に苦労して辿りつかけたいまのおだやかな日々、辛かった記憶は遠く、「よく乗りこえてきたねえ」と言い合えるよろこびです。

七十代は記憶にないほど早かつた

谷口 義

年をとるほどに一年は早く過ぎ去ります。七十代は一年毎に老化しますが八十代は一月毎、九十代は日一日終末に向かうのです。私は只今八十五歳ですから老いは急速です。生き長らえる同輩に数か月ぶりに会うと染みも皺もふえているのです。相手も私を見てびっくりしている筈です。八十五の平均寿命は六、四六年だから九十一まで存命とはいえ、あと六年しかありません。義さん、ご自愛下さい。

西尾栞句集『水鶏笛』

「父・母」

初めて「父」という題で作った句

頭ほど光らぬ父でありにけり

岳父昭和三十一年八月に二十七日歿

時計のような生涯とちた七十一

真面目さは かんてき村長とも言われ

臨終は手塩にかけた掌を握り

患いは七日諦らめられぬをあきらめる

厳父昭和十七年一月四日歿

戦捷の春の臨終安かりき

マニラ陥落きいて享年六十九

十八人の孫に寝棺はとりまかれ

物不自由二つの口を今日減らす

ソファーに刀自という名のかさひくし

矢倉寿司だつせと遠い耳へきかし

親子二代のへんくつに母は老い

張り替えた障子の中に母います

阿保になつときなはれという母があり

見送りの母ポケットへ無理に入れ

うす糊がきいてる母の小さい足袋

木の芽あえ母すこやかに八十九

昭和四十二年十月十四日歿

手提袋持たず寝棺に又哭きぬ

鯨幕の上に万朶の秋桜

母逝きて七日の鐘の冷えて来る

覚悟とは別に七日七日の寂しさよ

「河内の灯」

習いたての手品は妻にしてみせる

アベックに違いはないが五十八

ゴツゴツと言うて言われて共白髪

添寝して父の無情を唄にする

夫婦読本ねまきは派手にせよという

ネクタイをしめしめ喧嘩のつづきする

おつうじのあった話題も老夫婦

老妻に手を貸す梅の径でよし

自選集

小島蘭幸

つぶやき川柳涙が止まらなくなった
孫の句集妻も私もまたひらく
句集手に孫とツーショットが載った
一生懸命お札の手紙書く五歳
耳を澄ましてごらん つぶやきが面白い

新家完司

名水と米が支える長寿国
元気かと鳩が窓から覗き込む
タンポポの綿毛にふわり追い越され
自粛し過ぎて蒲団から出られない
海底に戻り珊瑚になるもよし

高瀬霜石

消しゴムもぼくもまあなくなつて冬
休肝日明けの青空がまぶしい
ナメクジの歩みまんざらでもないぞ
ネジ山が減って戦士も好々爺
貸しまししょう手切れ金だと割り切つて

竹治 ちかし

応答も途絶え回天海に消え
師の別れ方程式は解けぬまま
日の丸の白は誇りか赤は恥
沢山の神在月に出会う神
神が来て神が帰つて冬の風

津守柳伸

米寿とや今治タオル贈られる
涼風がじつとさせない毛糸玉
レジ袋NOでひそかな優越感
名月も眺めて欲しい窓あかり
胡蝶蘭届き米寿の貌になる

都倉求芽

ポリープを切除 体力も切除
瘦せた瘦せたと言う尻の骨
敷の位置どれも同じの紙パンツ
一日中マスクも要らぬ居間にいる
デイサービス秋の朝顔眼にやさし

西出楓楽

傘寿もう一日ずつがおまけです
傘寿もう仮面は一つあればよい
語尾ちよつとほやかにしておくマスク越し
聞き上手笑い上手になれぬまま
好きでない納豆食べている自愛

仁部四郎

修正が歴史に効くか九十九折り
九十九折りまた九十九折り民主主義

誕生日人それぞれの九十九折り
念佛を唱え八十路の九十九折り
わが影を道案内に九十九折り

福士慕情

津軽秋りんごも米も恵比寿顔
利酒で微妙に舌が酔うている
身に余る話だ眉に唾つける
遠慮することを美德と勘違い
阿吽像立ちっぱなしで辛そうだ

松本文子

外出なし浮かない顔のカレンダー
汚れたハンカチ私を守ってくれたのだ
グランドの雑草アスリート達の涙か
湖に今日の一句を見て貰う
家中の小言鼻唄で返す

三浦強一

漬物樽はしやぎ懐かし母の味
昭和一桁語部となる戦の愚
便利さを追ったあげくの倍返し
脳活は日日新聞のコロナ記事
ワクチンを待つ秒針が進まない

三宅保州

遺書に書くこと増やしたり削ったり
日記帳主張と妥協繰り返す
罪滅しのつもりで書いている日記
途中下車できる旅なら参加する
飲みすぎに注意と書いてない葉

村上玄也

新野党顔も名前も変らない
堂々と茶番演じた総裁選
勝ち馬に乗っかり主導権競う
たたき上げ総理とメディア持ち上げる
新総理市民の暮らし変らない

森山盛桜

水兵リーベ知らずとも生きられた
串刺しにされて動けぬイとロとハ
せめてアイドリングがあったらコロナ
牛車なら見える童話という景色
カスハラは無い人情の駄菓子屋だ

八木千代

萩のように静かに燃えて終るのか
終る花
一瞬に名残りにかわる落椿
椿は火萩はわたしの中の水
霧の中誘うように花二つ
先ずは私が枯れてじつくり考える

山本 希久子

日常を営むウイズコロナの世
商店街のにぎわいへコロナの踏み絵
しんみりと秋残り時間を生きる
三食の膳ジョークの足りぬ老い二人
月日だけ足早に過ぎ十二月

川上 大輪

誓約書書いて野となる山となる
心臓の手術私は寝てただけ
頑張ったのは私よりも担当医
生きているみんなに感謝するために
麻酔からさめた時には傷だらけ

板尾 岳人

長生きの秘訣人を喰っている
長いこと生かされました有難う
六甲風聞こえるうちは生きている
来年はベーターペンに逢うつもり
山小屋で除夜の鐘聞いている

居谷 真理子

九月には九月の味の冷ややっこ
排気ガス浴びて端っこ歩いてる
マスクして帽子で隠すツノとキバ
山や河は正しい日本語を話す
日めくりもいいね昨日を破る音

北野 哲男

国の良さ 外国人に教えられ
スーパ―に四季を忘れた棚がある
儂よりもかかりつけ医が先逝った
ああ卒寿カウンタダウン覚悟する
三回目これで終りと書く賀状

木本 朱夏

こぼれ萩遠いあの日は還らない
巢籠りをするには惜しい秋の天
デラシネのような生き方だつてある
着信音いつまでひびく秋の底
秋ですぬ思索にふける金魚たち

麻生路郎語録

店に出入りの植木屋から、鉢植えの小さな蘇鉄を買った。鉢の表面に小さな株が三つ親子のように押合っていて、それぞれ青い葉を出している。ソレを机の上に置いてジッと眺めていると極小のものが持つ特異な愛着を感じさせられる。只ひとりいる時、私のよい話相手である。

(「川柳雑誌」NO・147より)



森の集句

『川柳塔創刊80周年記念句集』

原 章 峰
はら しょう ほう

白い雪 一二で吸うて十で吐く
 ねむくなる楽しみのある足の裏
 ひっぱるとどこかで返事する絆
 ダンボールたたむとただのおじいさん
 一分ずつ狂うさくらもわたくしも
 錆鮎の四一五匹 月の匂いする
 ヒラマサが釣れてる所人が死ぬ
 青空の端から食べるブランクトン
 海軍の歌をうたうと咳が出る
 かなづちで氷を割ればヒロシマ忌
 人間魚雷にんげんが蓋をする
 日の丸の白いところは民の声
 纜がゆるむと鳥が動き出す
 一本のさくらと余念なく暮らす
 人の世に軒下がある雨が降る

(平成16年7月17日 発行)

温故知新

小出智子川柳集『落の臺』から

風呂敷をかたく結んで齢かな
 母背負う力を少し残しとく
 子には子の家があるので帰っていった
 かなづちのまままで一生終りそう
 冷蔵庫疲れが出なければよいが
 許さねばならないものが夫婦にも
 生き方の一つしばらく帆を降ろす
 安眠を夫婦で尋ね合っている
 告げ口はきつとユーモアなのだろう
 不意に闇三面鏡はすぐ閉じる
 納得をするのは庭を掃いてから
 寺の娘は寺へお嫁に行ったそう
 已むを得ぬことだと書いている日記
 夫とは深いはなしをしておこう
 めぐり逢えたところへ葉を入れておく
 鳥たちも帰って来たという便り

水煙抄

西出楓楽選

広島市 松尾信彦

泣きたいと泣かずに書いた古日記
洩れた句も思い出深いエピソード

この話したなと途中気付く老い
さもありなんコピーの日々で黄昏れる

例えばの話で杖を持たされる
生き甲斐はケアのつもり野良仕事

本屋への出費が嵩むコロナ来て
ゴーツートラベル トラブル作り旅終える
堺市 古川光雄

神社へもマスクを着し参拝す
定年後なくなつたのは梯子酒

孫さえも来なくなつたよコロナ来て
アベマスク心こもらぬ送り物

和歌山市 倉橋悦子

生き延びて思うメリットデメリット
食品の調達のみ外出で

エアコンに休み与えて秋を食む

わからない人だコンニャク裏表

町角の指定席なら古本屋
八十路ゆく正に老後のど真ん中

今朝の膝畑仕事はノーと言う
喜寿だもの恋だ愛だの詠んでみる
躓いた石は今ではコレクシヨン
愛された覚えがあつて愛します
しみじみと別れが出来た家族葬
おしゃれして出かけた先は医院です
米子市 妹能令位子

木犀の香に包まれる朝の幸
コーヒーに木犀の香をブレンドす
何にしようスマホ指南の夕支度
出汁効かせ旬を生かした秋の膳
笑っているマスクの目まで柔らかい
浅い傷今のうちなら出直せる
広島市 田桑恵子

瀬戸内市 宮宅 比佐恵
今度こそ抱かせてやって拉致家族

隠しても心のぐちか背が曲る
写経する煩惱すてて浄土ゆく
幸せな生活いつものシャツを干す
コロナ禍が趣味も絆も遠ざける
どの顔も十人十色の個性でる

生駒市 児玉 規雄

三差路も四差路もある人の道
振り出した人生双六戻れない
天気より毎日気になる新コロナ
年越しは願ひ下げます新コロナ
書く事が無しと書いてる日記帳
来る年はアフターコロナを祈ります

大阪市 森 廣子

さっぱり釣れぬ魚も自粛中らしい
コロナでも空に綺麗な十三夜
吊し柿甘くなれよと神無月
台風日照り案山子ほんとにありがとう
駄目ダメと煽られ自信揺らぎ出す
おっかなびつくりGOTOの旅気分

門真市 坂本 星雨

勾配のきつさへ燃えてくる闘志
踏み締める一步へ変わる風の音
どん底の底でやさしい鬼になる

独り居の扉は日日に重くなる
夜ひとり癒やしてくれる虫の声
満月の光を浴びて生き返る

名古屋山本 三樹夫

GOTOトラベル経済救世か
朝もやの人それぞれの散歩道
この地球人間達が壊しすぎ
スパーへ子が誘い出す思い遣り
満天に愛犬の星見付け出す
横断歩道安全神話崩れゆく

安来市 原 徳利

安倍色に昔色塗って隠す染み
砂時計ひっくり返し二度寝する
老い二人ゴシック体と草書体
ま心の感謝は鬚斗がついて来る
福耳はいいことだけを聞いている
ススキを活けて名月と二人酒

八幡市 武田 悦寛

メダカにもプライドがある仁淀川
定年後紐ゆるゆるで生きている
文庫本2冊リュックに始発駅
青空に忘れ物した雲ひとつ
何事もなかったように夫婦箸
喜寿迎え春夏秋冬急ぎ足

倉吉市 堀 かずこ

病む時に励ます友がいてくれる
窓たたく夜中に恐怖風の音
ほっとする初秋の風が頬なでる
強くなれ沈む心をけちらして
陽が沈む明日もいい日であるように

境港市 藤原久直

包み込む気持ちがあれば二重丸
時として言葉を包む事もある
喜怒哀楽老いの涙は真珠玉
蝉しぐれ一緒に昼寝しませんか
大相撲テレビの前が指定席

米子市 川本美津子

歳聞かれ忘れまじたと返事する
何時の日か腹を抱えて笑いたい
物事が闇に消えてく政治の世
友と会い心の闇が遠くなる
金婚も過ぎて二人の核家族

鳥取県 田中重忠

夕焼けを見送っている影二つ
幾山河越して会いたい人がいる
趣味多才老いてくるのがおしまれる
木の天辺で木通あけびが熟れてだれを待つ
零余子飯今日は女房の御命日

松江市 山根邦代

一粒も粗末に出来ぬ戦中派
ドライブの道連れ守るイワシ雲
ふる里は秋の味覚が待っている
色々なマスクの顔にごあいさつ
お日様が笑顔をくれてやる気出る

美作市 岡本余光

平凡をかみしめている冷奴
平凡に暮らす努力が怠れぬ
神仏に加護願うとは弱い僕
今のうち考えておく死に支度
改革でハンコは最早断末魔

尾道市 小畑宣之

ジイジ良しジイと呼ばれ腹を立て
大国になれずとも良し平和なら
傘寿過ぎ少年の夢忘れない
あれやこれ忘れて日々が幸せに
恩返し酸いも甘いも飲み込んで

三原市 笹重耕三

缶ビールプッシュ総裁選を見る
ホッとするエレベーターの独り占め
年金のあしたへ息を整える
氷山が溶ける困ったことになる
鉛筆と紙を持ったらウオーキング

三次市 伊藤 寿子

小脳ブチン切れた真夏の朝の事
一寸先分からぬものと思ひ知る
夢ばかり見てた二カ月もの間
ああ無情家族よごめん出る涙
前後左右感謝のこころ闘病記

広島市 小川 道子

天高くエイトビートで打つ鼓動
産声をあげた一句が愛おしい
言の葉の海で只今遊泳中
兎ウサギわたしは夢を見て跳ねる
往生際が尾を引くボクの弱さかも

大洲市 花岡 順子

八起目のチャンス信じている女
欲全部捨てると仏さまになる
叩かれる今こそチャンスだと思ふ
矢印の通り進んだのに迷う
負け犬の意地は再起への切符

福岡県 本田 さくら

ちゃんと見よつまづく石に叱られる
鹿が鳴くわたしも奈良へ行きたいと
散歩道真つ赤に燃える彼岸花
じじばばの似顔絵今日は敬老日
ばあばのスリッパ一歳半が履きはしゃぐ

佐賀県 真島 久美子

錯覚に空耳ふわりふわり秋
ペディキュアに気付く男と会っている
抱くたびにかたちを変えてしまう風
柔らかいドアは間違ひなく悪意
大それた選択をする枯れた指

宮崎県 黒木 栄子

親切もほどほど節介はしない
街に慣れ訛りに慣れて地に根付く
炎天の花にバラソルさしかける
丸い背の温き老婦に母を恋う
価値観の違うがままに四十年

沖縄県 あら さくら

浮かばぬ句辞典まくらに夢の中
世変りに過去の歴史をふり返る
家族内スマホで繋ぐデイスタンス
コロナ禍で咳払いさえままだらぬ
愛犬が夫婦ゲンカに吠えている

黒石市 石澤 はる子

軸足がまだふる里を向いている
狭く棲んで得意になったカニ歩き
記憶障害五軒目の店あたりから
心機一転まずはエプロン新品に
巷ではかなり変人らしいボク

富士見市 中島通則

不摂生を自粛太りのせいにする
交流が減って世間が狭くなる
アナログ庁も作って欲しい高齢者
生きる意欲高めてくれる孫の笑み
秋風を連れて来たよと赤とんぼ

横浜市 加藤佳子

マスクする新日常に倦きている
終息が見えぬコロナに増す不安
マスクする辛さに老いの家ごもり
再開の句会にエール送り合い
10万円使ってしまう憂さ晴らし

岐阜県 喜多村正儀

呼びに来た人も加わる栗ご飯
花まるの予定が並ぶ秋曆
百円で跳ねる木馬がいとおしい
満天の星が奏でるノクターン
葬列を離れて泣いているひとり

浜松市 中田尚

近寄って本音を言っけらわられて
度の強いメガネ掛けても雲の中
メガネ掛けルーベ付けても読み飛ばす
タブレットスマホにらんでドライアイ
下手で良し手書きの文字はあたたかい

豊橋市 小松くみ子

自粛中テレビの前でもみじ狩り
待っているコロナがなんだ金メダル
ミニ寄席に名前知らない顔馴染み
曲ってるよボンと背中を叩かれる
半額のシールをそつと隠すゴミ

大阪市 石田孝純

大器晩成もう咲いたって良い頃だ
大器晩成まだ咲かぬからまだ生きる
大器晩成未完の大器かも知れぬ
バーチャルにおいておいでをされている
バーチャルと浮き世スマホでやじろべえ

大阪市 阪本秀子

また何時か笑いあう日がくるのかな
コロナ禍を絶つワクチンを心まち
砂浜に腹ばい波の響ききく
良友は何時ほどよく戒める
追憶の糸をたどれば父母のこと

大阪市 柴本ばつは

白一色母のふる里余呉の湖
正直に生きていい音たててます
隠し事も無いので爆睡だ
自作自演亡夫の役もしています
人生はさあこれからだ卒寿です

大阪市 樋口 眞

野仏を焔で包む彼岸花

萩咲いて体の動き軽くなり

冷も好し爛もまた好し秋の夜

ほろ酔いで見る名月は天心に

ライバルを余裕をもつて褒めている

池田市 倉本 一 弥

切れ味鈍り何故か友達増え出した

着陸のあの減速にハラハラし

イオンモール熱中症を避けにゆく

春夏スルーちくわのようなこの一年

マスク越ししばらくですとご挨拶

泉大津市 助川 和美

若者の手にはりついているスマホ

唸る蚊がまぎれ飛ぶ夜の寝苦しさ

夏草が手に負えぬほど丈延びる

立っているだけの案山子で実る秋

テレワークする夫待ち料理冷め

河内長野市 穂口 正子

ポケットの中で拳が震えてる

あつたはず言つたはずやと手に負えん

記念日は抜からんように薔薇の花

譲られるはずだすつかり婆ちゃんに

亡母の歳越えて見上げる雲の峰

堺市 羽田野 洋介

思い出すまでの時間が長くなる

なかなかのものとおだてりやつけ上がる

後出しのじゃんけん負けるはずがない

チヨイ寝でも気分転換爽やかに

アドレスを違え締切り間に合わず

豊中市 貝塚 正子

廻り道ポイントかせぐ万歩計

行き止りだったら元にもどるだけ

時間無いあんかけうどん熱すぎる

店員の来ぬまに値札盗み見る

大海の鯛大魚に似せて群れ

豊中市 齋藤 奈津子

始球式どこへ飛んでもご愛敬

マスク着用少なくなつた立ち話

高級魚サンマの煙消える路地

朝の庭蜘蛛の仕掛けに引つかかる

投句投函テスト終つた日のようだ

豊中市 松田 蟻日路

妻ランチ俺洗濯とカップメン

二歩下がる前に三步も進めたか

ちよつとの差僕にはとても深い谷

梅干しのしょっぱさかじいちゃんの皺

インフルが胡散臭気にコロナを見

寝屋川市 岡本 勲

ダイエツト妻は奇跡を待っている

女房のこない面まだあった

女房から愛のカケラを発見し

定年後おれの値打ちは年金額

生きる価値ここにあったかゴミ出し日

羽曳野市 黒木 ひとみ

田水抜き稲穂じゆうたん色変る

稲刈られ案山子残され役目終え

彼岸花時を忘れず土堤染める

つる首の秋明菊に祖父偲ぶ

何もない道につまずき老いを知る

大阪府 大浦 福子

父母よ命頂きありがとう

君に会え愛し愛されありがとう

産声の我が子の出会いありがとう

そこそこに元気で今をありがとう

この世来て出会えた全てありがとう

神戸市 奥田 宗光

この駅で出会ってからが腐れ縁

たわむれが本気になった月明かり

まかしとけ言うてるわりに割り勘に

しつかりと結んだはずの赤い糸

タッチの差最終電車ドア閉まる

神戸市 米田 利恵子

爪ばかり伸びる気がする自粛中

令和二年ああ無事だった日記帳

肩凝りもコロナ禍ですと寝てばかり

傘貸した方は覚えてるあの夜

給料も同じ女性の保安帽

神戸市 齋藤 隆浩

夜の街行けばウイルス寄ってくる

肩書きより論吉の方が魅力的

駅弁と入浴剤で旅気分

スマホでも電話とカメラ使うだけ

渡り鳥コロナ横目に海外へ

神戸市 山根 弘華

半額に財布のひももゆるみがち

どつぷりと川柳につかる秋夜なが

若い子にスマホおそわり四苦八苦

老い一人気楽にくらす日々平和

豆台風去って我が家はまた一人

尼崎市 清水 久美子

多少なりともかかっているコロナうつ

砂時計置いて手洗い嗽する

私の咳をインコが真似をする

生姜湯で一息入れる寒露の夜

所持金を人質にする電子マネー

太陽が大地の恵み応援し

失敗で泣いた分だけ強くなり

どん底でやっと拾った再起の灯

一匙へ頑固なシェフの隠し味

YES NO上手に使い世を渡る

伊丹市 延寿庵 野鶴

こぼれ萩小さい命を開花させ

センス問うマスクの色を選りすぐる

まだ学ぶこと無限大歎異抄繰る

掘り下げて行けば行くほど角が立ち

私に戻る音する夕餉の灯

伊丹市 岡村 風琴

断捨離で部屋は身軽な住みごこち

熱帯夜蚊の羽音にも汗が出る

笑い声過疎にもひびく盆休み

会議中空氣が読めぬオンライン

ありがとう妻のやさしさ五十年

小野市 田中 辰夫

瑠璃色の空は明日の夢の色

羽繕いまたくり返し明日をとぶ

子に託すパトンの中は平和のみ

ありがとういつかあなたに飭する

雪がやみ童画の里が出来あがる

三田市 稲角 優子

票求め仮面笑顔の市議候補

街の中ファッションマスク闊歩する

検査するあなたの病お歳です

デジタルについていけない高齢者

アナログに居場所みつけた八十路です

三田市 馬場 貴美江

一つして一つ忘れて歳重ね

句を詠むも山谷あつてもう四年

ローンなし生きた証のマイホーム

聞いてても主語がないよと子に言われ

ウォーキング今日のコースは足まかせ

三田市 森 玲子

テレビドラマ解決します二時間で

神仏信じて人を信じない

大欲は小欲よりも怪我多し

二人三脚妻と私の五十年

閉店します何と悲しいコロナかな

宝塚市 太田 としお

新聞に時事川柳のネタ溢れ

朝刊をじっくり読んで一時間

時事川柳こねくり回し一時間

投稿が載れば新聞安いもの

しょーむないテレビ眺める休刊日

宝塚市 岸田 万彩

丹波篠山市 横溝安子

新しい靴も帽子もみんなすき
新米の炊ける匂が部屋に満ち
顔のしわ一つ一つに思い出が
あの世への旅の覚悟はまだできぬ
遠き日の祖母の思い出箱まぐら

三木市 山口ヨシエ

GOTOでサンダーバードの客となる
幽谷の白山神社ご朱印を

加賀の里旅愁に添える蕎麦の花
千年の歴史を背負う宿の膳
グリーン車で余韻抱きしめ帰路に着く

奈良市 尾畑なを江

アルバムで想い出浸る過去に居る
夕顔を初めて食べてレシビ増え
家事すべて速度がおそくなつて来た
この頃はテレビCM増えた気が
分け合つて猫と甘栗午後の二時

奈良市 仲西賛郎

冷たい風着替えに惑う秋半ば
スタートダッシュ強気で押しの新総理
妻の留守何か不安で落ち着けぬ
不器用でスマホ使えぬなげなさ
馬耳東風もう聞き飽きた妻の愚痴

奈良県 室田行久

コツコツとりハビリ成果湧く自信
杖使うこんなことにもコツがある
杖つきつ二足歩行に進化中
痛み減り弛んだ脳を再起動
病室のカーテンの内我がお城

和歌山市 北原昭枝

味のある話に耳を傾ける
唇を噛んだあの日のあの場面
それなりの夢を持つてる蝸牛
いろいろと混ぜて人生絵の具皿
甘いもの内緒で食べて肥ゆる秋

和歌山市 鍋嶋澄子

星空を淋しく思う今は秋
きしむ音校舎の廊下子ら走る
木造の校舎で学ぶノスタルジック
山道を備長炭の里たずね
GOTOで山海の美味堪能す

岩出市 村中悦男

我が家の美田競つて囲む彼岸花
まだ読み終えぬ消える字幕の早いこと
コロナに風邪に更に高齢抱く不安
三密よそに妻の手をとる田舎道
あと二年退職息子祝いたい

能天気悩みなないのが悩みです

今朝の妻含み笑いが気に掛かる

名月を窓辺へ母の車いす

お若いと言われ思わず背を伸ばす

和歌山市 定松 宏枝

テレビ三昧言い訳出来る自粛中

野爾観戦テレビ機敷に根が生える

自粛の春あれから秋に衣替え

秋風に背中押されて街歩き

和歌山市 西川 千鶴

倦怠期危険水域越えました

退職日見上げた空は無量大

真夜中のテレビシヨップは魔物です

嬾やかな女結びに見る決意

和歌山市 福島 一雄

マーチから散歩スピードブルースへ

生きてきた証は孫に引き継がれ

独り立ち慌ててするな早くしろ

昼食を二回抜いたが続かない

和歌山市 まつもと もとこ

君の香を感じて狂うディスタンス

トランプを無視できないねレムデシビル

アナログの長所は褒めて称えよう

令和版半沢直樹倍の倍

初恋の思い出胸に鍵をしめ

石仏に掌を合わす旅終りなく

日の丸を認めぬ子らの不幸せ

すくすくと育つ雑草見て育つ

和歌山県 森下 よりこ

目の隅にいつも子供が居た昔

古民家といえば聞こえのいいわが家

夏の疲れか昼寝習慣止まらない

自転車で買物マスクつい忘れ

鳥取市 上山 一平

記念日を内輪で祝うお赤飯

マスクの世咳ひとつして睨まれる

かさかさ雑木林も冬仕度

落葉掻き焚火できぬと芋が泣く

鳥取市 大前 安子

三密へマスクとマスクまたマスク

スマホ持ち家族の行方油断せず

子等の羽こんなになくなったのだ

一日があつと過ぎたりウガイする

鳥取市 坂本 とも湖

スキの穂風と楽しくジャレて見せ

好きなのに風が帽子を追いかける

君大人泣いて笑っておおげさな

打って勝つ剣よりペンは書いて勝つ

鳥取市 山野 すみれ

鳥取県 飯野 菖子

不揃いのりんごも切れれば旨いジャム
空いた椅子誰か座ると温かい
対応のまずさ大きなシミになる
極楽へ行けるメニユーにある感謝

ゆつたりと鋏を休めた五月晴
貧しさに生きた昭和は宝物
夕焼が私を包む今日の幸
母の膝帰ってみたいあの頃に

倉吉市 大羽 雄 大

鳥取県 下田 茂登子

伐採に裸になったボクの家
遊ぶにはお足いるけど今自粛
俄雨傘のひとつが縁となる
鉢合わすゴキブリちよつと身構える

食べること毒だと医師に注意され
考えて見れば一人もよかつたな
今少しボケてはならぬあいうえお
一人居の息子残して逝けません

倉吉市 宮田 風 露

鳥取県 西谷 悦子

自由奔放コロナ世界を股にかけ
お出かけもスッピンでよしマスクする
兼題と闘い脳が動き出す
ボール蹴り子供になつて燥ぐ老い

美しい山の紅葉テレビから
マラリアの蚊の駆除日本の蚊帳から
朝夕寒く本格的な秋になり
プロ野球ホームラン競争面白い

倉吉市 若松 由紀子

鳥取県 本庄 汪ちやう

独り居に早々灯り秋の暮
解けぬ謎亡夫に時々聞く独り
寝てないで歩け歩くと万歩計
よい人と思われたくて嘘ひとつ

一休に真ん中通れと教えられ
無欲だと語る貴方は神様か
さりげない心くすぐる所作に惚れ
いい気分月の光に千鳥足

境港市 中井 虎 尾

倉吉市 伊藤 嘉 昭

私は未熟のマンマ今八十路
安倍辞任うしろ姿は無責任
口二つしゃべる口あり食べる口
なげくのはよそよ今日はずでに過去

飛び立てよ時には帰れ親願う
庭静か今日の平和をかみしめる
言うこととすること違うと子に言われ
振り袖が着たいと孫も似合う年

松江市 相見柳歩

祈つたら届くところに神ほとけ
ハードルが並ぶ声援受けて跳ぶ
再起して神の試練をクリアする
旅の果てまだ先がある来々世

松江市 中筋弘充

神様も不急不要で引き籠る
よく喋る人も黙ってお骨揚げ
アナログの体温計は当てになる
象形文字の最たるものは凸と凹

出雲市 黒目ひでお

人脈を活かして夜明け引き寄せる
荒波を乗り越えやつと喜寿迎え
足枷を外し飛びたい大空へ
菅首相やる気満満グータツチ

雲南市 永見安子

がむしゃらに生きて来た道物語
生きられる本音で語る人がいて
しつとりと降る雨まぶた閉じてくる
コツコツと作つて猿に食べられて

津山市 高橋由紀女

百年の年輪災禍越えた跡
正直に生きて優しさ積む余生
コスモスに平和を願う赤トンボ
鈴生りの柿を見守るカラス達

広島市 常國喜好

真っ白なページが続く予定表
ポックリを祈っているがすぐはイヤ
摩る手を止めて指折る五七五
先ばかり考え今を楽しめぬ

竹原市 若年幸子

名月へ夫婦喧嘩はおあずけに
シャッターチャンス輝く君の笑顔咲く
稲穂伸びおんぶばったの恋実る
終活へ銀行マンのアドバイス

竹原市 土井輝恵

身の丈は年金暮し趣味一つ
朝ドラの軍歌記憶を呼び覚ます
戦争の欠片あちこち思い出す
デジタル化おいてきぼりの老いでいる

府中市 岸田武

眼帯にマスク異様な姿なり
確かなもの掴んだらしい再逮捕
札束が喋ると怖いことになる
権力を握ってからは小賢しい

山口市 中前幸子

火祭りの夜は孤独な影法師
夢遊び足し算ばかりしています
みずゝの海からのちの歌が洩れてくる
鉤括弧はずせば視野が広がる

阿南市 小畑 定弘

風葬にしました最後の恋だから
あの世へは単位不足で逝けません
ボクが次入るであろう墓洗う
今朝の秋逢える予感の令夫人

松山市 大内 せつ子

熟れすぎたりリングにチュッととしてしま
探しものばかり無口になっちゃった
ほころびはずつとほころびなの なにか
ぬるま湯で満足してる片えくほ

今治市 渡邊 伊津志

喧々譁々組織に明日がある証し
宿罪に見合う形で生きている
涼風が運ぶ病葉秋の鬱
駆け足が出来ると思っていた頭

高知市 三谷 松太郎

満月に何か起きそうススキ原
十六夜に人肌爛で猫もおり
惜しい人浮世の月もそこそこに
GOTOとみなで渡るがいいのかな

唐津市 岩崎 實

爪もみと指の屈伸欠かさず
手の甲のさすり三十右左
廊下をば手押車で三十回
椅子に腰上げおろしての十回

唐津市 前田 廣幸

ギブで見せテイクで見さすコマージュ
腹八分季節が止めぬ二分三分
皺見せに何で行けようクラス会
柎に倣い加齢の棘が取れ

沖繩県 禰 モモト

ふるしきの四方結べばエコバッグ
外出のマスク外せば吹出物
流感の予防接種は真つ先に
相撲取り孫四歳に負けました

沖繩県 宮 すみれ

とりあえずカーテンを開け二度寝する
秋の空男女の心もてあそぶ
弱る母治療ことわり涙飲む
ちよいと秋おニユーの服が出番まつ

黒石市 北山 まみどり

ご機嫌をうかがうように風の音
少しなら対応しますハブニング
どこまでが本当なのか重い筆
あつさりと引き下がるのも意に添わぬ

五所川原市 むらの ひとり

濁流が喉を枯らして夏の陣
喰う寝るで沢山でしよう猫の髭
痒いのは感情線の分かれ道
御破算で願いましたは誕生日

宇都宮市 廣 瀬 良 磨

父のこと伝えに来たかオニヤンマ

還暦に少し自分を誉めてやる

過去のこと考えすぎて徹夜する

細かいと言われるけれど直らない

東京都 高 岡 弥 生

いつの間にセミの泣き声すず虫に

また伸びたいつまで続く白髪染め

トランプも誰でもかかる新コロナ

人生を負けず嫌いで勝ち抜いて

横浜市 巖 田 かず枝

好物を夫は苦手鮭秋刀魚

スッピンをマスク隠しているつもり

寒がりが布団毛布でサンドする

ドクターの笑い声葉の一つ

横浜市 長 島 亜希子

自慢だった体脂肪率が上がつてる

後期高齢ズボンの丈が長くなる

無人販売野菜土産の散歩道

早朝散歩旧友に会うおまけ付き

神奈川県 小 田 幸 子

異常気象うしろめたさに人脅え

他人のための自己中なんてあるのかな

マグマ溜り地球の怒り燃える穴

光る星人工衛星まぎれてる

南アルプス市 小 林 金 剛

希望峰かならずあると夢たくす

ノロスケと言われネコ科の長となり

役に立つ人間でおれ現実味

コレバカリマケラレマセン欲と色

石川県 堀 本 のりひろ

自宅待機主夫の仕事がまたふえる

引き籠る日々が過ぎゆきカビがはえ

新コロナ案ずる電話マスクする

新コロナ右往左往と人走る

静岡市 渡 辺 芳 子

九十歳解る友あり生きられる

よちよちとあるくこの足ありがとう

春夏秋冬はつきりしない時を生き

大自然流れの中で生かされて

名古屋市 富 田 末 男

元氣見せ母を安心させたくて

人脈を持つと助言が多くなる

もう一度それが意欲にしてくれる

古里の案山子へマスク持つて行く

江南市 脇 田 雅 美

急ブレーキ頭真つ白間に合った

不思議だよ歳重ねると愛らしい

かけ放題知人の電話掛けなおす

やめられぬ酒の勢い身の破滅

豊橋市 西郷 紀美代

草取って達成感ときれい好き
ノラ猫が空き家の庭で用を足す
子の葬に出られぬ父は施設内
情けない親になっても臍かじり

大阪市 今村 和男

ランドセル孫がブランド選んだと
塾レッスン週七日では足らぬ子ら
アルバイト学校よりも知識増え
卒業の荒波知らぬ子の笑顔

大阪市 岡田 恵子

ひきだしの奥に明かせぬ過去がある
どこでもドアある世とやらをノックする
得意気に喋った後に知らんけど
GoToトラベル自分探しの無人駅

大阪市 近藤 風羅

コンビニのカップおでんでひとり酒
還暦の還暦らしき貌となり
全て知りそのうえで聞く友うれし
文庫本の厚さほどなり我が知識

大阪市 中村 峰子

残そうと思うと金は使えない
無駄遣い先は短い世のためだ
行事なしけだるい日々が続きます
花を生けひとりで祝うパースデー

大阪市 降幡 弘美

菅さんにとって縁起のいい令和
寂しさが余計に増したテレワーク
マスコミにあおられている消費者ら
オリオン座見つけ夜空はもう冬か

大阪市 前川 善之

生きるためコロナ怖さでオンライン
秋の空台風去りし爽やかさ
トランプの納税疑惑湧いて出る
縦割の悪しき習慣正す菅

大阪市 松田 聡

勝ち馬に乗って配当もらう臣
雄叫びあげて闘うナオミ誇らしい
すがすがし朝日を見れば湧くフアイト
デジタルについていけない人数多

大阪市 宮本 千恵子

日々マスク食費に消えた化粧代
迷惑だなあ強気強気のトランプ氏
義歯デビュー友が気づかうランチメニュー
カギツ子の私待ってたふかし芋

池田市 上山 堅坊

米寿まで元気でこれたこの喜劇
煩惱が元気をだせと尻叩く
爽やかな最期夢見てウォーキング
一日のけじめを付けるお仏壇

茨木市 細田 マキコ

中秋の月の引き立て火の惑星

新型コロナインフルと組み去ってくれ

いわし雲いまも昔も群れたがる

肝だめし今年はコロナああ怖い

交野市 山野 双葉

ワイングラス優しく洗う誕生日

曼珠沙華だけを残して草刈られ

オンライン却って増えた習い事

認知症残った言葉はありがとさん

吹田市 岩口 のぞみ

文化祭運動会も力なく

コスモスにマスク外して深呼吸

満月に得した気分帰り道

台風が猛暑終らせ秋が来た

高槻市 三谷 白黒

いらんこと喋らぬようにマスクする

人生は進むしかない懸命に

トランプは医者のこと聞きません

貧困者GOTOにさえ行けません

豊中市 荒木 郁子

不安つのもり体温計とにらめっこ

几帳面に体温記入カレンダー

感染のリスク不安の高齢者

コロナのせいお洒落する気も起こらない

寝屋川市 川本 信子

アマビエも神も仏も効き目なし

ときめかぬ服は断捨離更衣

秋風が再起の種を蒔いていく

初曾孫はたちになれば一〇二歳

寝屋川市 坂本 ミヨノ

何曜日聞かれ迷うて此の頃や

夏のつかれ食欲秋に太りだす

秋冷道足早や歩く人を追う

紅葉の寺もみじもえ一葉散る

寝屋川市 廣田 和織

年寄りに我慢は毒と論される

ストレスと一緒にあおるコップ酒

わたくしのどこを切っても昭和色

流行に背を向け色の無い余生

東大阪市 秀 爷

改札のおはよう途絶え無人駅

社交性いらなくなったコロナ以後

私にも死にたくなつた日があつた

徳俵かかってからが人生よ

八尾市 田邊 浩三

言いました聴いてないさてボケたのは

一〇万円マスクを買って出前寿司

団結の怖さコロナも知っている

七年の元を取ろうと蟬の殻

トンネルを抜けた気がする遍路道
大阪府 奥野健一郎

ひと呼吸おくと重みをもつ反論
ちよつと後が恐い過分なもてなし
手の内に誇るものなく神頼み

大阪府 高木道子

栗の実を追って見つけた吾亦紅
黄金の波に攻め入るコンバイン
仏壇の林檎の艶にも手を合わす
稜線に夏の名残の雲が乗る

神戸市 青山ひろし

そのうちとグラス合わせる手ぶりする
割勘と彼女笑つて隙が無い
テレワークうしろの鍋が湯気を立て

さよならは孫とゲンコを交わし合い

神戸市 石川克美

ほめられた記憶は常に暖かい
生きるため言わねばならぬ世辞もあり
孫からのお遊び要請嬉しいな
払っても払ってもおそい来る加齢うつ

神戸市 輿水弘

鬼仏休め年の瀬妻介護

腹かかえ笑つた記憶今年ない
翼折れひたすら梳いて明日をまつ
ドローンで俯瞰人生きつといひ眺め

豆台風今日も発生台所

台風もコロナ怖いか陸除ける

雨台風来ないと困る来て恨む

マスクせぬ案山子怖がる稲雀

神戸市 近藤勝正

台風が落ち葉いっぱい置き土産

ぼちぼちと風呂の温度を二度上げる

ポカポカの湯気恋しい日もう近い

サヨナラ勝ちラジオの前で歌い出す

神戸市 櫻井崇史

街蒼く今日のページを待っている

人生の何幕目かの秋の月

真夜中に救急車行くにぎやかに

秋風に孫の自慢を聞き飽きる

神戸市 田本古鈴

マスクには就活中と書きたいよ

今日もまた100均店で食材を

親切へ体が先に動いてる

賞味期限過ぎてても我家皆元氣

芦屋市 新阜義明

ゼロが並ぶだれが払うの国債を

脳天からコンコン響くお念仏

マイナンバーポイント付けに四苦八苦

彼岸花ちよつとお寄りとおチラ見る

尼崎市 山田厚江

伊丹市 平井 富夫

一言のことばに込めた句を作る
孫喧嘩叱る爺ちゃん笑顔見せ

美味しそう箸を伸ばして別腹と
口かるい後のしりふき荷が重い

丹波篠山市 澤 良子

豪雨去り憎らしいほど青い空
夏瘦せも秋の味覚に太鼓腹

案山子かて時にはしたい野良仕事
好き気まま働く気合人一倍

丹波篠山市 藤井 美智子

名月やコロナ知らずに輝いて
本当の値段はいくらテレシヨップ

おくすりに助けられての老いの日々
八十路来て心のネジを巻きなおす

三田市 生田 えい子

あちこちにひとり居增える町はずれ
ケアハウスのそばには娘の写真

リモートで内輪話も出きぬデイ
気は急ぐし空気も読めず四苦八苦

三田市 木村 マユミ

三密で気くばり出来る人多く
断捨離で身を軽くしてゴーツーへ

若冲も五感を刺激群鶏図
老いの知恵AIよりも勝ってる

三田市 幸田 厚子

半年の静寂破る選挙カー
もういいか弾けてみたい気にもなり

太い脚七十路支え今日がある
テレワーク過疎の移住で子も出来た

三田市 住吉 美和子

楽しみと不安ちよつびり秋の旅
ぬか床の野菜も秋の味となり

いわし雲コロナ遠くへ連れてって
眠るまで謳ってくれる虫の声

三田市 辻 開子

重い足バス停までと頑張った
道の駅新鮮野菜高くても

秋桜の広大畑亡父いる
内緒事渋い顔して母は聞く

三田市 中山 昭美

誰に似た夜遊び好きな家の猫
頼杖に悩み預けて一眠り

十三里たつぶり入れた栗ご飯
青春の踏み跡探す山歩き

西宮市 高瀬 照枝

暮し向き智恵と工夫でやり遂げる
松茸は今年もテレビ気分だけ

絵手紙で栗の絵書いて返事待つ
落葉踏み歩くぜいたく有難う

西宮市 高橋 千賀子

一言に百倍返し妻の口
小振りでも秋刀魚が買えた特売日
備忘録書いた事すら忘れてる
気の毒な人だ心に傷がある

生駒市 饗庭 風鈴

気合い入れ早寝早起き月曜日
じんわりと疲れがたまる木曜日
付度はしないと決めた金曜日
毎日が三日天下の日曜日

京都府 北野 クニオ

喜寿祝い和食の膳に花添えて
明るさと元気があれば生きられる
大関になれば風格ぐんと増す
満月におでんのほしい夜が来る

(前月分) 八尾市 山川 寧

いつまでも生きている友メールの中で
大坂なおみマスクのメッセージも強かった
一人暮らし賞味期限はないことに
新総裁大きな耳が光ってる

(前月分) 山口市 中前 幸子

逃げ足の早い男で影が無い
回転木馬でまぼろしの森めぐる
ワンクッション置けばとっても好い人だ
古民家を訪う昭和の風に逢いたくて

(前月分) 倉吉市 大羽 雄大

ショッピング マスクせぬ人増えてきた
べたべたは止そうコロナの新時代
丁寧なことばに潜む下心
軽々と見たか代役もって来る

句集紹介

『^{ちか}央ちゃんのつぶやき川柳』

江島 央 著 (3歳)
小島蘭幸 編

まんじゅうをたべますとてもしあわせです
がたんごとんあおいでんしゃがとおります
えいえいえいまほうのれんしゅうしています
くつしたさんかたつぽへんじしてください
おそらかなみだがザーツとふってくる
あさがおのおまつりいっぱいさきました
にっこりとわらうそういうママがすき

(新葉館出版 1200円+税)

英語 de Senryu ⑩⑧

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

国の父に似ていて車掌きりそこね

*as the nation's father
he conducts the "train"
on a headlong driver*

女房に 負けまいとする 愚かしき

*foolishly
he makes an effort
not to be defeated by his wife*

as ように *nation's father* 国の父 *conduct* 業務など行う *headlong driver* 無謀運転
foolishly 愚かにも *make an effort* 努力する *be defeated* 人が～に敗れる、失敗する

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句④⑧ ハイク、センリュウとコラボ

共同制作を英語でコラボレーション *collaboration* (以下コラボ) と云います。実際にはハイク・センリュウと写真、画、エッセイとのコラボが一般的です。国外の国際コンテストでもコラボが人気です。特にハイクと写真はフォトハイクとも呼ばれ、日本でも定着してきました。画とのコラボの延長線上に写真が登場してきたのは自然なことです。画を描くよりも写真撮影は準備に手間がかからず手軽です。ハイクやセンリュウの特徴である簡潔・凝縮性は、写真が何に焦点を向けるかとの共通点があります。その意味でハイク、センリュウなどの短詩形文芸と写真はコラボとしてベストマッチングなのです。

わたしは18年前からカレンダーの写真に日英ハイクを付けるフォトカレンダーの制作にかかわっています。写真の説明のようなハイクでは詩的な面白さは生まれません。写真と「付かず離れず」のハイクを付けてこそ、写真もハイクも精彩を放ちます。ハイク・センリュウと画においても同様の工夫と創意が要求されます。

また海外のハイキストはハイクやセンリュウと文章のコラボが大好きです。日常の暮らしから生まれた200語ほどの英文にハイクやセンリュウを付けます。英文の内容とのマッチング、つまり文章と短い句が互いに支え合う言葉の世界。それは彼らにとって初めて出会う文芸形態です。ハイクやセンリュウの世界がコラボによって日本では想像できないほど複雑な魅力を海外の詩人は持ち始めました。今後ハイクやセンリュウは日本人の予想を遥かに超えて、国や民族を超え、世代を超えて各地に定着していくと思います。そのためには日本の俳句や川柳の上質な翻訳が必要です。

誹風柳多留一二三篇研究 4

27 御りゑんのわけ琴爪のきずが出来

細井 川柳では、奥方は琴、お妾は三味線という約束になつてゐる。この度奥方が御離縁になつたその訳は、なんと、奥方が琴爪で殿様を引つ掻いたからだとか。そもそもはお妾への嫉妬からのことだろう。

御りゑんのおこり古近江折してあり

安二叶一

24 年ばいなほうへ花嫁さしてにけ

細井 婚礼の席だろう。只でさえ恥ずかしいのに、これから起きるであろうことを見透かされてゐるようで、特に若い宴客の熱っぽい視線には耐えられないので、年配の客の方に盃を差してその場から逃げ出してしまった。さもありません。

花嫁をひやかん酒の間イへ出し 一九九

盃をまん中へ嫁さしてにけ 一二二

清 賛。

25 長はなし扇をひろげてハたゝみ

細井 話が長くなって、扇を広げたり窄めたリパチンパチンとやつてゐる。そういう癖な

のだろうか、それとも、相手の話が切れなくてイライラしてゐるのだろうか。

長はなしきせるを廻ハしくき、

明四智一

山田 賛。その気持、よく分かりますよねえ。

清 賛。

26 妹をつれて一日ばかな沙汰

細井 妹の買ひ物に付き合つて出かけたところ、妹を知らない連中から「ようよう、お二人さん、似合つてるよ」とひやかされるやら、何やらで散々な一日だった。やれ〜。

いもうと、合傘つらい目に出合 傍五13

相傘ハイやだと兄きづぶにぬれ 明六信1

清 賛。

28 御寐間からゑみをふくんで妾でる

伊吹 お寝間でのねだりことが聞き入れられ、満足の笑みを浮かべて妾が出てくる。

お妾のむつことくれろ〜なり 二二一

高野 万句合の前句「にほひ社すれ」からは、おねだりよりも、妾のお仕事の後の色香のよくなものを感じるのだが。

山田 礎賛。なお「笑みを含んで」は『平家物語』の「入道相国の北方八条の二位殿へま

いらせたりければ、ゑみをふくんでぞよろこばれける」(巻四・源氏揃)の文句取。

まんめんゑみをふくんで下女承知

清 同。シテやったり。なるほど文句取ですか。

29 ふみ箱をもち官軍の陳へ来る

伊吹 官軍の総大将である新田義貞は、勾当内侍の愛におぼれて足利尊氏の追討をおろそかにした。そのため、陣触れなどに義貞本人は出てこず、文箱が来るだけである。

文箱で来る官軍のいくさ触れ 一六六六

官軍の惣大将ハあさねなり 拾五三〇

小栗 贊。勾当内侍のラブレターを義貞の陣へ持つて来ると思っていたが、義貞の公文書を「文箱」なんぞ二入れて来るとする礎説の方が面白い。

清 礎賛。

文箱で来る官軍のいくさ触れ 一六六六

が決定的な類句であろう。

30 万歳八なく子の顔をついに見す

伊吹 正月に来る三河万歳の太夫と才蔵が見る子どもの顔は、みな笑顔ばかりである。

万才に三ツ四ツ風がおりるなり 明五智一
万ざいに糸をまきく付て来る 七一七

清 賛。

31 後生迄いひたてられる華の雨

伊吹 後生は、来世。花見に出かけた後か、出かける前にか知れないが、雨が降り出した。当人のその運の悪さのため、いい来世は望めない、とまで言い立てられている。

花の雨のちは後生のさたになり 一九九

山田 賛。当時の女性の最大の楽しみは、芝居と花見ですものね。

小栗 賛。花見の時に運悪く雨になったとい

う、一つの運の悪さを素に、後生という人生全体の運の悪さという大きな話になるという意。例句も同じ。

細井 賛。結局はいたしかたなく、

空をねめく弁当内て喰イ 四四二

清 賛。「日頃の行いが悪いから」というのである。

32 惣花の返詞親船迄きこえ

伊吹 小船を従えた親船に乗って、品川遊里への豪遊。妓楼のすべての使用人に祝儀を渡す総花だと客が言ったので、それに対する返答や騒ぎが親船まで聞えて来る。

惣花の声ハ親舟迄聞エ 一三九八

小栗 句意はそのようなことと思うが、「小船を従えた親船に乗って、品川遊里への豪遊」の設定がよくわからない。江戸都心部からお

大尽が船を仕立てて、品川へ遊びに行くというのはいまだ聞かない設定だが。江戸前は遠浅なので、品川沖に親船は碇泊し、はしけて品川へ来る。貨物船などの句ではないかと思うのだが……。

しかし、そうだとしても、何が面白いかわからない。

「親船」の句を拾うと、単に「親」を示唆する句もある。主題句も、品川の縁語で「船」の字を使っただけで、どら息子の行状が親にばれたという句とも思える。

清 品川と船との関係、もう少し検討したい。

33 なんとゑ角田川かと土手でいひ

伊吹 風光明媚なうえ吉原が近く、隅田川はいいところだと日本堤で言っている。

い、景色雪の白髭隅田川 七八九

小栗 賛。ではあるが、何か仕掛けがないとどうしようもない句ですね。

清 それだけの句なのでしようね。

田辺聖子さんの功績

立命館大学名誉教授 木津川 計

田辺聖子さんは川柳の応援団長だった。応援するだけではない。川柳の普及に大きな役割を果たした。次の著作の一つ一つが川柳ワールドの魅力を伝えた。

『古川柳おちほひろい』76年、講談社

『川柳でんでん太鼓』85年、講談社

『道頓堀の雨に別れて以来なりー川柳作家・岸本水府とその時代』98年、上・

下、中央公論社

『田辺聖子の人生あまから川柳』08年、

集英社新書

田辺さんは、とかく卑俗陋劣とみなされ、女性が楽しむには不向きとも言われてきた古川柳に、むしろ女性が馴染んでこそ思考のバランスがとれるのではないかと考えたのだ。私は拙著『人生としての川柳』（角川学芸ブックス）で次のように綴った。

「川柳は男性的発想の産物で、『まくら絵を高らかに読み叱られる』『とっさんは

留守かか様が来なさい」といったパレ句もあればこそ遠去けられたのだが、これも含め古川柳は、いわば人間生態学で田辺さんは『人間を看過することなくも犀利に、人間を嘆うことかくも無残な、自由潤達な精神の産物がほかにありませんか』(『古川柳おちほひろい』)と評し、女性ファンの目を川柳に見開かせたのだ。

只今、川柳を詠む女性の川柳家はどれほどいるのか、川柳塔の本年9月号で選句された同人数は277人中、女性は146人(数え違いはご容赦を)なんと半数強なのだ。田辺さんの影響力はまことに大きかったと言える。

その田辺さんが亡くなった。昨年6月6日、享年91だった。川柳界が蒙った大きな打撃である。

文芸にとどまらない。あらゆる文化は広大なファンに支えられ、熱心な応援団

に守られてこそ発展するのだ。田辺さんを失ったことは、ことに川柳の都・大阪の痛恨事であった。

近年、表舞台へ出てこれられなくなったあとを補うに不肖私如きでは軽量に過ぎて話にならない。だから、川柳推進の太鼓を打つ、影響力の大きい文化人や財界人の力を借らねばならぬ。

そんな事態になって困ったことに大阪は直面しているのだ。前号でも触れたように、大阪から大企業が本社や本社機能を東京へ移しただけではない。有能な人材も東京へ移り、大阪はかつてない人材、私底都市になってしまった。その様相は、ほとんど惨憺である。大阪が都市格を転落させた、そのツケはまことに大きかったのである。

そんな大阪で影響力の大きい人物の応援を得るのは非常に難しい。いつかとの間に合わせですむ事態ではない。もう一度、第二、第三の田辺聖子を大阪は生み出し、育てねばならない。息の長い仕事である。いつの日か、大阪が復権する日を目指し、大阪人は汗を流さねばならぬ。

(川柳叢書 第55号より転載)



お金やまやま (1)

年末はお金の動く時期ですが、親しい友人であつてもお互いの経済状態については突っ込んで話し合うことはないようです。それは、「ふところ具合をアレコレいうのはみづともない」という意識があるからでしょう。しかし、川柳の作品では正直に自嘲を込めて詠っている例が多々あります。

春愁の元を質せば銭がない

丹下 凱夫

生姜湯を飲めどフトコ口寒いまま

岩本 浩二

雄大な心はあるが空財布

奥村 五月

暇はある体力もある金がない

鈴木いさお

暇と金同時に出来たことがない

岸本 宏章

金かねと言うから金が逃げていく

岸本 孝子

偏つて金はどこかで回つてる

水野 黒兎

金ないが花はきれいに見えている

奥澤洋次郎

ふところが寂しいと元気もなくなるようで、あたたかい生姜湯を飲んでもハートまでは温もりません。暇があり体力があつても金が無ければ楽しく遊ぶこともできません。

それぞれ「金が無い」ことを正直に述べていて愉快ですが、いずれも「一種の誇張法」であり、本当にそこまで困つていたらならこのような作品を生む余裕もないでしょう。

世の中を回しているのは「金」らしい

内藤 憲彦

金ないと青テントでも暮らせない

奥 時雄

金額で揺れるわたしの正義感

石橋 芳山

金の力に勝てないことは知っている

福田 好文

お金拾う夢見てそこへ行つてみる

大久保真澄

隅かも知れぬ諭吉が落ちてゐる

山野 寿之

札束を見るとコントロール不能

岩崎 公誠

あぶく銭入る悪魔の仕業だろ

前田 紀雄

透かしたら諭吉が舌を出していた

高瀬 霜石

「金の無いのは首の無いのと同じこと」は歌舞伎に出てくる台詞ですが、お金に苦労している人が多い所為なのか、代々語り継がれて若者たちにも広く知られているようです。

確かに、この資本主義社会においてはお金がないと一日たりとも暮らしてゆけません。自由人を気取つてテント生活を

送るにしてもお金がないとご飯も食べられません。

お金を拾う夢を見たなら、念のためにその場所へ確かめに行きましょう。ひよつとしたら「正夢」かもしれませぬ。

かじかんだ手から小銭が零れ落ち

古久保和子

小銭見る目に緊張感がない

西谷 悦子

五百円小銭にしては重すぎる

三宅 保州

お賽銭五百円玉やめとこう

山口 不動

神様の前で小銭と口走る

広島 巴子

ポケットの小銭確かめ牛丼屋

上山 堅坊

五百円預金でいつか家建てる

坂 裕之

皆さんは何円ぐらゐまでを「小銭」と思われているでしうか？ あるアンケートによると、「小銭は百円玉まで」という意見と「五百円玉はとて小銭と思えない」という意見

が多く見られました。確かに、ワンコインでお昼が食べられ、貯めると家も建つ五百円玉は小銭とは思えませぬ。

愛染帖

新家 完司選

(投句275名)

大阪市 金川 宣子
役に立つ天眼鏡のペンダント

(評)ダイアモンドのペンダントなど自己満足だけ。見映えはしないがルーベは細かい記事や値札を見るのに重宝。実用第一である。

富田林市 山野 寿之
無理しなや言うて草刈り見てるだけ

(評)一応は口で労わってはいいるが、応援してやろうという気はさらさら無い。まあ、何も言わないより少しはマシではあるが…。

鳥取市 福西 茶子
のんびりが続き有頂天がない

(評)努力した汗に比例して報われたときの喜びは大きい。「のんびり」は有り難いが、伸び切ったバネのようで心の振幅は少ない。

橋本市 石田 隆彦
裕次郎真似たタバコがまだ続く

(評)タバコをくわえた裕ちゃんに憧れて手を染めた人も多い。50年目に止めた人もいるが、意志が強くてまだ続けている人もいる。

横浜市 菊地 政勝

店員が監督をするセルフレジ

(評)慣れないとまごついてしまうセルフレジ。スタッフが教えてくれるが、何だか店の手伝いをしていような気もしてくる。

和歌山市 古久保利子

夏過ぎて庭に金魚の墓ひとつ

(評)猛暑への対策が拙かったのか寿命だったのか、家族の一員のようにだった金魚が死んでしまつて悲しい夏になってしまった。

河内長野市 梶原 弘光

二千歩の辺りに心強いカフエ

(評)習慣になった散歩。ひと休みしたいと思う辺りに小綺麗なカフェ。愛想の良い店員さんもいて、楽しみがまた一つ増えた。

沖縄県 禰 モモト

話し方スローテンポは生まれつき

(評)マイペースでのんびりとした喋り方が、ボケてきたのかと思われるかも知れませんが、これは生まれつきです。悪しからず。

尼崎市 山田 耕治

餅焼いた火鉢にアロエ植えている

(評)エアコンのおかげで使わなくなった火鉢。捨てるのも勿体ないのでアロエを育てている。不用品でも創意工夫で役に立つ。

堺市 羽田野洋介

うたた寝する妻の姿がいじらしい

(評)ふと見ると、幼児のようにコックリし

ている妻。日頃の気丈さが失せた背に「苦労を掛けてきたね」と声にはならぬ芳わり。

塩竈市 木田比呂朗

スガにカン日本人さえ読み違え

大阪市 小野 雅美

読み方と漢字覚えた総理の名

和歌山市 土屋起世子

スニーカー杖で自助する散歩道

宇都部市 平田 実男

杖ついて歩くと皆にいたわられ

大阪市 宮崎シマ子

ただ今は誰より頼り赤い杖

伊丹市 延寿庵野鶴

太陽は親方ですと野良仕事

和歌山市 まつもともとこ

金は無い欲も無いから悔いも無い

唐津市 山口 高明

素通りは出来ぬ児童の慈善鍋

奈良市 大久保真澄

アカンベにはアツカンベーで応えよう

米子市 竹村紀の治

敬老の日も洗濯に風呂掃除

神戸市 能勢 利子

母よりも先に死ねぬとスクワット

河内長野市 山岡富美子

目覚ましが必要なくなつて日が長い

豊中市 水野 黒兎

老衰死ボクよりたつた二歳上

河内長野市 村上 直樹
落雷の子感妻から遠ざかる

米子市 吉田 陽子
曼殊沙華咲きふる里は絵の中に

唐津市 仁部 四郎
のし袋人の世の色赤と黒

大阪市 柴本ばつは
犬猫メダカみな生き生きのわが家です

寝屋川市 伊達 郁夫
ボケ防止遺書を何度も書き直す

西予市 黒田 茂代
田舎暮らしいいな果ごもり感がない

府中市 岸田 武
浄水器要らない町に住んでいる

忠告を眼鏡の奥で聞いている
捻くれた孤独の顔になつてきた

五所川原市 むらのひとり
余りにも深い折りを案じます

松江市 梅瀬みちを
二人の自転が合ったからワインがボン

詐欺の記事年寄りみんなお金持ち
ノンアルも癖になつたら高くつく

大阪市 平井美智子
雑巾を十枚縫ってまだお昼

坊さんが通販で買うお線香
大阪市 高杉 力

寄せ書きも記念写真もいつも隅
鍋奉行重ならぬよう配置され

香芝市 山下 純子
自画像は写真でなくて夢を描く

大阪市 石田 孝純
近視ですが遠くの夢は見えています

佐賀県 真島久美子
咲き競うには捨てられぬものばかり

男鹿市 伊藤のぶよし
墓場まで持っていくもの抱え過ぎ

松山市 柳田かおる
散骨をするのもタダでないらしい

弘前市 稲見 則彦
10Bで出しても没はポツなのだ

家呑みは淡谷のり子とブルースで
一つの間に犬に序列を下げられる

長岡京市 山田 葉子
やつとやつと出て来てくれた鱗雲

三田市 多田 雅尚
メルカリはとても手軽な小商い

類尿か尿返りに起こされる
岡山市 大石 洋子

梅干しのようにですが気は山椒です
赤線が引かれた古書を買ってくる

京都市 都倉 求芽
日々ひとり短所長所も消えた居間

デイサービスに行つても退屈の一語
大阪市 谷口 義

寝転んで考えてみたらまあええか
昨日は何か腹立ててたなあ何か

弘前市 高瀬 霜石
老年期などとは言わず熟年期

堺市 矢倉 五月
惚気聞く羨ましいと言つてやる

池田市 倉本 一弥
あの橋の向こうの君へペダルこぐ

大阪市 宇都満知子
梨葡萄形も立派値も立派

大阪市 井丸 昌紀
最高級の食パンちよつとだけうまい

豊中市 きとうこみつ
納豆でパワー増強加齢臭

鳥取市 夏目 一粹
土砂降りに一円玉が泣いていた

豊中市 齋藤奈津子
雷雨きてしばらく暴れ詫びの虹

高槻市 片山かずお
歳を考えてベツトは縫い包み

大阪市 古今堂蕉子
気短な老人に私になつた

堺市 奥 時雄
いつの間に正座できなくなつたのか

香芝市 大内 朝子
まだ若い心は自由なんだもん

神戸市 山口 光久
ブランドが似合わぬ妻でほつとする

土佐清水市 辻内 次根
台風の落としたカポチャ炊いている

句をひねり脳細胞に活入れる
岡山県 藤澤 照代

兼題をぶつぶつ言って散歩する
神戸市 上田 和宏

捏ねくって団子のひとつでも生むか
岡山市 永見 心咲

AIで作った句なら天取るか
堺市 村上 玄也

コロコロを転がしながら句をひねる
神戸市 富永 恭子

住所氏名書ける間は投句する
米子市 野川 宣子

俯瞰的に見たらこの句はやはり天
鳥取市 山下 凱柳

朝まではやはり覚えてない名句
犬山市 金子美千代

黄泉路まで来ても気になるタイガース
高槻市 原 洋志

トラキチは居間で風船ヤジ飛ばす
尼崎市 清水久美子

天高く恥ずかしいほど腹が減る
大阪市 樋口 眞

ありがとうの余韻がしみる秋の風
岡山県 田中 恵

秋風とシャルウィダンス？赤とんぼ
西宮市 高橋千賀子

ドローンに道を譲った赤とんぼ
豊中市 上出 修

ひつじ雲今日も喫煙嫌われた
長野県 丸山 健三

ご近所にくしゃみこだます秋の朝
交野市 山野 双葉

落葉して庭木もボクも冬支度
倉吉市 大羽 雄大

またひとり味方が消えて舞う落葉
和歌山市 上田 紀子

柔らかい秋の日差しに物思い
大阪市 森 廣子

秋深し切ない歌が身にしみる
沖繩県 あらさくら

青春の枯れ葉舞う秋グレコ逝く
枚方市 谷 英也

老猫の歳がずつしり秋の夜
朝霞市 前田 洋子

また聞きの噂を拾い秋動く
和歌山市 松原 寿子

うろこ雲我がもの顔でさえわたる
沖繩県 宮 すみれ

衣替えめつたにしない若不動
大阪市 津村志華子

コロナでも秋は静かになつてくる
宝塚市 太田としお

給付金遣い果たして粥する
和歌山市 柏原 夕胡

盆暮れに毎回ほしい給付金
大阪市 江島谷勝弘

コロナ禍で誓うところのビッグバン
熊本市 杉野 羅天

日課になった手洗いうがい早起きも
鳥取市 前田 楓花

パッカスと巣ごもりをして恙なし
札幌市 三浦 強一

マスクする役目もあつた両の耳
岡山市 丹下 凱夫

飛行機を停めてしまったノーマスク
神戸市 松倉 正美

黒マスク葬儀の帰りかと思つ
鳥取県 斉尾くにこ

マスクの下の顔を想像してしまつ
横浜市 川島 良子

マスク外せばお口の周りくつちやくちや
八幡市 今井万紗子

妻は旅 これぞスーパーディスタンス
宝塚市 丸山 孔一

東京へ行って来たとは言えません
三田市 丹羽 美恵

手帖には体温並ぶ二人分
川西市 山口 不動

趣味の自粛家計にゆとり少し出来
米子市 後藤美恵子

ハイハイタウン待つコロナ禍の向こう
笠岡市 藤井 智史

アマビエも麒麟もついに現れず
宝塚市 岸田 万彩

三田市 上田ひとみ
冷えてきたまずは熱燗おでんだな

藤井寺市 鈴木いさお
塩辛で飲むのは僕の勝手でしょ

鳥取市 岸本 孝子
月見酒大吟醸が待っている

三田市 北野 哲男
潤滑油だから誤飲をしない酒

三原市 笹重 耕三
乾杯で解けてしまうわだかまり

岩国市 上村 夢香
もう水に流しましょうと杯重ね

尼崎市 永田 紀恵
言い訳も引き連れて行くはしご酒

羽曳野市 吉村久仁雄
真つ白なあした朝から酒飲める

高槻市 松岡 篤
水割りの濃さは老いても譲れない

桜井市 安土 理恵
スーパーのはしご明日からビール値上げです

三田市 村田 博
本物ビール鎮座している冷蔵庫

香南市 桑名 孝雄
令和二年外飲みなしで暮れてゆく

石川県 堀本のりひろ
君の瞳僕の一生狂わせた

箕面市 大浦 初音
木の下で受けたあの日のプロポーズ

高槻市 初代 正彦
気休めに紅葉マークの二枚貼り

鳥取市 山野すみれ
現金な私はすぐに神頼み

福井県 伊藤 良一
ワンタッチ動かないのは妻だけに

堺市 澤井 敏治
次から次また初耳のカタカナ語

八王子市 川名 洋子
知らぬ間に貧乏神がファミリーに

三原市 鴨田 昭紀
曖昧に移ろう四季の痴呆症

鳥取市 田賀八千代
聞いているの猫でも呼べば返事する

生駒市 饗庭 風鈴
変人の道づれ愉快まわり道

上尾市 中村 伸子
残念は一つだけです夫音痴

今治市 永井 松柏
裏口にお金次第と書いてある

黒石市 石澤はる子
生き方の合格ラインわからない

鳥取市 岸本 宏章
保険にも加入できない歳になり

越谷市 久保田千代
年金の枠の中にも青い鳥

米子市 後藤 宏之
カード払いとは摩訶不思議なこの世

大阪市 藤田 武人
ブランドがコピーと判り苦笑い

横浜市 加藤 佳子
まだ若い平均寿命超すまでは

明石市 梶谷 和郎
まだしたいことがあるから生きている

鳥取県 山下 節子
一日を自問自答し床につく

大阪市 岩崎 公誠
あつはつは笑い飛ばすと気が晴れる

米子市 伊塚美枝子
老いの坂まだ転がれぬ二本足

池田市 上山 堅坊
ジャンプして掴んだ妻が先に逝く

三田市 野口真核子
混婚で新種になった緋のメダカ

豊中市 松田蟻日路
驚いた君らサンマも少子化か

鳥取市 副井ゆたか
ホテル泊捨てるに惜しいアメニティー

江南市 脇田 雅美
骨董品展示されれば見映えする

松山市 栗田 忠士
気力旺盛黒ニンニクを食べている

箕面市 出口セツ子
冒険と恋潤いにしてみよう

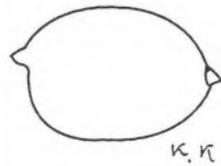
四條畷市 吉岡 修
診てもらったたった五分に待ちつかれ

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カッタとも)

(投句358名)



K. K

「太 い」 石橋 芳山 選

転ぶほど太くまあるくなるうどん
 ペンギンを焼き鳥にする太い串
 太巻きの寿司が丸々入る口
 記念樹が太くなるまで生きてやる
 太文字になって男が自立する
 しがらみを断ち切る太い注射針
 紅太く描いてサヨナラ言えました
 いちゃもんへ笑って返す太い肚
 でんと立つ縄文杉の太い幹
 嫌煙権しぶとく生きるスモーカー
 一本の太棹おんな強くする
 6Bの詩はやんちゃな走り書き
 金持ちが太り貧乏人やせる
 異議アリと末席からの太い声

倉吉市 大羽 雄大
 大阪市 井丸 昌紀
 安来市 原 徳利
 長野県 丸山 健三
 佐賀県 真島久美子
 黒石市 石澤はる子
 富田林市 山野 寿之
 松山市 栗田 忠士
 鳥取県 門村 幸子
 岡山市 永見 心咲
 岡山市 丹下 凱夫
 大阪市 川端 一步
 三田市 堀 正和

「太 い」 古今堂 蕉子 選

刺し易い血管ですとナースほめ
 太い足大根ならば最高だ
 太目細目ラーメン好きの一家言
 採血へ自慢の腕をまくり上げ
 太ったんちゃうのと嫌な久しぶり
 朝刊の太字を読んで出社する
 極太の指で男の桂剥き
 酒臭い血が大好きな図太い蚊
 短針は運動不足太りぎみ
 骨太の改革の声耳に膀胱
 新総理太いパイプを裏で敷く
 図太さを知りつつ女爪みがく
 象親子の太い絆を見ましたか
 熊本に賜杯もたらし大関に

明石市 糀谷 和郎
 鳥取市 福西 茶子
 大阪市 原田すみ子
 神戸市 富永 恭子
 高槻市 原 洋志
 泉大津市 助川 和美
 豊中市 水野 黒兔
 安来市 原 徳利
 大阪市 今村 和男
 西宮市 福島 弘子
 名古屋市 山本三樹夫
 河内長野市 坂野 澄子
 広島県 小川 道子
 川西市 山口 不動

太いとは魅力的だということね
 太目だが迷惑なんかかけてない
 元氣一番太い細いは贅沢や
 GOTTOイトズボンのチャック締まらない
 細い芽太い芽わたしが蒔いた種
 躍動の太い骨に熱い脈
 太いとはいわずポツチャリさんとい
 太っ腹の兎は亀に負けてみせ
 太股の太い男が好きだった
 丸丸と太いサンマは高級品
 DNA間違いなしの太い声
 6Bの手に負えなくてウツと書く
 あの時太い糸だと思つてた
 血管が太く浮き出て注射向き
 ラーメンは塩で太めの方がいい
 太い腕父に似たパン焼きあがる
 太い足ラップを巻いて寝る我が娘
 幸せすぎて結婚指輪外れない
 細身でも芯が太けりやそれでいい
 風評に叩かれ根性太くなる
 前からだけ横から見てはいけません
 ぼっちゃりが好きと言われて維持して

黒石市 北山まみどり
 岡山市 工藤千代子
 東かがわ市 川崎ひかり
 札幌市 三浦 強一
 男鹿市 伊藤のぶよし
 枚方市 藤田 武人
 伊丹市 延寿庵野鶴
 松江市 中筋 弘充
 岡山市 大石 洋子
 豊中市 貝塚 正子
 高砂市 松尾柳右子
 箕面市 中山 春代
 宝塚市 丸山 孔一
 豊中市 きとうこみつ
 米子市 成田 雨奇
 三田市 稲角 優子
 三田市 大西 重男
 神戸市 能勢 利子
 桜井市 安土 理恵
 和歌山市 土屋起世子
 長岡京市 山田 葉子
 犬山市 金子美千代

嫌煙権しぶとく生きるスモーカー
 書道展太く激しく躍る筆
 母だけは庇つてくれたボクの嘘
 太い字で書くほうがいい嘆願書
 太い眉ゆっくり意見裏返す
 太い声飛ぶアイドルのコンサート
 当てにした太いきずなは爪楊枝
 太っ腹に見えるがただのお人好し
 貸農園隣のお話ほめておく
 ジイちゃんのボンボンのうえボクおねむ
 惚れてます太い細いは気にしない
 三百年持った旧家の太い梁
 ひと言が絆たくも細くもし
 夫という雨風除けの太い幹
 圧巻の注連縄さすが神の国
 体重減を太った医師に勧められ
 太棹が吹雪く津軽に立ち向かう
 図太いと思われている無神経
 太いなど口に出したら修羅場です
 血縁の太い絆を絶つ遺産
 公園の大樹見てきた会者定離
 太い声披露の声がよく通る

鳥取県 門村 幸子
 河内長野市 中島 一彌
 八王子市 川名 洋子
 松江市 中筋 弘充
 伊丹市 延寿庵野鶴
 大阪市 降幡 弘美
 石川県 堀本のりひろ
 尼崎市 藤井 宏造
 大阪市 柴本はつは
 豊中市 松田蟻日路
 宝塚市 太田としお
 大阪市 金川 宣子
 宇都市 平田 実男
 河内長野市 木見谷孝代
 橋本市 石田 隆彦
 奈良市 高橋 敬子
 豊中市 貝塚 正子
 米子市 竹村紀の治
 米子市 成田 雨奇
 大阪市 寺井 弘子
 堺市 柿花 和夫
 寝屋川市 富山ルイ子

太ければ太いほどよい本マグロ	尼崎市	藤井	宏造
太るってそんなに悪いことですか	大阪市	横山	里子
神経が太いので政治家になる	鳥取市	夏目	一粹
くよくよせず太く楽しく生きてます	大阪市	若本	安代
他人には切れない極太の絆	三原市	鴨田	昭紀
太く長く生きると決めてから落ち目	羽曳野市	吉村久仁雄	
物心ついた時からためです	大阪市	宇都満知子	
独居でも太い方選るナスきゅうり	堺市	矢倉	五月
太っ腹見せるもびびる請求書	鳥取市	山下	凱柳
ランダムにそして図太く生きてやる	松江市	藤井	寿代
名月も秋のグルメで丸丸と	羽曳野市	磯本	洋一
図太いと思われる無神経	米子市	竹村紀の治	
まだいける太くなってる運命線	河内長野市	穂口	正子
太卷きのなかに太陽一家住む	笠岡市	藤井	智史
土壇場の妻の図太さ頼もしい	松江市	梅瀬みちを	
指輪には縁がなかった太い指	豊橋市	西郷紀美代	
丈夫さで目立っているカバの首	大阪市	岩崎	公誠
風評に動じぬ太い足二本	神戸市	山口	光久
10Bで描くと影があたいたかい	松山市	柳田かおる	
見てんかと自慢気太いふくらはぎ	奈良市	山本	昌代
表向き太っ腹でも火の車	尼崎市	清水久美子	
肝っ玉婆さん皆の空母役	奈良県	安福	和夫

太ったら財布の口がよく開く	和歌山市	定松	宏枝
臥す母の大根足がねぎのよう	三田市	福田	好文
法要の太い説経の声に乗る	神戸市	櫻井	崇史
骨太の男気弱になる老後	京都市	都倉	求芽
父さんは太くて長い箸が好き	三田市	堀	正和
座の空気締める野太いボスの声	豊中市	藤井	則彦
長命で頑固な相だ太い眉	堺市	坂上	淳司
屋久杉の太い根掴む地と刻と	大阪市	石田	孝純
今日は命日太く短く生きた父	豊中市	きとうこみつ	
太い腕父に似たパン焼きあがる	三田市	稲角	優子
また一人太い絆を失った	鳥取市	吉田	弘子
マスク顔眉はキリッと太く描く	西宮市	高橋千賀子	
親譲りちよつと太めの優良児	神戸市	山口	美穂
間引き菜の余計に摘まむ太い指	鳥取市	上山	一平
太く成る尻尾を何所に隠そうか	大阪市	森	廣子
緻握る細い老婆の太い指	枚方市	谷	英也
夕方に私の足が太くなる	熊本県	岩切	康子
ソクラテスに成れないままのメタボ爺	三田市	村田	博
若い頃は悩みの種の足でした	上尾市	中村	伸子
図太いと言われてみたい婿養子	交野市	山野	双葉
骨太の男支えた華奢な指	富田林市	中村	恵
雲水の野太い声の列がゆく	京都市	清水	英旺

白線を跨いでこの世楽しまん
 太い首載せて前行く男の背
 子育てへついつい太い声になる
 図太さが時には武器にしてくれる
 わたくしの一番すきな木綿糸
 見た目には華奢な草だが根が太い
 太つちよのバナナうんちだ健康だ
 太棹の音色が津軽連れて来る
 太く短く生きることなごきれいごと
 太いのは家系だからと念を押す
 弾除けに図太い男キープする
 色白で太目が好きと言ったよね
 肝つ玉もビジュアル母もドデデン
 ライザップ力士モデルにしてほしい
 だんだんと竹輪の穴が太くなり
 負けん氣を太い鼻毛にたくわえる
 夕方に私の足が太くなる
 ずんぐりむっくりがうまい芋南瓜

秀 句

弘前市 高瀬 霜石
 防府市 坂本 加代
 三原市 笹重 耕三
 名古屋市 富田 末男
 寝屋川市 平松かずみ
 弘前市 福士 慕情
 鳥取市 池澤 大鯨
 大阪府 岩崎 玲子
 鳥取市 岸本 孝子
 弘前市 稲見 則彦
 三田市 野口真枝子
 高槻市 原 洋志
 鳥取県 斉尾くにこ
 大阪府 石田 孝純
 浜松市 中田 尚
 鳥取市 山野すみれ
 枚方市 栃尾 泰子
 熊本県 岩切 康子
 西宮市 緒方美津子
 三田市 上田ひとみ
 大阪府 森 廣子
 大阪府 平井美智子

太い指スマホの操作持て余す
 反核と筆太に書く終戦日
 土付きの太い大根喜ばれ
 太い字で温もり届く見舞状
 9号が19号へ至る道
 鈍感を図太い奴と誤解され
 百均では欲しいの買えと太つ腹
 しがらみを断ち切る太い注射針
 「太つ腹」煽てに乗って出る論吉
 だんだんと竹輪の穴が太くなり
 集合写真肥えてる人の横が好き
 太棹の音色が津軽連れてくる
 欠点は太く短い足だけよ
 愛が冷めた指輪が抜けぬ口惜しさ
 6Bで明日へ繋ぐ夢を描く
 寸胴な身体が着物を美に変える
 コロナ太り当座言い訳これにしよう
 太つては翔猿の技無理でしよう
 バスが支えて混声は響き合う

秀 句

広島市 岸本 清
 鳥根県 伊藤 寿美
 大阪府 高木 道子
 鳥取県 坂本とも湖
 横浜市 加藤 佳子
 大阪府 平賀 国和
 河内長野市 藤塚 克三
 黒石市 石澤はる子
 尼崎市 永田 紀恵
 鳥取市 山野すみれ
 豊中市 齋藤奈津子
 大阪府 岩崎 玲子
 尼崎市 山田 厚江
 河内長野市 大島ともこ
 伊丹市 岡村 風琴
 三田市 丹羽 美恵
 河内長野市 辻村 ヒロ
 三田市 多田 雅尚
 羽曳野市 徳山みつこ
 枚方市 栃尾 奏子
 今治市 永井 松柏
 弘前市 高瀬 霜石

「洗 い」

坂本 蜂朗 選

(投句 236名)



洗柿も陽に論されて甘くなる
 眼で演技できる役者の洗い芸
 私には似合わぬブルーマウンテン
 珈琲も男も洗いの好み
 容姿に見とれ洗柿に食らいつく
 雨風に晒しわたしの洗を抜く
 セールスマン洗い顔にも尚語る
 洗々で結婚したが大当たり
 初収穫洗柿と知る八年目
 支払いの時はいつでも洗い顔
 関白もおむつはかさされ洗い顔
 定年後洗々妻の荷物持ち
 屋台でも洗顔のまま管理職
 木守り柿甘くなるまで待つカラス
 真っ先にカラスが味見吊るし柿
 洗い顔暖簾くぐれば甘い顔
 洗柿は欲捨ててから甘くなる
 高倉健にちよつと似ている凍豆腐
 裾裏に洗い着物の色気見せ
 大臣が使い分けてる洗い顔

唐津市	唐津市	仁部	四郎	唐津市	唐津市	仁部	四郎	唐津市	唐津市	仁部	四郎
三浦	岸本	真島久美子	大島ともこ	三浦	岸本	真島久美子	大島ともこ	三浦	岸本	真島久美子	大島ともこ
強一	宏章	羅天	茂代	強一	宏章	羅天	茂代	強一	宏章	羅天	茂代
山下	純子	裕之	恭昌	山下	純子	裕之	恭昌	山下	純子	裕之	恭昌
野口真桜子	坂	恵子	隆彦	野口真桜子	坂	恵子	隆彦	野口真桜子	坂	恵子	隆彦
山下	純子	裕之	恭昌	山下	純子	裕之	恭昌	山下	純子	裕之	恭昌
山下	純子	裕之	恭昌	山下	純子	裕之	恭昌	山下	純子	裕之	恭昌
山下	純子	裕之	恭昌	山下	純子	裕之	恭昌	山下	純子	裕之	恭昌

家計簿と腕組みをする洗い顔
 洗柿も私に変えるアルコール
 洗いお茶啜って父を見る話
 白髪の一部にパープル靡かせて
 洗さより若さを求め赤を着る
 洗面を笑顔へ変えていく徳利
 まとまらぬ話に洗いお茶を飲む
 洗面の裏でソロバンほくそえみ
 洗柿の暖簾が秋を盛り立てる
 洗い顔くずさず生きた父の戦後
 ラジオから浪曲流れてた昭和
 さりげなく裏地に凝っているスーツ

大山市	金子美千代	大山市	金子美千代	大山市	金子美千代
河内長野市	落葉 ふみ	河内長野市	落葉 ふみ	河内長野市	落葉 ふみ
大阪市	平井美智子	大阪市	平井美智子	大阪市	平井美智子
堺市	矢倉 五月	堺市	矢倉 五月	堺市	矢倉 五月
川西市	大坪 一徳	川西市	大坪 一徳	川西市	大坪 一徳
富田林市	山野 寿之	富田林市	山野 寿之	富田林市	山野 寿之
羽曳野市	藤原 大子	羽曳野市	藤原 大子	羽曳野市	藤原 大子
今治市	永井 松柏	今治市	永井 松柏	今治市	永井 松柏
西宮市	福田 正彦	西宮市	福田 正彦	西宮市	福田 正彦
岡山市	大石 洋子	岡山市	大石 洋子	岡山市	大石 洋子
堺市	坂上 淳司	堺市	坂上 淳司	堺市	坂上 淳司
三田市	上田ひとみ	三田市	上田ひとみ	三田市	上田ひとみ
大崎市	宇都満知子	大崎市	宇都満知子	大崎市	宇都満知子
三田市	村田 博	三田市	村田 博	三田市	村田 博
三田市	多田 雅尚	三田市	多田 雅尚	三田市	多田 雅尚
札幌市	小沢 淳	札幌市	小沢 淳	札幌市	小沢 淳
東大阪市	佐々木満作	東大阪市	佐々木満作	東大阪市	佐々木満作
大阪市	津村志華子	大阪市	津村志華子	大阪市	津村志華子
香南市	桑名 孝雄	香南市	桑名 孝雄	香南市	桑名 孝雄
岡山市	藤澤 照代	岡山市	藤澤 照代	岡山市	藤澤 照代

美しい人の際立つ洗い服

「あーあ」

(投句 232名)

福 西 茶 子 選



褒めたばっかりに今夜もハンバーグ
夕焼だあーあ明日も農作業
あーあまた書くとしようか年賀状
あーあ又乗り越しちゃった終電車
退屈そうな奴が遊びにやってくる
出勤に及ばずあーあ派遣切り
去年まであんなに獲れていたサンマ
間が悪い友から電話一句消え
付度はもはやしないと決めたはず
あーあなど言わずにもっと汗を出せ
留守番のボチが齧った高い靴
詐欺被害額ある所には有るもんだ
買いつれあーあ明日の米が無い
ライバルが島流し俺窓際に
令和二年を何だか損をした様な
ため息を捨ててきました百均で
必勝の鉢巻までも散るサクラ
あーあと母も親父も通知表
子の自立舗装できないオフロード
言い勝った夜のビールが水っぱい

河内長野市 坂野 澄子
加西市 山端なつみ
豊中市 藤井 則彦
香南市 桑名 孝雄
大阪市 高杉 力
大山市 関本かつ子
倉吉市 牧野 芳光
大阪市 横山 里子
生駒市 饗庭 風鈴
名古屋 富田 末男
名古屋市 石田 隆彦
名古屋市 伊藤のぶよし
橋本市 後藤美恵子
奈良市 室田 行久
大阪市 森 廣子
大山市 金子美千代
弘前市 福士 慕情
池田市 奥園 敏昭
広島市 松尾 信彦
大阪市 石田 孝純

果籠りのはずの諭吉がまた家出
あーあまた夏の手抜きがこのシミか
満塁のチャンス逃がす恋でした
あした着るてにをはがまだ見つからぬ
今年もか巨人に弱い駄目なトラ
サヨナラのチャンス四番の併殺打
その結果葉が一つ増えあーあ
あの一曲歌い終電乗り遅れ
あーあでは済まぬぞ今日の君の出来
あーあー凛々しい男も紙おしめ
あーあそうよ いずれ私も灰になる
あーあ鏡君は正しいから困る

佳 句

みなマスク誰が美人か分からない
会いたいよう密になりたいようあーあ
おかしいなみんな逆走してくるぞ
もしかして恋の寿命が来ましたか
溜息をつかれたことが深い傷

人

忘れたの今日は私の誕生日

地

ほほえみが別れの合図だったとは

天

いいムードなのにすぐ止む雨宿り

軸

幸せの佳境目覚まし鳴るまでは

豊中市 水野 黒兎
香芝市 山下 純子
笠岡市 藤井 智史
大阪市 平井美智子
三田市 多田 雅尚
堺市 奥 時雄
奈良市 山本 昌代
奈良市 米田 恭昌
三田市 福田 好文
奈良市 渡辺 富子
越谷市 久保田千代
池田市 上山 堅坊

札幌市 三浦 強一
奈良市 大久保眞澄
弘前市 高瀬 霜石
和歌山市 まつもととこ
土佐清水市 辻内 次根
三田市 上田ひとみ
岐阜県 喜多村正儀
堺市 澤井 敏治

初歩教室

題一都合

居谷 真理子

言うまでもないことですが参考句はあくまでもご参考までに。一番大切なのはあなたが何に心をとめ、それをどう表現するかです。技巧的に優れている句、素朴だが胸を打つ句。川柳は「みんなちがって、みんないい」です。でも一人よがりはずまらない。自分の思いがしっかりと読み手に届くよう、そんな勉強を一緒に。

(原は原句 参は参考句)

原ズル休み 都合通らず ネタ探し 義明

五七五と間を空けずに書きましよう

参ズルという都合で今日は休みます

原都合よく事が運ぶとあと怖い 弥生

この句も間が空いてました

参都合よく事が運んでいく不安

参都合よく事が運んであとのツケ

原 嫁さんの都合に合せて昼茶漬 光雄

参 嫁さんの都合で昼は茶漬け飯

原 人間の都合で川がゴミだらけ 尚

川だけではありませんね

参 これもまた人の都合か川のゴミ

原 都合よく川があるので捨てるゴミ

原 惚れた弱味振り回されるそれもよし 一弥

参 惚れた弱味振り回されておりますが

原 都合をつけて会いにきたのに裏切られ 眞智子

余韻を残しましょう

参 都合つけ会いにきたのにそれなのに

原 仕事人都合よいに捨てられる 秀爷

参 非正規は都合次第で捨てられる

参 仕事しか知らぬ男を使い捨て

原 お月さまの都合です愛語る夜 (興) 弘

月があるから夜は省いてもいいです

参 お月さまの都合も良くて愛語る

原 長電話チャイム音で歯止する 照枝

参 長電話やと切れますチャイム音

原 都合良く法の解釈変える国 通則

もう半歩踏み込んで

参 どなたかの都合で法を読み替える

原 親内緒無心は祖母に耳打ちで 厚子

参 ばあちゃんの耳にこっそりする無心

原 曖昧な「都合悪い」という返事 (川) 信子

原則として記号は使いません。この句なら

なくても大丈夫。

参 逃げですか都合悪いという返事

原 都合よく動く同期が出世する 厚江

参 指示通り動く同期がする出世

原 月冴えるお月見都合雲に問う 貴美江

参 お月見に雲の都合を問うている

原 祝い事袋に体都合つけ 開子

参 祝い事金と時間に都合つけ

原 都合よく出会った君と縁結ぶ ひとみ

参 都合よく出会ってからの深い縁

原 農真つ最中 癒し求めて孫と会う (澤) 良子

参 農繁期それでも孫に会いに行く

原 都合良く赤提灯へ寄って行く 汪

参 都合良いとこに赤提灯がある

参 いつだって赤提灯に寄る都合

原 来客にあわせカゴには秋海棠 閑

参 来客に秋海棠を籠に生け

原 あの人都合に合わせることなきを 千代

参 あの人都合に合わせ無事に済み

参 あの人都合で事故を避けられた

原都合ばかり言うはその気のない証拠 双葉

原都合がつけばはやんわりお断り 双葉

二句を一句に

都合だけ並べやんわりお断り

原都合よくその場に合わず二枚舌 えい子

都合よく変えております舌二枚

原町会役都合を聞かれ巧く逃げ 三樹夫

参町会役都合聞かれたから逃げた

原いつからかご都合主義の風見鶏 風鈴

ご都合主義と風見鶏がほぼ同じ意味

参ご都合の宜しい方へ風見鶏

原人間の都合聞かずに来る台風 勝正

台風には目がありました

参台風は人の都合を見ず聞かず 千賀子

原夕立に花の水やり助けられ

参タイムング良い夕立に庭の花 藤廣子

原お誘いが都合悪い日やつて来る

参お誘いは年と都合悪い日選つてくる マユミ

原近頃は年と都合悪いを使い分け

参近頃は歳も都合のうちに入れ

原都合が悪く断りたいが義理があるゆき

参天秤に義理と都合をかけてみる

原都合などはかさず内容言いなさいのぞみ

参はかさずに都合の中身言いなさい

原都合良く記憶仕分けて七十路を 令位子

参都合良く記憶仕分ける年の功

原倍返す融資を受けた恩返し (あ) さくら

「返す」「返し」とくどくなりました

参倍にして融資を受けた恩返す

原都合よけりやシネマどうかと誘われる風露

やわらかくしてみました

参よかつたらシネマいかかと誘われる

原三姉妹で御都合主義の募参り 道子

御都合主義の内容が分かりにくい

参三姉妹困ったときの募参り

原べんりです一身上という都合 のりひろ

確かに便利です

参問答無用一身上という都合

原不都合な話題変えたい時計見る 崇史

参不都合な話題になれば時計見る

原都合よく嵌る九回ホームラン 一平

何に嵌るのか

参放映の時間に嵌るホームラン

原市の花火コロナ都合で中止なる ミヨノ

「コロナ都合」、面白い表現ですね

参市の花火コロナ都合で取りやめに

原三密にはご都合などは言えないよ ひでお

参三密に店の都合は言えませぬ

参三密を避けるためには都合など

原息子から都合つけてときた電話 (岡) 恵子

オレオレ詐欺ではなかつたんですね

参実の子の都合つけてという電話

原欠席の都合にさせた孫のかぜ 紀美代

参欠席の理由は孫の風邪にする

「佳句」

嘘でしょう遅刻の理由寝坊でしょう (櫻) 良子

アメリカの都合に合わずまつりごと 不二夫

都合いい男にされて嬉しそう 行久

うぬぼれは有るが一応都合聞く (貝) 正子

「今月の推せん句」

頼んでも都合あるやろ神さんも 松田蟻日路

先ず都合聞いて要件切り出され 加藤 佳子

暇ですが気力の都合つきませぬ 太田 睦子

第26回 川柳塔まつり誌上大会

第26回川柳塔まつりは新型コロナウイルスによる感染予防のため、誌上大会として実施いたしました。全国から551名ものご参加を戴きました。有り難うございました。貴重な誌面に誌上大会要領をご案内、ご掲載賜りました各川柳社、個人的にそれぞれご支援、ご紹介くださいました皆さまのご厚情に心よりお礼を申し上げます。またご選句の労を賜りました選者の皆さまに深く感謝申し上げます。

入選句は平拔 77句、天地人 計 80句です。なお天地人位にはささやかですが賞品をお送りいたしました。

コロナ感染症拡大終息の見込みは立っておりませんが、皆さまくれぐれも健康にご留意の上お大事にお励みください。

皆さま方のご健吟とご活躍をお祈り致します。有り難うございました。

各 題 天 位

プライド 榊尾 奏子 選

銀杏散る一円で売るブリタニカ

愛媛 高市 すみこ

しつかり 鈴木いさお 選

言葉など要らぬしつかり抱いてやれ

兵庫 谷 口 修 平

織る 永見 心咲 選

悪友とワンダーランド織り上げる

鳥取 新家 完 司

元 氣 竹村紀の治 選

太陽の下が本籍元気です

兵庫 山 内 迪

混ぜる 西 美和子 選

お母さんにしてくれた事ありがとう

大阪 玉 山 智 子

扉 小島 蘭幸 選

コロナ終息ドアを開けば新世界

和歌山 木 本 朱 夏

プライド

栃尾 奏子 選



望まれて嫁ぎたかった布マスク
 6Bのプライドぶれぬアナログ派
 鎧捨て愛称で呼ぶ縄のれん
 飲兵衛として注がれたら断らぬ
 居酒屋の椅子にプライド置き忘れ
 プライドは置いてゴキブリやつつける
 松茸も秋刀魚も旬に食べてます
 エキストラバージンオイルしか買わぬ
 プライドが高い血糖値も高い
 ペルシヤ猫見向きもしない猫まんま
 振られたんじゃないのよ振ってやったのよ
 ゴールド免許一時停止を怠らず
 死んだふりプライドなんか気にしない
 奥様と呼ばれた上は値切れない
 大提灯下ろしてつちり姿消す
 デザインは変えぬ老舗の包装紙
 プライドを捨てたら急にモテてきた

大阪 島田 明美
 奈良 五味 尚子
 大阪 齋藤奈津子
 鳥取 新家 完司
 大阪 中村 恵
 愛媛 浜本 光子
 大阪 助川 和美
 佐賀 真島久美子
 岡山 高木 勇三
 大阪 井丸 昌紀
 埼玉 宮本彩太郎
 大阪 美馬りゅうこ
 大阪 原田すみ子
 大阪 太田 省三
 大阪 関 よしみ
 広島 北村 善昭
 山口 坂本 加代

プライドは只今昼寝しています
 落ちてたら一円玉も拾います
 少しだけ削っておくか古希の鼻
 ごめんなさい素直に言った方の勝ち
 プライドがあつたあの時若かつた
 ゴミの日に古いプライド一つ捨て
 ごきげんようプライド高い犬に会う
 ナノの差にかける町工場の誇り
 プライドはミクロ町工場が生きる
 信頼のプライド背負う玉の汗
 父の自負持つて乗り込むマグロ船
 ゼロからのスタートだった焼け野原
 折鶴のプライド核を許さない
 プライドが辞書にない国恐い国
 パリコレのモデル焼き芋など食べぬ
 民族の誇り神話に盛つてある
 プライドが握手の訳を聞かせない
 背伸びして源氏物語の講座
 プライドを捨てて闘うにらめっこ
 プライドは捨てて背中自然体
 裏地にはプライド利かす一張羅
 千年を崩れぬ石垣の寡黙
 面目を傷つけられてからの価値

大阪 川端 一步
 佐賀 西村 正紘
 福島 安藤 敏彦
 青森 さいとうみき
 愛媛 宮尾みのり
 大阪 富田 保子
 鳥取 後藤美恵子
 愛媛 栗田 忠士
 石川 藤村 容子
 大阪 沢田 和子
 兵庫 生田えい子
 兵庫 前田 純
 愛媛 黒田 茂代
 大阪 澤田 悦子
 和歌山 西川 千鶴
 大阪 植野 繁子
 広島 田中 敬子
 大阪 中山 春代
 京都 西山 竹里
 大阪 藤田 武人
 大阪 中島 一彌
 兵庫 山田美春日
 大阪 両澤行兵衛

プライドはマグマ溜りへ休火山
 プライドを秘めたおじぎは真つ直ぐだ
 プライドで買ったサイズの合わぬ靴
 旧家だな庭木一本まで威張り
 整然と並ぶわたしは日本人
 嵐去りプライドが樹に引つ掛かり
 それぞれがクレオパトラの鼻を持つ
 後戻りしないプライド蝸牛
 主の座ポチと争う昨日今日
 真四角にされた西瓜の縞模様
 一筋に道を貫く指の胼胝
 送りバントなら任せておけおれに
 譲れないひとつを詰める旅かばん
 白髪の指へキラリと5カラット
 幼気な舌プライドを真つ二つ
 プライドをくすぐらないで猫じゃらし
 オムライスの上にケチャップの矜持
 プライドを棄てた気さくなジャンプ傘
 プライドは捨てた茹で卵のつるん
 大阪のきつねうどんというおかず
 キラキラしなきヤスワロフスキーなんだから
 どちらまでちょっとパリまでボンジュール
 プライドも時には老いの底力

広島 松尾 信彦
 大阪 中林 佳子
 岡山 紫 しめの
 愛媛 古手川 光
 青森 吉田 吹喜
 静岡 鈴木千代見
 鳥取 倉益 一瑤
 三重 竹島 晃
 青森 稲見 則彦
 愛媛 郷田 みや
 奈良 笹倉 良一
 大阪 松浦 英夫
 兵庫 石原てるみ
 愛媛 山内美恵子
 大阪 土田 欣之
 兵庫 中岡千代美
 奈良 山田 恭正
 大阪 初代 正彦
 愛媛 大内せつ子
 奈良 竹永 広義
 大阪 赤松ますみ
 和歌山 三宅 保州
 大阪 島田千鶴子

妻の拍手生きる自信を取り戻す
 究極のプライド自力でのトイレ
 にんげんでありつづけた自尊心
 プライドはやわらかな場所へとかえる
 生き様の誇り忘れぬ母を看る
 母さんの手にそっくりな私の手
 最後まで杖をつかずに逝きはった
 雲はいいなあ意地を張らずに風まかせ
 思いきり泣くのは家に着いてから

佳句

プライドは蟻が担いでいきました
 絶対のプライド元素記号一
 ピエロにもプライドはある黙秘する
 愛された記憶が凜と立っている
 不意のキスプライドなんて吹っ飛んだ

人
 国歌斉唱きみはするのかしらないのか
 母のプライドお豆腐の角にある

地
 天
 銀杏散る一円で売るブリタニカ

軸
 美魔女なり己に負けぬのが掟

奈良 渡辺 富子
 大阪 木見谷孝代
 広島 大森 昭恵
 鳥取 斉尾くにこ
 大阪 古今堂蕉子
 大阪 池田 純子
 兵庫 山田 厚江
 大阪 藤塚 克三
 兵庫 上田ひとみ
 高知 辻内 次根
 鳥取 森山 盛桜
 愛媛 兵頭 俊子
 奈良 居谷真理子
 兵庫 藤井 宏造
 岩手 伊藤 豊志
 奈良 小林すみえ
 愛媛 高市すみこ

しっかり

鈴木 いさお 選



新政権しっかりたのむ拉致のこと
七枚のマスクに込めた抗議文
次世代へ反戦確と伝えねば
一強に野党しっかり衿正せ
昭和史にしっかり残る黒いしみ
免許更新セルフチェックは欠かさない
反核の署名太字でする八十路
終戦後五人育てた母の腕
妻と言う現人神に護られて
しっかりと泣いて明日のネジを巻く
無器用な方が最後は生き残る
ひざを折りしっかり拾うほめ言葉
天候不順も花はしっかり四季を知る
板長が守る老舗の四季の味
三途の渡ししっかり税がついている
地ならしはしっかり部下にさせておく
右左右左右左右

大阪 川端 一步
兵庫 多田 雅尚
大阪 小野 雅美
大阪 川本 信子
愛知 金子美千代
大阪 美馬りゆうこ
大阪 柿花 和夫
大阪 宇都宮ちづる
奈良 大西 將文
広島 田辺与志魚
青森 高瀬 霜石
福島 安藤 敏彦
大阪 油谷 克己
広島 北村 善昭
鳥取 倉益 一瑤
兵庫 前田 純
岩手 伊藤 豊志

一度でもしっかり者と言われたい
明日走る靴は揃えて出してある
ひとまわり上の夫を尻に敷く
再起する背なをしっかり押す妻子
しっかりと見つけたのにディスタンス
下味をしっかり付けて嫁がせる
しっかりと下茹でされて嫁にゆく
訳ありの訳はしっかり聞いて買う
しっかりと惚けきってから逝くつもり
ジャンプアップ今はしっかりしゃがむ時
しっかりと貯めてホームへ行きました
嬰鏢と鉄振る母の曲がる腰
口答えしっかりするがまだおむつ
四番にバントをさせて勝ちに行く
しっかりとした脚ですがよく転ける
しっかりと小熊よ秋を食べておけ
ポロ家でも鍵はしっかりかけて出る
約款をきちんと読むと分からない
しっかりとしないとチョコに叱られる
しっかりと焼かれた骨の安堵感
シングルマザーしっかりと育ててる
叱る時は本気泣かれても叱る
無観客ですがしっかり演じきる

鳥取 伊藤 昭子
愛媛 山内美恵子
大阪 栃尾 奏子
岡山 藤澤 照代
大阪 藤原 大子
和歌山 古久保和子
愛媛 田中 なお
大阪 中林 佳子
兵庫 西 美和子
大阪 大浦 福子
兵庫 山田 耕治
大阪 山野 寿之
奈良 山下 純子
神奈川 菊地 政勝
大阪 松尾美智代
鳥取 斉尾くにこ
大阪 伊達 郁夫
鳥根 中筋 弘充
鳥取 成田 雨奇
鳥根 原 徳利
大阪 中井 佳子
大阪 太田扶美代
兵庫 上野多恵子

こと言う時にすっかりコマージュル
 親子でもすっかり利息とられてる
 まだボクに金にならない役がくる
 記憶にはないがすっかり覚えてる
 九十五年すっかり生きた自負がある
 命綱すっかり妻の手の内に
 賛成の多い中でもノーと言う
 しっかりと蒔いた種にも出来不出来
 丹田にしっかりとせよと言いつ聞かす
 一本の鍵からはじまった自立
 しっかりと母の目を見て言えますか
 しっかりと主語しっかりと句読点
 七割も引いてまっせと損はせず
 しっかりと食べて記憶にない朝餉
 朝5錠夜はしっかりと酒二合
 宣言のまえにしっかりと飲んでおく
 焼酎の湯割りで八時間眠る
 足裏でしっかりと聞いた土の声
 個人差あり隅にしっかりと但し書き
 消えぬよう虹をしっかりと抱いている
 しっかりと心の奥は覗かせぬ
 逃げ道を確保してから売る喧嘩
 目と口がちりめんじゃこにちゃんとある

和歌山 三宅 保州
 兵庫 太田としお
 徳島 小畑 定弘
 奈良 山田 順啓
 大阪 津村志華子
 大阪 山岡富美子
 大阪 鈴木 栄子
 大阪 原田すみ子
 和歌山 木本 朱夏
 大阪 鈴木 かこ
 兵庫 梅澤 盛夫
 愛媛 佐尾 文子
 奈良 板垣 孝志
 大阪 廣田 和織
 奈良 長谷川崇明
 鳥取 竹村紀の治
 鳥取 新家 完司
 熊本 黒川 孤遊
 大阪 原 洋志
 大阪 銭谷まさひろ
 鳥取 石谷美恵子
 兵庫 永田 紀恵
 兵庫 藤井 宏造

お別れは次の彼氏を決めてから
 しっかりとね手術するのは私です
 一の字をしっかりと書けた日のゆとり
 しっかりと生きた鎧はもう脱ごう
 しっかりとしてるつもりがヘマばかり
 結論はしっかりと飯を食べてから
 托卵の口を喋んでホトトギス
 しっかりと二人いて舟漕ぎ出せず
 しっかりと媚薬を含ませた疑似餌
 しっかりと伝えるゴメンとアリガトウ
 しっかりと聞いてたつもり見たつもり
 目ん玉をしっかりと開けて見る明日
 ポケットでしっかりと握っている拳
 しっかりとせいと肩を叩いてくれただけ
 へそくりを確保した女のやがて
 全力で投げろ受けとめてやろう
 言葉など要らぬしっかりと抱いてやれ
 葬式代だけはしっかりと貯めてある

奈良 小林すみれ
 大阪 山内規予子
 大阪 村上 直樹
 大阪 内田志津子
 大阪 津田シルク
 大阪 西出 楓楽
 大阪 土田 欣之
 広島 瀬戸れい子
 愛媛 永井 松柏
 広島 鴨田 昭紀
 大阪 古今堂蕉子
 高根 石橋 芳山
 鳥根 伊藤 寿美
 奈良 安土 理恵
 岡山 市田 鶴邨
 奈良 居谷真理子
 兵庫 谷口 修平

織る

永見心咲選



愛を織る私の糸は褪せません
 原風景そっと織り込む駅ピアノ
 遠吠えを織ると女々しい色になる
 鉄橋を渡る夜汽車は横の糸
 織るなんて妻と仲良く暮らすだけ
 横糸が絡んで夢がふくらまぬ
 織り急ぐままだ老春のど真ん中
 婀娜な夜に織りなすジャズのズンチャチャチャ
 年金の暮らしは木綿糸で織る
 どん底から虹織り上げた自負がある
 差し糸に折り込む母からの手紙
 ガタンゴトン織っては捨てた夢の数
 縦糸が失せて完成せぬ家紋
 ググったり本を読んだり時を織る
 どんな夢織っているのか子供部屋
 人偏におためごかしが織ってある
 織糸の湿りを指に花刺繍

愛媛 重岡 薫
 愛媛 田中 なお
 広島 笹重 耕三
 長野 西沢 葉火
 大阪 中川 一男
 兵庫 長島 敏子
 京都 今井万紗子
 島根 原 徳利
 大阪 山岡富美子
 愛媛 葉師神ひろみ
 青森 北山まみどり
 岩手 伊藤 豊志
 大阪 矢倉 五月
 鳥取 斉尾くにこ
 兵庫 山田 耕治
 鳥取 森山 盛桜
 大阪 太田 省三

ハッピーエンドめざし二人の影を織る
 ガセネタを織り込み速度つく噂
 愛の糸ほころび見えて来るけれど
 リズムよくシャトルが走る妻の糸
 人生という喜劇織るカタツムリ
 持ちあげて仕上がりを見る人生布
 揮担ぎ羽織着る日をめざす四股
 芭蕉布を絶やさぬようにおぼあの手
 地表織る錦富良野のラベンダー
 織りむらるを今笑い合う老夫婦
 平成まで織った令和で切れた糸
 織る前の糸の準備の大切さ
 プタ玉に塗った格子目マヨネーズ
 懸命に兎を織り上げた両乳房
 ワンルーム鶴が機織る場所がない
 夢を織る風に揺れてるキャミソール
 縦糸の張りに合わせるの私
 織りムラもあってあなたの美しさ
 最強の戦闘服よ訪問着
 錦織る秋が北からやってくる
 織りネームあのブランドが安過ぎる
 一枚の布に織りたい万国旗
 信頼のイメージを織る日本製

広島 田辺与志魚
 佐賀 仁部 四郎
 京都 渡邊真由美
 静岡 鈴木千代見
 大阪 碓氷 祥昭
 東京 川本真理子
 大阪 澤田 悦子
 大阪 石橋 直子
 兵庫 丸山 孔一
 大阪 吉村久仁雄
 島根 松本 文子
 大阪 藤井 康信
 兵庫 岸田 万彩
 大阪 中村 恵
 岡山 丸橋 野蒜
 鳥取 前田 楓花
 愛媛 花岡 順子
 神奈川 相原あやめ
 青森 吉田 吹喜
 大阪 川端 一步
 奈良 竹永 広義
 大阪 上山 堅坊
 兵庫 永田 紀恵

カシミヤのジャケット買った給付金

大阪 江島谷勝弘

天国での昼寝へ寝蓐産織っている

大阪 北川ヤギエ

想い出を織るリリアンの指あそび

兵庫 亀岡 哲子

再会の懐古織りなす湖の綺羅

愛媛 大葉美千代

まだ青い織り斑がある瑕がある

広島 大森 昭恵

鳥唄を織り込んでゆく機の声

奈良 板垣 孝志

ラッキョウが彩を織りなす大砂丘

鳥取 中村 金祥

ヒト科の性織り込み走る終電車

愛知 八甲田さゆり

ひたすらに今今今を織っている

奈良 小林すみえ

大慌て機織虫の冬支度

和歌山 西川 千鶴

コロナ禍の世界織り成すモダリテイー

愛媛 福田 明子

八月の泪が染みた小石織り

広島 田中 敬子

コートを羽織る遣らずの雨をふりきって

大阪 松浦 英夫

縫い代をたつぷり織った子の躰

新潟 相田 柳峰

どの糸も織れば形になつてくる

兵庫 近兼 敦子

にんげんを織れば泣き笑いの模様

大阪 荻野 浩子

筵旗織りつづけてる蝦夷の血

青森 高瀬 霜石

元彼の数が私のマテリアル

佐賀 真島久美子

風羽織り男のけじめつけに行く

鳥根 石橋 芳山

織り方を間違え私迷い子に

山口 大田 孝子

ポジティブな青いデニムはほくの意志

大阪 柴田 桂子

平織がいいね体温感じ合う

兵庫 西 美和子

自分史を織る縦糸がまた伸びる

鳥取 木天 麦青

キコキコと夫婦で織ったものがたり

福島 安藤 敏彦

断捨離の出来ぬタテ糸ヨコの糸

大阪 森中恵美子

不幸さえ差し色にして人生旗

鳥取 池田 美穂

金糸で織った自画像の鼻っぱし

愛媛 大内せつ子

ミラーボールの市松模様酔うグラス

兵庫 村田 博

何もかも許して虹を織っている

鳥取 田賀八千代

横糸の妻が時々ぐっと引く

大阪 片岡 加代

我が儘を織ってばかりのアカンス

愛媛 松本 慎吾

雨上がり悪魔が虹を織り上げる

大阪 井丸 昌紀

佳句

煙幕を織り上げ過去を消しました

大阪 小野 雅美

羽衣は吐息で織ってあるのです

大阪 栃尾 奏子

幸せは透かし模様はまだむこう

大阪 桑原すゝ代

平織りに男の美学だぶらせる

兵庫 生田 頼夫

鎖骨からふわりと夜が織りあがる

大阪 赤松ますみ

人

でこぼこなわたしですがと織っている

大阪 香月 みき

地

あと何年八十歳になりました

兵庫 太田としお

天

悪友とワンダーランド織り上げる

鳥取 新家 完司

軸

夕陽にも褒められるよう組み立てる

元 氣

竹 村 紀の治 選



少しだけ元気を貰う銭の音

ライバルへ男は意地の空元気

春眠冬眠昼寝もしています

燕の子囀り軒先活気づく

元気やねんけど薬は飲んでます

コマーシャル見てりや飲まなきや駄目な気が

年金の元を取るまで生きてやる

祝われた後から疎まれる長寿

それからを生きる元気な句読点

おだてられ生命線が嬉しがり

いつまでも元気などで無理なこと

さし投げた主治医の棺担いでる

爺さまを食べたか婆さまの元気

風船の上昇気流超す元気

元気です今夜も酒と意気投合

押し売りが元気ですかと聞いてきた

ジャンケンポンできる間はいじょうぶ

唇の元気マスクの中にある

溢れ出る元気が背負うランドセル

冷蔵庫開けて元気の素探す

食欲がめつぼうあつて困ります

よろめくな俺もお前も秋の蚊も

トリセツに元気になると書いてある

大阪 平井美智子

大阪 阿部 俊八

大阪 太田扶美代

兵庫 谷口 修平

大阪 谷口 義

大阪 西川ひろし

鳥根 原 徳利

広島 鴨田 昭紀

兵庫 野口 修

大阪 金川 宣子

奈良 花田 文聡

奈良 高田まさし

奈良 板垣 孝志

広島 大森 昭恵

青森 稲見 則彦

兵庫 生田えい子

大阪 杉山フジ子

石川 藤村 容子

大阪 中島 一彌

鳥取 門村 幸子

愛媛 栗田 忠士

愛媛 高市すみこ

愛媛 永井 松柏

「元気ですか」と時限爆弾渡される

意地悪を生き甲斐にして婆元氣

ライバルを元気にしてるのはわたし

大丈夫ひとりで医者に行けますよ

元気出せがんばれよりも諭吉です

喜寿傘寿元氣洗刺老夫婦

病院の薬やめたら元氣です

寝てる時以外は何か喰うておる

一瞬で元氣レモンのひとかじり

煩惱が支えてくれている元氣

好奇心ムクムク湧いてまだ元氣

スリッパの下でゴキブリまだ動く

良く食べて良く寝て今日も良く笑い

窓拭きの脚立ぐらいは大丈夫

ときめきがあれば明日へまだ飛べる

いつまでも元氣な耳が掘る墓穴

笑顔とは元氣にさせる魔法です

愛媛 鎌倉 俊一

大阪 石田ひろ子

鳥根 岸 桂子

大阪 鶴田 寿子

大阪 助川 和美

大阪 井澤 壽峰

鳥根 篠原紋次郎

岡山 紫 しめの

愛知 小出 順子

大阪 西出 楓楽

大阪 川本 信子

大阪 岡田 和枝

鳥取 平尾 正人

大阪 中山 春代

奈良 笹倉 良一

兵庫 中村 孝子

和歌山 柏原 夕胡

夏草がスクラム組んで攻めて来る

他人から元気を貰うパンバイア

まだ元気マシユマロならばまだ囁める

金魚鉢より跳び出して死んでいる

もうあかん言われ続けて二〇年

エイジシユート狙う米寿のスクワット

ジャムの蓋パカッ まだまだがんばれる

モーツアルトに飽きたか腹を蹴るいのち

恋バナの恋の部分にはっちゃける

今日も快調朝の鏡と笑い合う

古希過ぎてまだ山男山ガール

片恋は無料のサブリです元気

バッテリーが切れるまでは元気です

最悪と言ってるうちはまだ元気

いつだって笑ってくれる人がいる

コロナ禍に大地を起こし大根蒔く

後期高齢ですがハートはピンク色

なによりもべっぴんさんが好きである

買い替える次はピンクのスニーカー

初期化して今日が元気に作動する

空気のような夫いますよ元気です

絵手紙の秋刀魚ピチピチ跳ねている

ポジティブになろう元気な曲かけて

埼玉 宮本彩太郎

岡山 山崎 三毛

岡山 目賀 和子

兵庫 山田 耕治

大阪 両澤行兵衛

大阪 村上 直樹

大阪 島田 明美

広島 田辺与志魚

和歌山 まつもととこ

奈良 安土 理恵

奈良 山下 純子

奈良 山田 恭正

大阪 岡本 遊風

岐阜 喜多村正儀

青森 北山まみどり

大阪 木見谷孝代

愛媛 柳田かおる

兵庫 上田ひとみ

愛媛 郷田 みや

和歌山 木本 朱夏

鳥取 田賀八千代

静岡 鈴木千代見

兵庫 富永 恭子

吾輩のパワースポット紀伊國屋

ポッケにはバイタリティという拳

元気かと年金機構から便り

皆勤賞ずらり私の宝物

元気かと心配してる年賀状

脳トレよ丸かじりする広辞苑

まだ元気白いページを生きていく

精一杯踊る鳥獣戯画の中

元気なんは誰のお蔭や言うてみい

佳句

川柳に恋していつも元気です

コロナ禍で帰れませんが元気です

青汁を飲んでるゴルゴ13

除草剤こぼれた跡に月見草

だんじりを猛禽類の顔で引く

人

どうだどうだ俺の表面張力だ

ひまわりに元気をもらう白い夏

地

天

太陽の下が本籍元気です

軸

早々と戒名付けて元気です

大阪 原田 正士

佐賀 真島久美子

広島 北村 善昭

大阪 沢田 和子

奈良 西澤 知子

青森 吉田 吹喜

和歌山 石田 隆彦

奈良 居谷真理子

鳥取 成田 雨奇

大阪 川端 一步

岡山 椎葉つとむ

青森 高瀬 霜石

愛媛 大内せつ子

兵庫 藤井 宏造

愛媛 田中 なお

大阪 佐々木満作

兵庫 山内 迪

混ぜる

西 美和子 選



おいしそう混ぜる音からたまご焼き
まあ待てと割って入ってない混ぜに
反対派の意見尊重しなければ

真贋を混ぜて骨董オークション
混ぜた筈出来た子みんな夫に似
秋の皿人恋しさも混ぜて盛る

言い訳を混ぜると保護色になった

冗談に混ぜた小骨が大き過ぎ

爆笑の渦に混じっている孤独

混ぜられて底の私が浮上する

願い事神よ仏よキリストよ

手術台希望と覚悟混じり合う

心意気へ感謝も混ぜて闘病記

十二色混ぜてブラック超える黒

よく混ぜているが最後は僕の色

消しゴムの滓に混ざっていた本音

句読点疲れる頃に混ぜておく

恥集め焦げないように混ぜている

胃袋で混ぜる小言と褒め言葉

納豆を捏ねて秘密を閉じ込める

虚栄心に少しは混ぜる無の心

言い訳を混ぜて批判の目に晒す

不純物混ぜて自画像出来上がる

兵庫 清水久美子

愛媛 福田 明子

兵庫 長浜 美籠

神奈川 妹尾 安子

大阪 島田 明美

佐賀 西村 正紘

大阪 荻野 浩子

大阪 宇都宮ちづる

大阪 藤塚 克三

青森 高瀬 霜石

和歌山 西川 千鶴

兵庫 石原てるみ

大阪 赤松ますみ

愛媛 郷田 みや

大阪 西澤 司郎

大阪 中島 一彌

大阪 穂山 常男

兵庫 萩原 狸月

大阪 大島ともこ

大阪 北川ヤギエ

奈良 山田 順啓

大阪 古今堂蕉子

大阪 桑原すゞ代

大阪 鈴木 かこ

島根 伊藤 寿美

大阪 太田扶美代

山口 坂本 加代

兵庫 竹山千賀子

大阪 小野 雅美

愛媛 佐尾 文子

愛媛 大内せつ子

大阪 岩佐ダン吉

大阪 杉山フジ子

大阪 竹中キキ

和歌山 小谷 小雪

鳥取 新家 完司

大阪 村上 直樹

大阪 水野 黒兎

新潟 相田 柳峰

鳥取 森山 盛桜

歌声と風を混ぜればカーニバル

よく混ぜてみてもガラガラポンの中

溜息も混ぜて脱皮のど真ん中

或る日ふと黒酢に混ぜる殺意など

人びとの祈りの混じる月光る

誰ですか混ぜっ返しを呼んだのは

十回に一回本気混ぜてみる

頂いた血が体内を駆け巡る

玉石混淆見分けられるか人の価値

おばあさんを混ぜておいたら大丈夫

混ぜられないお互い様で夫婦です

弟と兄との知恵で本家無事

混ぜ方にコツがあるんよ粉モンは

少量の毒に気づかぬふりをする

原色を忘れてしまうことにする

本当を混ぜたらきつと泣くでしょう

脳回路どうやら白を混ぜすぎた

人間の絵を描く筆に愚を混ぜる

みたらしにユーモア少し混ぜて塗る

松茸ごはんにも混ぜてはいけません

シエーカーにアンニユイなどもひとしずく

両親のいいところ取りをするハーフ

異分子が混ぜると分裂が起る

青森 北山まみどり

大阪 片岡 加代

鳥取 倉益 一瑤

和歌山 木本 朱夏

兵庫 前田 純

大阪 江島谷勝弘

東京 川本真理子

兵庫 亀岡 哲子

大阪 油谷 克己

大阪 谷口 義

大阪 山内規子子

鳥取 政岡日枝子

青森 吉田 吹喜

岩手 伊藤 豊志

兵庫 上田ひとみ

大阪 峯島 妙

青森 稲見 則彦

岡山 池上 和舟

大阪 原 洋志

広島 小島 蘭幸

奈良 居谷真理子

大阪 坂上 淳司

大阪 佐々木満作

母親参観黒一点が嬉しそう

清濁を併せ呑み込み強くなる

キラキラを混ぜてピンチを脱出だ

ウイスキー飲み放題は水臭い

洋酒日本酒何でも来いと若かった

ドキドキドキカルメラの箸そつとぬく

椅子揺すり右脳と左脳混ぜている

月満ちる愛しさ憎さ混ぜたまま

麦飯の茶色の線がいやだった

佳句

好きな色混ぜる弱気なカメレオン

わたくしも混ぜて下さい楽しそう

記念樹へ連理の枝も絡ませる

いくつもの夏混ぜた色八月忌

なんだなんだ みんな混ぜたってこそ平和

人

SNS神とサタンのページです

地

切るように混ぜる手首の先の秋

天

お母さんにしてくれた事ありがとう

軸

両親の愛に感謝の今がある

奈良 米田 恭昌

大阪 碓水 祥昭

奈良 阪本きりり

大阪 松岡 篤

北海道 三浦 強一

佐賀 真島美智子

埼玉 久保田千代

神奈川 相原あやめ

和歌山 石田 隆彦

愛媛 山内もとこ

大阪 齋藤さくら

奈良 中森 勝代

熊本 黒川 孤遊

青森 さいとうみき

奈良 阪本 高士

佐賀 真島久美子

大阪 玉山 智子

扉

小島 蘭 幸選



あと幾つ百寿の扉目指したい
 好きなことしたくて扉すり抜ける
 対面を望む扉が開かない
 パブル期を朽ちた門扉が語りかけ
 幸せの扉が錆びて開かない
 青春に戻るドアは無いだろうか
 禁断の扉開けると空だった
 ネコバスのドアをトトロが開けにくる
 愛という鍵で心の扉を開ける
 全開をしたい春へと向かうドア
 コロナウイルスの扉を開けたのは誰だ
 夫婦でもプライベートという扉
 コロナでも心の扉開けてます
 あの世への扉只今閉鎖中
 三密を避けて古刹のご開帳
 お帰りの元気な声待つ扉
 いつだって母の扉に鍵はない

大阪 中川 一男
 鳥根 石橋 芳山
 愛知 西郷紀美代
 鳥取 後藤美恵子
 大阪 吉村久仁雄
 兵庫 多田 雅尚
 愛媛 池谷三和子
 鳥取 倉益 一瑤
 奈良 大塚のぶよし
 大阪 立蔵 信子
 大阪 きとうこみつ
 兵庫 太田としお
 奈良 饗庭 風鈴
 広島 薮 帆子
 広島 玉井 勝順
 愛媛 栗田 忠士
 広島 松本壽賀子

自動ドアだろうと立っていた五秒
 いつかこの扉を開けて亡母と逢う
 解禁日待ってる三密の扉
 困ったら来いと笑っている扉
 空想はもうやめましたドアチエーン
 鍵失くしたことは三日黙ってた
 運命の扉二人でこじ開ける
 コロナ危機開いた扉が閉まらない
 仏壇を開けて留守番頼みます
 待っているだけでは開かない扉
 父さんが見直されてるアウトドア
 生と死を分ける扉の無表情
 扉開けてしもたら僕の負けになる
 どこでもドアあればコロナの前の世に
 初夏の風心の扉開けに来る
 天国と地獄を仕分けする扉
 此のドアを押せば二度とは戻れない
 生き甲斐の扉を開けた五七五
 楽しみの扉コロナが皆閉める
 禁断の扉を開ける好奇心
 百歳の扉らくらく開く時代
 あの世へと続く扉が半開き
 友達が扉になってくれている

青森 阿部 治幸
 大阪 鴨谷瑠美子
 大阪 荻野 浩子
 大阪 柴田 桂子
 岡山 永見 心咲
 大阪 谷口 義
 大阪 油谷 克己
 兵庫 長川 哲夫
 兵庫 山田 耕治
 和歌山 三宅 保州
 兵庫 竹山千賀子
 愛媛 越智 学哲
 大阪 村上 玄也
 大阪 出口セツ子
 大阪 雪本 珠子
 大阪 伊達 郁夫
 鳥取 八木 千代
 大阪 大浦 福子
 大阪 奥村 五月
 青森 高瀬 霜石
 大阪 大島ともこ
 奈良 渡辺 富子
 大阪 太田扶美代

風評に負けないフクシマの扉

島根 原 徳利

結婚しました温い扉になりました

愛媛 西田美恵子

大人へのドアはすんなり開くけれど

岡山 杉山 静

面会の扉閉ざしたのはコロナ

愛媛 花岡 順子

議事堂の扉が記憶する血糊

東京 山田こいし

百態のドラマが出入りする扉

愛媛 中野寿美子

うしろ手でボタン愛は出て行つた

大阪 美馬りゆうこ

許されたようだ扉が全開だ

大阪 神田 良子

彼岸花地獄の扉かも知れぬ

佐賀 真島美智子

火葬場の扉悲しい色である

奈良 西澤 知子

文学の扉開けたら塔まつり

大阪 澤井 敏治

ラッキーかどうか扉は開いている

岡山 紫 しめの

晴れた日は開け放たれていた昔

和歌山 佐藤 まき

妻がまた昔の扉開けてきた

福島 安藤 敏彦

サビシくてみすゞの扉開けました

和歌山 柏原 夕胡

反抗期扉の奥にまた扉

愛媛 黒田 茂代

いろいろあつて扉はすぐに開かない

広島 岩本 笑子

夢に向かう扉一枚ずつ開けて

三重 青砥たかこ

幾つもの扉を開けて来た旅路

和歌山 北原 昭枝

ノックして待つワクチンよまだですか

兵庫 小山 紀乃

閉ざす事出来ない昭和史の扉

鳥取 岡崎美知江

カメの歩みに扉ひらいて下さった

愛媛 大葉美千代

新しい扉ひらいてゆく医療

岡山 清水 克俊

反戦の扉開いたのは彬

大阪 鈴木いさお

意地悪な最終便の自動ドア

大阪 松岡 篤

野茂に続けとイチロー松井大輔ピッチャ

大阪 入江 晴菜

居酒屋の扉を開ける音が好き

島根 中筋 弘充

幸せの扉ひとりにひとつずつ

大阪 栃尾 奏子

山門の扉護っている蛙

広島 石原 淑子

仏壇の扉は開けたまま自粛

大阪 森中恵美子

拉致の子が出るまでノックし続ける

大阪 中山 春代

真つ新たな扉を開く生きている

兵庫 山口ヨシエ

佳句

会心の笑みは扉を閉じてから

奈良 笹倉 良一

暗号が解けるとつまらない扉

愛媛 柳田かおる

未来の扉私と開けてみませんか

大阪 小野 雅美

孤独死の扉はずっと開いていた

大阪 坂本 星雨

どこでもドアほんとはみんな持っている

大阪 鈴木 かこ

人

禁断の扉に見えてくるマスク

奈良 板垣 孝志

地

仏壇を閉めて田畑売る話

大阪 鈴木 栄子

天

コロナ終息ドアを開けば新世界

和歌山 木本 朱夏

軸

扉あけるとわたくしだけにある花野

川柳塔まつり誌上大会投句者

総数 551名
(順不同・敬称略)

【北海道】 三浦強一

【富山】 伴よしお

【青森】 小野澄子 吉田吹喜 石澤はる子

【石川】 藤村容子 寺井一也

阿部治幸 高瀬霜石 稲見則彦 福土慕情

堀本のりひろ

北山まみどり さいとうみき

【福井】 羽生悦郎 西谷公造 柳本君代

【岩手】 伊藤豊志

【長野】 西沢葉火

【宮城】 木田比呂朗

【岐阜】 喜多村正義

【福島】 安藤敏彦

【静岡】 柳谷益弘 中田 尚 鈴木千代見

【栃木】 荒牧やむ茶

【愛知】 富田末男 小出順子 西郷紀美代

【群馬】 伊藤正美

米山由美子 山本三樹夫 金子美千代

【埼玉】 青木 薫 中島通則 久保田千代

八甲田さゆり

中村伸子 宮本彩太郎

【三重】 小河柳女 久保田寿 青砥たかこ

【千葉】 窪田和子

竹島 晃 北田のりこ

【東京】 川本真理子 山田こいし

【京都】 清水英旺 寺島洋子 日下部徳子

【神奈川】 菊地政勝 加藤佳子 相原あやめ

武田悦寛 西山竹里 山田葉子 北野クニオ

妹尾安子

福井民雄 吉本 圭 中西展代 渡邊真由美

【山梨】 小林金剛

今井万紗子

【新潟】 相田柳峰

【大阪】 森 廣子 本田智彦 桑原すゝ代

鶴田寿子 岡田和枝 近藤 正 江島谷勝弘

神田良子 平賀国和 川端一步 原田すみ子

井丸昌紀 原田正士 鈴木栄子 柴本ばつは

藤田武人 前川善之 寺井弘子 津村志華子

金川宣子 峯島 妙 長高俊雄 平井美智子

西出楓葉 高杉 力 玉山智子 松本あや子

津守柳伸 樋口 眞 小野雅美 藤島たかこ

石橋直子 榎本舞夢 東 敏郎 田中ゆみ子

石田孝純 谷口 義 船見憲央 宮崎シマ子

立蔵信子 鈴木かこ 油谷克己 内田志津子

奥村五月 中井佳子 中井 萌 榎本日の出

岩崎公誠 阪本秀子 片岡加代 滝井恵美子

横山里子 立石郁子 中村民子 宇都満知子

坂 裕之 島田明美 田中廣子 古今堂蕉子

池田純子 藤井則彦 上出 修 松宮きらり

貝塚正子 萩原英三 江見見清 赤松ますみ

松尾時子 水野黒兔 酒井紀華 齋藤奈津子

中山春代	大浦初音	上山堅坊	松尾美智代	柴田桂子	荻野浩子	岡本遊風	杉山フジ子	山田厚江	山田耕治	藤岡りこ	中岡千代美
太田省三	西澤司郎	香月みき	出口セツ子	藤田治雄	都 武志	横田節子	津田シルク	藤井宏造	池野英坊	近兼敦子	緒方美津子
入江晴菜	太田 昭	増原文子	北川ヤギエ	葛城隆雄	助川和美	松浦英夫	太田扶美代	亀岡哲子	梅澤盛夫	福田正彦	太田としお
初代正彦	安田忠子	原 洋志	両澤行兵衛	藤井康信	雪本珠子	入江政雄	吉村久仁雄	小山紀乃	西美和子	丸山孔一	上田ひとみ
松岡 篤	富田保子	柿花和夫	山本希久子	坪井敦巳	川口 明	北浦彦弘	徳山みつこ	岸田万彩	村田 博	前田 純	野口真桜子
植野繁子	坂本星雨	伊達郁夫	森中恵美子	矢倉五月	中林佳子	西田敬子	片岡智恵子	幸田厚子	大西重男	森 玲子	住吉美和子
中原京子	川本信子	森 茜	弘津秋の子	坂上淳司	加島由一	綾田 清	山岡富美子	福田好文	尾崎一子	北野哲男	松本ゆかり
廣田和織	碓氷祥昭	富田啓二	片山かずお	大島ともこ	木見谷孝代	源田八千代	稲角優子	福田好子	多田雅尚	谷口修平	東内美智子
栃尾奏子	藤村亜成	入江秀雄	島田千鶴子	岸井ふさゑ	岩佐ダン吉	石田ひろ子	堀 正和	堀 正和	大上几代	澤 良子	生田えい子
谷口東風	阿部俊八	吉岡 修	坂本ミヨノ	山内規予子	齋藤さくら	羽田野洋介	澤 吉兼	梶谷和郎	桂ひろし	藤井美智子	
西村哲夫	堂本秀彦	井澤壽峰	佐々木満作	奥野健一郎	西田喜代志	きとうこみつ	野口 修	山内 迪	生田頼夫	長谷川善輔	
山根妙子	中 蘭 清	土田欣之	平松かずみ	竹中キークー	美馬りゆうこ	宇都宮ちづる	吉田笑太	相元世津	神崎みき子		
穂山常男	川端六点	藤原大子	山口弘委智	銭谷まさひろ			志原喜美子	山口ヨシエ	山田美春日		
久世高鷲	澤田悦子	池田和子	小川賀世子	〔兵 庫〕	松倉正美	山口光久	みぎわはな	吉村めぐみ	山端なつみ		
関よしみ	林 澄子	山野寿之	西川ひろし	奥水 弘	近藤勝正	富永恭子	石原てるみ	〔奈 良〕	饗庭風鈴	山田順啓	飛永ふりこ
中村 恵	大浦福子	黒岩靖博	吉永みどり	長川哲夫	長島敏子	能勢利子	奥澤洋次郎	大西將文	宇賀史郎	笹倉良一	小林すみえ
沢田和子	森田旅人	村上直樹	鈴木いさお	萩原狸月	上田和宏	青木公輔	米田利恵子	高橋敬子	山本昌代	毛利元子	小林すみれ
山衛守孝	中川一男	穂口正子	高田美代子	村岡義博	斎藤隆浩	中村孝子	竹山千賀子	米田恭昌	山田恭正	花田文聡	加藤江里子
藤塚克三	中島一彌	藤原義之	鴨谷瑠美子	山崎武彦	敏森廣光	新早義明	上野多恵子	古川洋子	安土理恵	五味尚子	大久保眞澄
内藤憲彦	村上玄也	澤井敏治	園田婦美枝	藤田雪菜	永田紀恵	長浜美籠	清水久美子	阪本高士	西澤知子	板垣孝志	居谷真理子

菱木 誠 渡辺富子 中堀 優 阪本きりり 藤井寿代 田中堂太 大福利彦 竹治ちかし 福田明子 松木慎吾 鎌田昌子 大葉美千代

中森勝代 安福和夫 竹永広義 長谷川崇明 岸 桂子 伊藤玲峰 加本精一 熱田熊四郎 越智学哲 浜本光子 玉井勝順 高市すみこ

谷川 憲 木嶋盛隆 大内朝子 高田まさじ 原 徳利 伊藤寿美 松本文子 篠原紋次郎 黒田茂代 佐尾文子 兵頭俊子 山本カヨ子

山下純子 大塚のぶよし 〔岡 山〕 遠藤哲平 大石洋子 工藤千代子 花岡順子 永井松栢 田中なお 岡山フジエ

〔和歌山〕 上田紀子 佐藤まさき 古久保和子 折鶴 翔 永見心咲 岡本余光 高橋由紀女 中野寿美子 柳田かおる 山内美恵子

木本朱夏 西川千鶴 北原昭枝 藤原ほのか 八木規子 松本 藍 池上和舟 戸田まさこ 西田美恵子 池谷三和子 山内もとこ

柏原夕胡 堀富美子 倉橋悦子 三枝眞智子 尾原洋子 龍門 孟 保田恭子 椎葉つとむ 薬師神ひろみ

三宅保州 小谷小雪 石田隆彦 村中悦男 丸橋野蒜 丸山威青 目賀和子 藤澤照代 〔高 知〕 辻内次根

松原寿子 まつもともとこ 杉山 静 清水克俊 市田鶴邨 山崎三毛 〔福 岡〕 石田 酎

〔鳥 取〕 田中天翔 平尾正人 小川健二郎 高木勇三 藤井智史 水野文緒 紫しめの 〔佐 賀〕 西村正紘 仁部四郎 真島久美子

倉益一瑤 西谷悦子 山下凱柳 副井ゆたか 〔広 島〕 北村善昭 小川道子 田辺与志魚 坂本蜂朗 太田幸江 真島美智子

木天麦青 伊藤嘉昭 伊藤昭子 田賀八千代 村上和子 小畑宣之 大森昭恵 瀬戸れい子 古賀由美子

牧野芳光 宮田風露 中原章子 石谷美恵子 萩 帆子 笹重耕三 鴨田昭紀 松本壽賀子 〔熊 本〕 岩切康子 杉野羅天 黒川孤遊

池田美穂 生田博子 八木千代 岡崎美知江 元吉慶子 石原淑子 小島蘭幸 岩本笑子 イーグルヘッド

成田雨奇 藤原久直 中井虎尾 山本ふみ子 田中敬子 田桑恵子 松尾信彦 古川雄一 〔宮 崎〕 恵利菊江

中村金祥 池澤大鯨 森山盛桜 竹村紀の治 〔山 口〕 上村夢香 坂本加代 中前幸子

西浦小鹿 前田楓花 竹信照彦 政岡日枝子 原よしえ 大田孝子 平田実男

大前安子 門村幸子 新家完司 後藤美恵子 〔徳 島〕 小畑定弘

田中重忠 山野すみれ 斉尾くにこ 〔愛 媛〕 郷田みや 古手川光 大内せつ子

〔島 根〕 石橋芳山 中筋弘充 梅瀬みちを 重岡 薫 鎌倉俊一 栗田忠士 宮尾みのり

◇ 予 告 ◇

第27回川柳塔まつり

と き 令和3年10月2日(土)

と ころ ホテルアウイーナ・大阪

『麻生路郎読本』余滴 (61)

路郎の「川柳人協会」⑨

葉原道夫

昭和15年12月19日に、「日本出版文化協会」が設立された。内閣情報局の監督下で出版統制の実施機関として作られたものである。もちろん、それまでも出版統制は実施されてきた。例えば、婦人雑誌は昭和14年に商工省の命令によって用紙を25%減らしたし、昭和13年から17年にかけては、新聞を各県一紙に統合したりした。それをさらに強化しようとしたものである。

堀口塊人の「昭和川柳」昭和16年2月号「日本川柳協會の全國化」に、「我が「昭和川柳」に對し、昨年は商工省織維局より、用紙使用數量の調査あり、本年は又、日本出版文化協會創立事務所へ詳細なる用紙使用実績の届出を命じられた。國家總力戰の眞最中に、微力我々の如き雜誌さへ、國家それ／＼の機關が關心を持つて居られると

いふ事は、おろそかに思つてはいけぬ。それこそ一頁ごとに御奉公の誠意をにじませて編輯するのが當然であると思ふ」とあるように、雑誌の統制に向けて日本出版文化協会が積極的に動き始めていることがうかがえる。

小熊伸一の「戦時体制下における教育情報統制」によれば、昭和16年に、婦人雑誌は64誌から16誌に、教育雑誌は154誌から29誌に、全体としては438誌の雑誌が113誌に減少した。川柳のような同人雑誌（川柳雑誌）は唯一の有保証の營業誌も統廃合を余儀なくされた。

大阪の川柳誌の統廃合の様子を、「川柳雑誌」と「番傘」の記事で見つみる。「川柳雑誌」昭和16年6月号の「川柳のページ」より。

〈大阪府下に於ける柳誌統合問題は二月初旬、府警察部特高檢閲課から川柳雜誌主幹麻生路郎氏に再度出頭を命ぜられ柳誌統合上、府下の柳誌に關して意見を聴取され二月十五日、番傘、昭和川柳、川柳春秋、赤煉瓦、天守閣、つるはし、川柳雜誌の七社へ出頭を命ぜられた（當日川柳春秋は病氣の故を以て缺席し）ので、麻生路郎氏一

同を代表し二誌を残すことを要請、超えて五月七日、六社に再び出頭を命ぜられ（つるはしは既に廢刊）横路主任より「川柳雜誌」は有保証新聞紙の營業誌として、「番傘」は同人誌として二誌を残すことを容認された。他は國策に沿ひ、次號をもつて統合又は廢刊することとなつた。〉

「番傘」昭和16年7月「あれから」より。
（滯りなく、ここに雑誌の統合が出来た。大體の経過を記録すると、二月十四日、川柳雑誌、鶴はし、赤煉瓦、昭和川柳、天守閣、番傘（川柳春秋欠席）の七誌代表は御津八幡に集合、今後の事につき討議する。（この時既に今日の機運は見えてゐた）／＼翌十五日、各社當局（府特高課）に集る。當局の一誌説に對し、二誌存立を願ひ出て當局の指示をまつ。爾來各社自重善處するところあり。／＼五月七日、再び當局の呼出は川柳雑誌、番傘の二誌を承認、結局今回の結果をみる。〉

路郎は二月初旬に府特高課に呼び出された時から、「川柳雑誌」と他の同人雑誌との違いを当局に強く訴えていたのだから。」「番傘」に統合された「天守閣」「赤煉瓦」

「昭和川柳」「川柳春秋」の略歴を「番傘」昭和16年7月号から抄出しておく。

天守閣 大阪の三越店員により昭和10年9月創刊。会長・栗原空栗。同人25名、会友10名。菊判16頁、隔月発行。

赤煉瓦 元昭和赤煉瓦会の人々とは全く縁のない人々により、昭和15年6月創刊。主幹・八尾緑波。同人9名。菊半裁判30頁、毎月発行。

昭和川柳 昭和10年7月創刊。主幹・堀口塊人。同人40名。菊判60頁、毎月発行。

川柳春秋 昭和4年6月創刊の「三味線草」を昭和15年「川柳春秋」に改題。主幹・森鶏牛子。個人雑誌のため同人なし。菊判40頁、毎月発行。

「番傘」同号に、「合同の言葉」が掲載されている。その中から、水府、塊人、鶏牛子の言葉を挙げておく。

この白樺 岸本水府

〔雑誌の統合は、文藝人が國民として受ける白樺であります。これをよく知つてゐたのは、今度の大阪府下の川柳團體だつたと思ひます。〕

皆氣持よく「協力」と「互讓」の温い握

手を交しました。

今度、受けた白樺は一本ではありません。

統合各社の数だけではありません。投吟家全體に下つた無数の白樺であります。足並を亂さぬやう、國民文學としての、正しい川柳の上に、堂々の歩武を進めませう。

昭和十六年七月一日の歡呼——
では、これから元氣に出發しませう。〕

一番よいこと 堀口塊人

〔國の爲にも、川柳の爲にも、同人や讀者諸君の爲にも、それが一番よい事だと思つて統合する事になりました。御心配をかけた人々や、話をこゝまでまとめてくださった係の方々には厚く御禮申上げると共に、今後の事をよろしくお願ひ申上げます。〕

川柳をやりはじめた爲に、人格が低俗になるやうな事では面白くないと思ひます。よりよき川柳はよりよき人間から生れるのがあたりまへでせう。今度、新しく參加した同人や讀者は、かうした信條の下に作句をつづけて來た方ばかりだ、と信じて居ます。そして、古い方も新しい方も、川柳をよりよくする、といふ目的の爲には、はじめから一致して居るのですから、今後はその目的の爲に、力を合せてひたむきに進ん

で行きたい。それが國の爲にも川柳の爲にも、お互ひの爲にも一番よい事であると思ひます。

意圖を越つて 森鷗牛子

〔故窪田而笑子先生の衣鉢を受けて十餘年、川柳の學術的研究を只一の生命として、それに終生を捧げやうとした氣持は、今瘦身常に病床にありといへどもいさ、かも衰へるものではないが、今回國策上、これが尤も川柳の爲めであると信じて「番傘」に統合すること、なつた。過去の業績が國文學方面に寄與せしことは具眼の士の認むる所にして東京帝大の「國語と國文學」の雜誌要目に毎號掲げられ、豫て「國語國文學年鑑」に數十に亘つて貴重なるその研究要項が載つてゐる。こゝに柳壇隨一の存在としてその期待せらるる、所も大きかつたが、私は信頼するこの「番傘」への統合によつていさ、かも川柳文化の後退することなく、本誌の意圖が漸を越ふてこゝに盛られ川柳文學の傳統を宣揚し得るならばこの統合必ずしも徒爾ならず、必ずや大方の御満足を得ること、信ずる。〕

(次回に続く)



(投句206名)

毎年言っていることですが、早くも一年が経ってしまいました。

今年がコロナウイルスの所為で世界中が大変な状態になり、身近なところでは川柳の句会が出来なくなっていました。

少し落ち着いてきたかと思えばまた感染者が増えて、今も予断を許しません。

来年はこの状況が回復方向へ向かっているようにと願わずにはおれません。

では、ナビです。



クイズです狸狐を当てなさい

(評)みんながよく知っているアノ場所は狸と狐ばかり。選り分けようとするのがそもそも無理なんです。

肩を組む仲にもあつた信義礼

(評)親しき仲にも何とやら。日本人の

土佐清水市 辻内 次根

熊本市 杉野 羅天

礼儀正しさが思われる言葉です。(あつた)と過去形で言うのはサミシイ。

いいじゃないかひょうたん島で暮らすのも

(評)これ、けっこう楽しいかも知れませんが。四方に釣り竿を垂らしておけば入れ食い状態だったりして。

アツカンベ出来たらバツジくれるかな

(評)くれますくれます。今、赤絨毯踏んでいる人はみんなそうやって貰ったんですから。

月見団子一個は売らず六個から

(評)通販でよくやっていますよね。一つ買えばもう一つ付いて来る、って。要る分だけでいいから安くしてくれ！

私を締め出すネットバンキング

(評)もう、何もかもに付いていきません。お金だつて手に取ってこそ実感がわかるのに、キヤッシュユレスやて!!

野良猫が教えてくれた生きる術

(評)ウチで飼っていた猫は無駄に太っているだけでしたけど野良ちゃん達は違います。世間の厳しさをよく御存知。

エリートが出来る人とは限らない

(評)結構いらっしやるんですよええ

西宮市 緒方美津子

箕面市 広島 巴子

奈良市 高橋 敬子

吹田市 山本希久子

西宮市 高橋千賀子

尼崎市 近兼 敦子

勉強が出来るだけのアホなお方が。と、嫉妬を込めて申し上げます。

一挙両得この世そんなに甘くない

(評)得したと思った時、たいがいどこかで別のものを落としています。ホント、あの穴はいつ開くんでしょうか。

巢ごもりで世上に疎くなっている

(評)二波三波と襲っているコロナウイルス、家に籠っているのはいいけれど時事に疎くなっているような気がします。

あとひとつパズルのピース足りません

何とでもなるさどん底知っている

先頭の羊は犬になる童話

エへへへ裏には裏があるので

本当はベツトフードに飽きています

蜷気楼になってしまったお節介

深呼吸しすぎて疲れ果てました

抜かれては困りますから吐かぬ嘘

男鹿市 伊藤のぶよし

尼崎市 清水久美子

大阪市 宇都満知子

大阪市 金子美千代

大阪市 八木 千代

大阪市 徳山みつこ

大阪市 大内せつ子

大阪市 酒井 紀華

和歌山市 まつもとともこ

ややこしいルールで悩むチェスの駒

三田市 堀 正和

そろそろと遷都検討しませんか

貝塚市 石田ひろ子

父と住むモデルハウスを見て回る

鳥取市 夏目 一粋

プライドが重たくなって捨てました

丹波篠山市 酒井 健二

善人の選挙ポスター見当たらず

大阪市 平井美智子

また母を泣かせ口内炎三つ

河内長野市 木見谷孝代

自助公助行けるとこまでひとり行く

鳥取県 竹信 照彦

蛍飛び棲家探して星の駅

加西市 山端なつみ

印鑑廃止 離婚が増える可能性

鳥取市 倉益 一瑤

妖怪が住んでいそうな館だ

長野県 丸山 健三

どっしりと見えて中味は軽そうだ

弘前市 高瀬 霜石

軍隊を持たない国の防衛費

彦屋川市 廣田 和織

丁寧な説明すると舌を噛む

和歌山市 北原 昭枝

逃げ道をつくって理屈考える

大洲市 花岡 順子

ああ私頭でつかちなのですね

倉吉市 牧野 芳光

失言もあったし冷や汗もかいた

西宮市 福島 弘子

誤えん予防舌を出したり回したり

美面市 出口セツ子

コロナ退散まじない札を立てるところ

松山市 柳田かおる

硬い話ヘジヨークをすこし入れてみる

奈良市 山本 昌代

踏んばろうきつとステーク待っている

大阪市 柴本ばっは

この頃はヒマなんです

堺市 矢倉 五月

質料が安くて古いマンションで

尼崎市 藤田 雪菜

大臣の椅子にあちこち落し穴

防府市 坂本 加代

腹痛が続く御上も国民も

佐賀県 真島久美子

GOTOが高級ホテル勧めます

八王子市 川名 洋子

もうあかん言うて百まで生きそう

大阪市 古今堂蕉子

あそこから野次と怒号が洩れてくる

横浜市 菊地 政勝

泣いたのは私あなたに罪はない

大阪市 小野 雅美

何故かなあ苦勞だんだん軽くなる

神戸市 上田 和宏

和歌山市 土屋起世子

月冴えてさえぬ心の塗り潰し

南あわじ市 萩原 狸月

CMが錯覚させる美容液

鳥取市 奥田 由美

四方から伸びる手払うキノコ狩り

大阪市 高杉 千歩

そうめんよりきしめんが好き

枚方市 藤田 武人

誰やった百円札の肖像画

豊中市 水野 黒兎

選良のことは生きていた昔

上尾市 中村 伸子

まあまあとなだめすかして時を待つ

大阪市 磯島福貴子

老夫婦ボケとツツコミ日替りに

黒石市 石澤はる子

身の丈に合わぬ仮面を持って余す

沖繩県 宮 すみれ

手作りのまったりケーキ完売

明石市 糍谷 和郎

2月号発表

(12月15日締切)



(平本 霧石人 画)

柳箋に2句

川柳塔鑑賞

同人吟 平井美智子

— 11月号から

鍾馗様もアマビエさんもどうか来て

金子美千代

仏壇にアマビエさまも鎮座させ

川島良子

もとは豊作や疫病を予言したアマビエさまはコロナ禍で脚光を浴び護符や朱印にまで用いられているらしい。そういえば押入れの奥に息子が小さい時に飾った鍾馗人形があるかもしれない。

稽古ごと破門になったことがある

きとう こみつ

菌切れのよいこみつ節が小気味よい。破門になるとは師匠とよほど性格が合わなかったのか、こみつさんの才能に先生が焼き餅をやいたのかであろう。ちなみに、時実新子氏は詠む歌が人間臭すぎる

と短歌を破門になった

一歩出る二歩出る星が見えるだろ

上田和宏

「〇ちゃん、綺麗な星が見えるよ」「え、見えませんよ」と軽い返事。見えないなら見える位置まで動いてみると和宏さん。自分からガツガツと求めることもないゆとり世代の人達を歯がゆくも羨ましくも思う。

涼しいな今日はたったの三十度

竹村紀の治

飄々としたユーモア句を詠まれる作者のファンである。たったの三十度しかないと三十度あるとでは体感温度から違ってくる。給付金は十万円しか貰わなかったではなく十万円も貰ったのである。

コロナの世肩身の狭い夏の風邪

長谷川 崇明

わかります！電車内で咳やくしゃみをしようものなら、まるで犯罪者。私もコロナと間違われるのが嫌で風邪を引かなないように細心の注意をした春でした。

加齢とは病気でしようかお医者さん

谷 英也

以前、目の中に黒いものが飛ぶので眼科へいったら（老人性飛蚊症）との診察。「老人性だから目薬をさしても治りませんよ」と言われた事があります。加齢に対する不安と無念さが詠まれている佳句。

ハハハハと五回笑つと出る元気

岩崎公誠

家で一人の時、思いっきり大きな声でハハハと五回笑つてみた。足りないので五回追加した。笑いはストレス解消に繋がりが免疫効果を上げるとか。公誠さん、ダイエツトにも効果ありますか？

読みさしにお札挟んだまま書棚

吉岡 修

読書中の急用に取り敢えず葉替わりのお札を挟んだのだがそのまま忘れて本棚へ直してしまったとは豪勢！挟んだお札が千円札か一万円札か気になっています。

扇子より手持つ小形扇風機

奥村五月

今年は猛暑だったこともあり高校生からマダムまで小さな扇風機を首からぶら下げたり顔に当てたり。確かに扇子より便利であるが情緒には欠けるなどという「古い」と嫌われるんだらうなあ。

ミルフィーユ重なり合つて老病死

齋尾 くにこ

なるほどの発想と上手い表現。ミルフィーユの基本は三枚のパイ生地にクリームを挟むらしい。三枚の生地は重なりあつた老病死。上手く食べないとクリームがみだしたり、パイ生地がグチャグチャになつたりする。

落書きで余白を埋めるカレンダー

川本 真理子

句会も観劇も食事会もみんな中止になつてしまつたコロナ禍。予定表は真っ白のまま。仕方ない。こうなれば余白を真っ赤なハートで埋めることにしようか。

愛されてる錯覚もよしおぼろ月

倉益 一 瑠

錯覚の愛だと思つているのか錯覚だと言ひ聞かせているのか。どちらにしても錯覚をしないと恋なんてできません。ほら、おぼろ月も苦笑いしています。

鼻かくしマスク美人になります

永原 昌 鼓

クレオパトラの鼻がもう少し低かつたら・・と言われるように美人の条件として鼻の形は大切です。昌鼓さんに一票!

炎天と勝負するよに行くポスト

石田 ひろ子

今年の猛暑。ポストに出かけるだけでも覚悟がいりました。勝負するとは言ひえて妙ですが、ポストに投函する一句もひろ子さんの勝負なのかもしれませぬ。

困つたら言つてねと言ふ空手形

中村 伸 子

人生の機微をついた川柳らしい川柳。「さようなら」「お大事に」と同じ位の軽さで使つている人もいるだろうが周りにはきつと空手形でない人もいる筈です。

二世帯の二階と下にある掟

津村 志華子

「二階で喧嘩をしていても口を出さない」「朝、暗いうちからゴソゴソしない」さて、志華子さんの家では、どんな掟なのでしよう。(上手な生き方)の指針を教えてくれる句です。

哀しい人が抱けば哀しくなるお花

西田 恵美子

誕生日のお花は少し照れ臭そうにしていたしプロポーズの時のお花はキラキラしていました。優しい人に抱かれたら、お花も優しい心になるんでしょうね。

ステイホーム夫婦に少し隙間風

片山 かずお

本当ならステイホームで仲良く二人の時間を満喫；というところなのだが、却つて隙間風が吹いてきたという。やはり(亭主元気で留守がいい)というのが円満の秘訣なのであろう。

オメデトウのウに毒針が見え隠れ

福西 茶 子

毒針が目に入らない人、見えていても知らん顔できる人、じんわりとお返しをする人。はてさて茶子さんはどのタイプであろう。この毒針を励みにしてオメデトウを重ねていきたいものである。

香典は弾むがお経はほどほどに

山崎 武 彦

お坊さんや熱心な信徒の方が聞けば、罰当たりなことですが、武彦さんの気持はよくわかります。夫の十三回忌に少し多めにお包みしたらお経の長い事。足の痺れを持て余した記憶があります。

八十歳何と自由で面白い

小松 紀 子

紀子さん、素敵なお句をありがとうございました。八十歳になるのが楽しみになりました。

水煙抄鑑賞

—11月号から

牧野芳光

平和とは砂で作ったにぎりめし

前川善之

砂のにぎりめしは脆く、壊れやすいものである。平和もまた、脆く、平和を維持するためには壊れないように支えて行くことが大切である。

他人とは関わらぬようするマスク

廣田和織

肩だけはきれいかいてマスクする

本田さくら

コロナが蔓延している現在、自分を守るためと他人を守るためにマスクをしているが、あたかも他人との関りを拒絶しているような気もする。

マスクから見える部分だけを手入れしておく、マスクでかくれている部分は見えない。例えば、髭を剃らないでも外出することができる。

私から折れたりしないレモン噛む

北山まみどり

自分が間違っていないと思えば妥協したくない事もある。そんな時はレモンを齧ってスッキリとした自分を取り戻したい。

あいうえお一人時々言ってみる

永見安子

コロナ禍や独居で生活している人にとっては、話し相手がない。テレビに向かつてつぶやくのも一つの方法であるが時々は声に出して喋ってみよう。美容にも良いと思える。

栗ごはんいいねと言って欲しい手間

渡邊伊津志

栗の季節。栗を拾うのは楽しいが栗の皮剥きは大変な作業である。その大変さを分らないで黙って食べられると「おいしいね」の一言でも言ってもらいたい。

わたくしを紅葉の頃にリニョートル

倉橋悦子

「紅葉の頃」とは何だろうか。人生の秋だと捉えるとしつくりとくる。実りの秋で冬にはまだ少し間がある今を、自分らしく装いたい。

騙された同士で紡ぐ夫婦仲

前田廣幸

何よりの供養仲よくやっている

岸田武

夫婦は片目つぶって暮していれば波風は立たない。お互い騙されていたと考えれば腹を立てることもなく、仲良く暮していることを、御先祖も安心して見ていると思える。

縄電車ひとりじゃ走れないのです

大前安子

人間一人ではこの世に住んでいくことは寂しい。つい、相手を求めてしまう。

農暮し都落ちではありません

土井輝恵

古里の秒針のない古時計

石田孝純

IターンやUターンで農業を志す人には、自然に親しみたいとの思いは強いかと思える。都会に疲れて逃げると思われることは心外だろう。農業は自然との戦いと雑草との戦いである。

一方、自然に囲まれた田舎はゆったりと時が流れてゆき、秒針のいらぬ生活ができる。

おせぬ城

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

川柳塔打吹(鳥取)

齊尾くにこ報

雨にぬれ着干して乾く畑仕事
人心乾くと思ふ己なる
干からびた心に月のひと雫
モフモフが乾く心に水くれる
人間の醜さずつと生乾き
回転鮎クルクル回り食べれない
ベットボトルの風車畑で元氣
クルクルパーいい合い気楽学生期
わたくしを配るお日様色の包装紙
初盆の墓をめぐつて花配る
お役所は紙と判子が命綱
紙幣ならどなた様でも歓迎よ
新聞に包む鯛焼きの味
コピーしてパブリカダンス配布する
鶴を折り平和を祈り旅をさす
長生きし行く先見える紙パンツ

久芽代 久芽代
恭子 恭子
節子 節子
公恵 公恵
三津子 三津子
紀美恵 紀美恵
照彦 照彦
悦子 悦子
宣子 宣子
紀の治 紀の治
野蒜 野蒜
義人 義人
たけ代 たけ代
貴恵 貴恵
滋 滋
清 清

便箋でいただく便り残しておく
幸運な和紙が紙幣に衣更え
あそここ行きたいところ空回り
貧乏性クルクル動き日が暮れる
クルクルと勝ち馬に乗る人の群
クルクルと七十八回目の軌道
父の座があつてクルクル回る家
春夏秋冬クルツと回りお爺さん
手土産を配つてのける大人買い
オンラインお経までもが世も末だ
幸せを配りに孫がやつて来る
名物を貰つて名物を配る
祖母の繕るこよりは硬く強かつた
記念日は夢ある色の紙包み
生きることはレシートが溜まること

川柳塔みちのく(青森) 相見

則彦報

37度ヒマワリの首廻らない
暑い夜うちわで扇ぐアナログ派
教わつておくべきだった母の味
特売日妻に持たされ愚痴る僕
暖房のチラシ舞い込むまだ猛暑
風鈴の無口炎天なお無口
失敗は明日の為に振り向かぬ
残暑なか打ち水をして2度下げる
後悔に時効定めて明日を生く
青空の馬場駆ぬける菊花賞

富隆 富隆
重忠 重忠
紀子 紀子
裕子 裕子
陽之介 陽之介
完司 完司
重利 重利
芳光 芳光
大鯨 大鯨
岳人 岳人
龍枝 龍枝
石花菜 石花菜
玲坊 玲坊
美知江 美知江
くにこ くにこ
ひとし ひとし
風来坊 風来坊
美鈴 美鈴
重虎 重虎
則彦 則彦
のぶよし のぶよし
洋子 洋子
冬道 冬道
隆樹 隆樹
一呑 一呑

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

菊花の酒が待つてる宴の間
重い過去肩に担いでスクワット
振り返る度に後悔落ちている
もみじ葉の今に後悔などはない
赤い菊きつとバラより深い愛
好きな菊に囲まれちちは逝く
一年も会えず初孫重くなり
大輪の菊の天ぶらうまいです
目に見えぬコロナが老いの背に重い
過ぎ去つた亡父の笑顔と庭の菊
マスク・水・日傘にタオル重裝備
一日の悔いが落ちない垢こすり
年金の範囲で旅を繰り返す
何げないことばにもらう道しるべ
老婆が言う何れ本気か惚けなのか
なんだって機械ひと嫌いが進む
ずるずると憲法呆けてゆく恐さ
体育2」が孫とはすももうもサッカーも

龍馬 龍馬
孝子 孝子
慕情 慕情
柳子 柳子
吹喜 吹喜
初枝 初枝
英子 英子
澄子 澄子
ふさゑ ふさゑ
真由美 真由美
ひろ ひろ
黙人 黙人
花峯 花峯
きよし きよし
霜石 霜石
呑舟 呑舟
和香子 和香子
熊四郎 熊四郎
重忠 重忠
完司 完司
睦子 睦子
笑子 笑子
ちかし ちかし
ゆたか ゆたか

半世紀うすくて書けぬ鉛筆のしん
トボトボと増税背負い老夫婦

日に三度それでも棄飲み忘れ
多数派は税の値上げはお手のもの

渋い茶を一服どうぞ落ち着くよ
言葉の矢我が身に刺さり強度知る

単身のメニユーは里の母の味
メニユー見て早く決めると呪まれる

納得も裏を読んでる渋い顔
増税の余波が猫まで届く餌

渋い顔窓際に寄り逃れゆく
情熱は芯のところはまだ燃える

増税で得をするのはどんな人
童謡のビールも同じ泡を立て

童謡の好きなメニユーは赤とんぼ
コロナ禍に進学してもオンライン

三日月の夜に湿度はたつぷりとお握りが和食の中でアグラかき

あの女のメニユーに僕の名ありません
何度目か又捕まったネズミ捕り

渋々で腹をくくって紙パンツ
増税し貧乏人は麦を食え

甘言の最後に舐めた渋い味
ポケットの拳度々グーチヨキパー

近いうちきつと生まれるコロナ税
渋皮と鬼皮剥いだデスマスク
ほどあいの良かった証ダイヤ婚
渋い顔娘が彼氏連れて来た

実満

弘六

宏章

孝子

大鯨

慎一

一平

正昭

蟹郎

八千代

英子

楓花

ポール

すみれ

節夫

幸美
小鹿
恒
文道
甚緑
光幸
照彦
盛桜
美ツ千
茶子
弘子
孔美子
草文

和歌山三幸川柳会 西川 千鶴報

簡単に書いてはならぬ署名欄
深酒の真の泪を拭くタオル

名前だけ連呼する人選ばない
戦時中の咄はしない父と母

バスタオル巻くと女の顔になる
父母の名を穢さぬ様に心がけ

雑草といたちこっこをやる戦
呼び捨てでもキユンとするのは始めだけ

握手してまだ旧姓で呼ぶ仲間
寝たきりへお早うさんと蒸しタオル

主人より犬の名前が立派です
気の毒な和名が付けたアホウドリ

雑巾にされてイキイキするタオル
咲かぬまま散ったひめゆり風の中

核のない平和な地図を子に託す
盆参りコロナ戦争自粛中

医も算術患者を様で呼んでいる
古里にちゃん付の顔置いてくる

弁解をすればする程錆が浮く
不条理が溢れ日本が軋み出す

何年を経ても時効のない戦後
風呂上がりがタオルを巻いて出る電話

不要不急コロナとバトル繰り返す
終戦日耐え抜いた日を拭くタオル
ノーモアが聞こえないのか核兵器
あの時はタオルを投げてほしかった

准一

幹子

一雄

かず子

ひろ子

まき

八重子

宏枝

美枝子

昇

敏照

日出男

智三

昭枝

菜摘
当代
和子
純子
倭子
富香
保州
義泰
明子
あき子
知香
ダン吉

岸本 宏章 選

沙羅双樹恋ははかなきものなのか
人間はまさかの坂で喘いでいる

中元で互いの安否聞いている
ごくごく水飲む音は生きる音

サイホンのポコポコ朝のこあいさつ
子と共に私も育つ親として

どっこいしよ歳に甘えて生きている
日本地図詳しく見れば傷だらけ

誰と逢う化粧ですかと問う鏡
おおあめはおにがそらからふらせませす

明子

金祥

玲子

みつこ

宏造

こみつ

多美子

すみれ

雅美

ひろむ

佳句地十選

(10月号から)

山岡 富美子 選

いつだつて序曲で終わる恋ばかり
走らねばならぬ夕日が沈むから

病名はコロナ対策過敏症
支払を済ませきれいな息を吸う

スマホより紙の手触り辞書を引く
寝て起きて誰に遠慮のないひとり

ステイホームああ夕刊はまだかいな
石ころ一つ悔れぬ老いの足

お誘いはさっぱり毛力はほろ苦く
サササササにんじゃばしりでかくれんぼ

千鶴

一籽

雨奇

英子

直子

ゆみ子

耕治

美津子

和子

ちか

旧姓で呼び合い女学生に戻る
一秒のタイム戦うアスリート
戦争で何も無かつたでも生きた
雑巾になる迄仕事するタオル
人は皆名前背負って生きていく
雑巾になつてもタオル遣る気見せ
古戦場耳をすませば武者の声
バスタオル折り方違ふ嫁姑
いざ出陣タイムセールへまっしぐら

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

咳ひとつ車内の視線一斉に
見つかつた違反運が悪かつた
手を上げて命がけ横断歩道
認知症になるかもしれない
仕返しに菊蕪だけの晩ご飯
他人ごとでなくなつてきた家族葬

竹原川柳会(広島) 古田比呂子報

水遣りの今日は今日はと待つ雷雨
待つことは気楽待たせるのは辛い
坂の汗風を待つてる影法師
土砂降りに待つてくれた母の傘
待つて待つて長女は恋を知りました
たつぷりと待たせて愛を確かめる
山彦に遅れて母の声響く
登下校山越えもした昭和の日
師の顔になる大山の雲ひとつ

みつ江 起世子 眞智子 悦弘 彦弘 よしこ 康則 俊介 千鶴 雅美 三樹夫 美千代 まみ子 かつ子 弘子 宣之 鬼焼 敬子 笑子 輝恵 栄香 慶子 蘭幸

歩くこと忘れないでね車社会
補助輪を外して挑む独り立ち
北から南亡夫とバジエロカメラ旅
三歳がブルドーザーにあこがれる
パトカーに道を譲つてスライスイ
リムジーンで巡つたパールハーバーよ
レジ待ちも一歩下がつてするコロナ
八月のページは折り忘れましょ
老いて行く道はまよわず行けばよい
もう私戸籍年齢捨てました
秋風よセンチメンタルになつた
にらめっこ勝負に本気出す五歳
とびらはあきませんかきをかけました

わかやま吟社 小谷 小雪報

モナリザを笑わせたのは誰だろう
不断着でいたい仮面を脱いでいる
仏壇のスイカを睨む盃蘭盆会
朗らかなジョークで人を笑わせる
朗らかに生きて悔いなし霞草
笑い声する方へ向く羅針盤
断ち切つてひとりの海へ舵を取る
人間の決断という腹の虫
核家族カットスイカが丁度良い
逆境の時こそ笑顔忘れない
朗らかなトークに負けてローン組み
殉教の断つた首から連の花

千代美 昭紀 幸子 比呂子 夢香 淑子 歩美 貞子 規代 厚子 史子 千枝 5歳 ちか 保州 富美子 知香 准一 精子 倣子 寿子 春雄 夕胡 和宏 愿

杉野羅天選

さよかさよか覚えてまへんなあと祖母
向かい風受けようひとり手を上げる
七十五メダル一つも持つてない
怖がりの父がコロナの患者診る
あいつちに重い荷物がついてくる
薬・薬・薬 作用と副作用
河内音頭ひとりで踊る四畳半
手の平のこれからきつと無限大
結論は怖い悲しい原子の火
うちあけてください白いTシャツに

佳句地十選 (11月号から)

山田葉子選

仲裁に入り油を注いでる
横断歩道がだんだん長くなつてきた
下心持つと優しくなれました
マスク取りタツチがしたい笑いたい
一人になり気楽だという痩せ我慢
本人は気付いていない加齢臭
八月は忘れられない日がたんと
コロナより怖い離れていく絆
閑古鳥シャッター店がまた増える
あつそつでしたやはり貴男は元他人(久)

慕情 孝子 かつお 厚子 りこ 豊仙 ダン吉 亜成 勝弘 千代

生き方を断固に変えぬ山高帽
断固として心の奥は見せません
刃を入れて弾けるスイカ大当たり
判断の甘さほころび見えてくる
食べ頃のスイカを知っているカラス
行き帰り必ず寄ったスイカ小屋
鬼もいて渡る世間は朗らかに
砂浜で割ったスイカの試食会
人前で朗らかにして疲れ果て
朗らかに白寿めざしてレツッゴ
断崖に立つて帰還を待ち望む
ノックして西瓜に聴いた熟れ具合

はびきの市民川柳会(大阪)藤原 大子報

安楽死が活路だったかALS
ワクチンでコロナ収束活路待つ
豪雨の地活路を開くボランティア
過信して無罪破棄され消えた道
コロナ禍で活路模索の新首相
痛恨の極み活路はどこにある
十字路をまだ抜け出せぬあかんたれ
花咲かず選手諦め整体師
四面楚歌それでもきつとある活路
「別れなはれ」言われてからの新活路
コロナ禍の活路は消費税下げよ
見出した活路やっぱ汗だらう
何とかなる何とかなると顔あらう
今一度初心に返り突破口

紀子 晶子 佳子 小雪 大輪 文代 よしこ 明 紀久子 徑子 ほか 日出男 まつお 久仁子 洋一 冬の一 正義 かつ美 扶美代 ちづる いさお 専平 一歩 ダン吉 理恵 ゆみ子

糞虫になつてゆらゆら春を待つ
みんなみな優しくなつて心療科
母の愛心の傷の治療薬
曖昧に濁して痛いとは言わぬ
押し出しのデッドボールは喜ばれ
耳痛い意見は我のためにあり
誹謗中傷される痛みが解らんか
痛い目に会わん内にと安倍辞任
ねだる孫痛い所を突いてくる
痛い目に会いはつたねと他人ごと
同病の痛み分けあつている電話
災害の痛手をいやすのは絆
痛み止め効いた寝顔に安堵する
予防接種犬は尾を下げキャンと鳴く
尖んがつて生きた自分に刺さる棘
一瞬の迷いで勝ちを取り逃がす

きやらばく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

一人鍋たまにはこれも乙なもの
あつさにもまけず畑に大根まき
「ビール冷えています」嫌われてはいない
五十年起伏豊かな旅だった
冷える秋ホットな夏が恋しくて
おばあちゃんいつ死ぬのと問う曾孫
ぼつちやりはステイホームのおかげです
胃袋も委縮してます自粛中
文句言う前にマスクと消毒と
あつと言う間に秋風が心地好い

みつこ 美喜 一文 美龍 勝弘 フジ シルク 千鶴子 ひとみ さくら 瑞美子 宏造 大子 こみつ 美代子 久仁雄 宏之 美草 千代 雨奇 汪 惠子 俊久 宣子 紀の治 久直

柳会の美人の写真若かった
ラクダでも猛暑の砂丘楽でない
骨にまで障る連日の猛暑
百才から見ればまだまだ若者だ
待望の雨に喜ぶ夫の顔
手づくりのマスク届けて喜ばれ

南大阪川柳会 松岡 篤報

点の打ち方にも個性ある手紙
点と点つないで始まった戦さ
やさしさが心の闇に灯をともし
お互いの欠点カバーして夫婦
消しがたい汚点ポロリと出た本音
点点と灯る夕餉にみる平和
僕の子や80点は高望み
点でいい足跡少し残したい
37・5度以上は怖い
若き日の汚点修正液で消す
2メートル空け準備のパイプ椅子
同じ年に入会席を並べてる
外野席から人間がよく見える
大声で笑いたいから隅の席
半分席に居酒屋立っている
席譲る少年すこしはにかんで
母と歩幅ゆっくり揃う春になる
母が居るから兄弟揃う里の家
すんなりと友に通じぬ言葉
すんなりと決まったわけじゃない中止

日枝子 美緒 美穂 多美子 瑞枝 菜々 篤報 ひさ乃 昌紀 志華子 いさお 大子 弘委智 篤 峰弘 勝弘 克己 柳伸 ルイ子 楓楽 郁夫 博 一歩 弘子 敏治 シマ子 直子

雨上がり竿の滴がリズムミカル
昇天はまだ許可せぬと山の神
妻二階蛍光灯が揺れている

秋行きの招待状が届く朝
ご機嫌を招つてママのチチンブイ
拝金と言われようとも金がいい

三食昼寝去年の服が入らない
BLMテニスコートで声上げる
教え子の飛躍師匠を超えて行く

スマッシュで人種差別打破なおみ
鍋物の湯気が恋しいそりり秋

川柳あまがさき(兵庫) 大浦

猪口二杯天下を取った人になる
恋をする誘って欲しい赤い爪

まあまあ出来だと言った自信作
ポーズとる裸婦に戸惑う初な人

名月をめでて孫子に電話する
食べ放題元はとらずに腹八分

出勤の人も乗ってる終電車
何千のバラを踏んだかプロポーズ

少子化でガキ大将もまぼろしに
それなりに効果おまつせ美人の湯

晴れ渡り歩幅も今日は弾んでる
コロナ禍で年金減らぬこと願う

お気軽にと整骨院がまた出来た
まあまあとケンカはさせぬ苦労人

マニキュアをぬって酸欠してる爪

妙子

実

東風

通江

柳石子

修

あや子

国和

満作

純子

よしみ

初音報

紀恵

柳明

初音

英坊

れい香

千賀子

新録

修平

良種

万彩

正彦

宏造

耕治

かずお

こみつ

コロナ禍も論外柿は熟れてくる
そう言わずまずは一献飲みなはれ
注意して残り少ない髪洗う

媚売れば学術会議意味がない
もう横になつてもいいよピサの塔
ふっきた証爪の先まで整える

爪切つてあしたの風を迎え撃つ
少量でピリット決まる柚子胡椒
遺影の父雄気堂堂勇み立ち

まあまあと宥め返り血浴びている
子育てを終えて気付いた父母の老い

ぼたる川柳同好会(大阪)水野

コンピニで雨宿りして荷物増え
コンピニではビール買うにも歳を告げ

立ち話長針ぐるり一廻り
双子ちゃんさすが物入り教育費

太りそうさすが新米塩にぎり
呑み会の支払い全部もちましよう

カラオケ教師味はなくてもズレぬ音
兄ちゃんが守つてくれた母の留守

長生きはいいねひ孫と言う実り
栗の穂実りの秋の無人店

突つた柿車窓に増えてやがて里

八尾市民川柳会(大阪) 中園

止め処無く私の秋が深くなる
亡き友と今年も会える彼岸花

ヨシエ

勝弘

修平

健二

正和

美龍

久仁雄

和子

紀華

雅美

菊江

黒兎報

正子

則彦

純子

郁子

奈津子

守啓

一弥

順子

桂子

春代

黒兎

清報

恵

卓郎

閃かぬ脳の夜食はビターチョコ
夜鍋終え笑顔でうどん啜る父母
上を向こう天は変わらぬ深い青

柱時計止まったままの母の部屋
酒が好き飲み放題の酒が好き
花持たしたるくまあるくする我が家

言い訳の口許妻に見つめられ
コロナ禍で儲けた会社あるらしい
交差点自転車ひやり怖い顔

突然に好きと言われて気付く恋
幾度のひやりは機関士のドラマ
やんわりと続きをねだる聞き上手

川柳塔さかい(大阪) 内藤

くどすぎる話寝たふり死んだふり
朝昼晩愛していますと言わされる

くどい程子供を論し旅に出す
ピフテキも三日続けば辟易だ

ひたすらに子の行く末を照らしたい
くどくなる言葉わたくしが老いてゆく

くどい程叱つてくれるそれが親
脱いでも脱いでも追いかけてくる過去

学ぶこと多あり殻を脱ぐ八十路
父親になつて一皮剥けました

教え子の日々成長にカプト脱ぐ
厳父が母には直ぐに兜脱ぐ

休日には鏡を脱いでパパの顔
スターにはなれぬが脱いだりはしない

涼子

寿之

耀一

あかり

壽峰

高鷲

清子

常男

清

清子

和雪

欣之

華

蕉子

佳子

光雄

いさお

唯教

扶美代

美津子

ゆみ子

敏治

としお

清

玄也

さくら

五月

生き様へ神が幸運振りかける
手を合わす心の中に神宿る
憲彦

穏やかな日は神の贈り物
捨てられぬ亡母が持たせた守り札
みつこ

神の技日本に四季の花が咲く
肩幅の広い男を守護神に
妙子

神様のいたすら婆に赤い糸
村人の御輿かなわぬ秋の暮れ
瑠美子

神様の都合も聞かず願うてる
脱げるだけ脱いで貼ってる湿布薬
志津子

靴脱ぐのも至難の業だ術後です
今日を脱ぐ素顔の私仕舞い風呂
舞夢

因習を脱皮してから右上がり
羽生さんも脱帽してる聡太さん
和夫

喜怒哀楽脱いで安らぐデスマスク
くたびれた札にも同じ釣り渡す
満知子

クリスマスサンタを待ってツリーに灯
車降りさつと腕組むツィショット
満作

空腹をさつまいも食べ繫いだ日
苦の坂を支え合ってるつがいです
ひろ子

クレヨンの先から夢を紡ぎ出す
朝子

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

外国気触れだけはしません宮内庁
元氣です(欲しがりません)の育ちです
高明

残り香につい振り返るマスク美女
秋彼岸三段重に松たけも
蜂朗

そこそこの親に仕立てた子ども達
廣幸

若美川柳会(鳥取) 山下 節子報

嫁ぐ娘に背中であいてる仁王
泣くまいとぐつとこらえた娘謝辞
一瑠

思いつき泣いてすつきり青い空
宝石より光る鉄あり鎌がある
弘六

言葉と言葉で宝石が生まれる
言葉と言葉で始められた柳が首絞める
重忠

退屈のしぎ始めた柳が首絞める
やりくりへ泣いてる筈の妻太り
完司

頑張ってやつと着いたが道半ば
宝石は恵みの秋の米の山
美恵子

泣きながら夕陽に向かい走る子よ
泣きながら男社会で耐えた日々
たぬ

退屈の文字がなかった母の辞書
土に勝る宝石ないと鉄をもつ
幸安

泣き声が産室洩れて安堵する
ダイヤより高い差し歯で食べている
敏子

やつと釣った鯛枕飯振舞す
家族です宝石よりも大切だ
眞理子

ブラザリ柳(大阪) 穂口 正子報

ポケットに反撃用の隠し玉
曖昧に生きているので生返事
振作

満中時に仲間集めて団結す
健診日歯周ポケット行き届く
雅女

息子も五十先に逝くなよ頼むから
ふつうの日生きる幸せかみしめる
茶子

閑古鳥鳴いてる店の断末魔
弘光

片目入れ成し遂げ両目タルマの日
考古学か孫のポツケに土器や石
この歳で十分と言ひサブリ飲む
いのち戴き命毎日新しい
園子

城北川柳会(大阪) 近藤 正報

酒好きの父との出合い喜ばん
千林此処が私の出発地
一步

小さいけれど我が家で採れたさつまいも
もうあかんがもういいかになるお酒
美砂子

まあいいかと済ませちゃならぬモリとかケ
我がままを通して老いて今ひとり
栄子

運命に操られつつ年紡ぐ
晩年の小さな蕾夢にして
千恵子

小兵だが根性だけは負けてない
イタタタ義歯を悩ますごまの粒
賢子

運命線たどれば地獄の一丁目
もう一杯優しい妻のお目こぼし
堅坊

四捨五入した半生はまあいいか
君毎日が旬だ旬だと気合入れ
義昭

母からの小言メールの泣き絵文字
胸に手を当てて数える心の音
福貴子

引く歳時代古稀から傘寿句である
運命線の上でじたばた生きてる
万紗子

ステイホーム四季の醗調味味わえず
もぎたての旬の言葉で一行詩
満洲夫

喜寿迎え運命線に問う命
小さいがこれが身の丈足ると知る
克己

洋志

朝子

俊雄

満知子

朝子

洋志

克己

磨り減った運命線を撫でて冬
人の事思い動ける今が旬

まあいいか掃除せんでも死ぬへんし
慌てない今日でなくて明日がある

まあいいか息子選んだ嫁だもの
神仏も人権差別に打つ手なし

アルコールやめると言う医者避けている
五十年妻つつまみで僕はボケ

自爾せず息子頑固に午前様
彼岸花今年も遅刻温暖化

赤トンボ歌うと遠い兎に還る
膨らんだボツケガムチョコそして夢

家計簿に妻だけわかる○や×

責任を問われて逃げるお役人
手伝つて欲しい夫は雲隠れ

知らぬこと問うて見るのが一番だ
僕の夢を手伝つてねとプロポーズ

何もかも問うのはよいが威張つてる
夫より素早く答え出すスマホ

忘れ物でつきり君と想つてた
声掛けててつきり彼と見間違ひ

三法に問題提起する櫻花
新生活慣れてきたかと問うマスク

空耳かてつきり私返事する
鏡の中でつきり亡母がいるようだ

つきり寝てるはず妻も朝帰り

川柳ふうもん吟社(鳥取)山下

凱柳報

厚子

加代子

茂登子

由美子

大

紫陽

真智子

雅苑

静夫

紅栄

節子

真理子

郁夫

杵香

星雨

満作

信子

和夫

廣光

かずお

五月

博

志華子

直樹

修

言い訳をてつきり示す棒グラフ
綺麗だねてつきり女性思つてた

腰弁で来た手伝いに支えられ
宅配便止まったんだお隣か

堂々と手を振つて政治問う
拉致家族新総裁の真価問う

急所突く記者の質問蚊帳の外
妻が問うほんとの給与いくらです

コロナ禍が手伝いまでも遠慮させ
二度手間も嬉しい夫の皿洗い

障がい児こころのままに絵筆とり
マスクまだ外したくない神無月

負の遺産なしで行きたい向こう岸
あさつばらから怒鳴らず褒めて子を育て

しんどいが手伝う汗は気持ちいい
わしの芋そんなに美味いか猪に問う

婆様が靴何文と問う令和
きのこ山誰に問うても秘密です

逃げ腰の男と知らず注ぎ行く
バラ色とてつきり決めていた未来

IT化に必死で挑む老いた脳

岸和田川柳会(天阪)

石田ひろ子報

拭き取つたあとのお面に問いかける
胸底に流さぬ石が一つある

前略と書けば本心述べられる
涼しげに心にほら抱いている

初スマホ火がつく母の好奇心

茶人

勲章

秋月

振作

とも湖

白兎

回春子

隆浩

紀美江

天翔

一平

千代

利昭

八千代

美恵子

金祥

野蒜

楓花

毅

一瑤

凱柳

三成

良一

保州

穂夫

みつ江

テレビ漬けコロナ心に住みついた
二輪車に乗れて公園かけまわる

乗りたくはない真夜中の救急車
鈍行にネジを緩めた顔で乗る

バスに乗る女性がいるとほっとする
デジタルの波に乗らぬと決めた亀

乗り越えた父の背中暖かさ
話には乗ろう輝く目に賭ける

一人に一個妻がしぶしぶついてくる
だんまりが続いて濃い茶をすする

一円迄割勘されて濃い顔
苦虫を噛んでるようなブルドック

お隣にナイスミドルが越してきた
ヒーローを泳がす脇役のしみ

ドライな人だ理想論だけ述べている
ドライヤー今はかけずにすぐ乾く

ドライアイス舞台道具で役に立つ
ヒラヒラとこの世を泳ぐドライな子

断捨離に徹し遺品みな整理
涙拭くたびにドライになっている

金で済むことなら楽と割り切つて
AIはドライに道を指し示す

世の中がドライになった棒グラフ
装いは地味だが性格はドライ

心には父母が住みぬくいです
心ない言葉の刃人殺す

出し惜しみしてまず禿びた脳だから

律雄

和美

浩子

万彩

一步

恵子

ひろ子

ダン吉

憲彦

香代

蕉子

日出男

珠子

信二

瑠美子

大輔

康信

ふさゑ

義泰

さくら

玄也

英夫

和子

いさお

はこべ

喜代志

眞澄

この星にお乗りください遠慮なく
あの人に心奪われすぎていた

小雪 秀夫

長柳会(大阪) 辻村 ヒ口報

若ぶるがコロナ怖いと自粛中
夏の恋コロナのせいにして終り
ああコロナ五輪の旗が揺れまどう
コロナ発マスクに酷暑熱中症
辞意表明アベノマスクはもうしない
へアクラック生きる雑草教えられ
胸張って歩くと叱る影法師
遣り繰りをうまくこなして今がある
じっくりと聞くのではやる町の医者
変わらない日常こそが宝物
思い出を沢山いただき笑う門
老い隠し大金ハタキ若作り
沈んでも藁を掴んで這い上る
あれこれとバックに入れる無駄な物
言いちがちななぜか伝わる聞きちがえ
やさしさをぶつきらばうで照れかくし
ばあちゃんのおふれる知恵はいま宝
手を繋ぐポケットの中ホッカホカ
もてるのは内ポケットの厚みです
ポケットに大志詰め込みくに出る
ポケットに夢と内緒を仕舞つてる
内ポケットがずしり昭和のポナス日
児のポツケ夢膨らます石ころ

ヒロ 正博 福子 純風 秀子 弘美 隆彦 敬二 孝代 規之 光弘 登美子 由子 邦夫 直樹 澄子 由夏 孝子 洋二 幸子 淳司 三和子

甘い香り金木犀はどこに居る
生きのびるために時には死んだふり
明日のこと天に任せて寝るとする
甘い囁き胸の振り子が揺れ出した
銀輪で世界平和と駆ける夢
ステイホーム離婚の危機が迫り来る
どこにある妻の取説買いに行く
じっくりと化粧をしてもやはり齢

六甲川柳会(兵庫) 梶谷 和郎報

eスポーツなんのこつちやと爺ちゃんが
親爺とのキャッチボールが嬉しくて
庭そうじ体幹すこし鍛えてる
跳べ跳ねるあとは私とサロンパス
終わっての爽快感にトリコです
ぶりだけど家族が祝う自己ベスト
追いついて並んでからの正念場
葬列へ別れのクラクション響く
行列の先に待ってるフルメール
右へ並べが嫌いでいつもすねている
食卓の並ぶ御馳走平和知る
その列にわたしたしも入りたいのです
いつだって比べて見えない子の嫉
ぜいたくね生きたくないと思うこと
コロナ禍で出番無くなるスポーツ
裏表ない人だけどこかましい
大地震ビビっているが備えなし

おくみ 正美 一男 和子 靖博 ともこ 隆明 和代 道子 盛夫 崇史 ひろし 義明 和宏 光久 武彦 千賀子 公輔 順子 恭子 和郎 克美 利子 弘華 勝弘

あんなにも並んだマスク捨てられぬ
裏口へ無理が諭吉を連れてくる
そのまんま隠したままでいてほしい
秋刀魚一匹表は妻が僕は裏
表だけというものはない虹の裏
なくしたのは残念な恋ほんとうに
神戸牛口に入れたら目覚しが
歌ったはずみ入れ歯が折れて聴き役に
洗濯機の中でもがいている諭吉
会心の一句が消えた風呂呂上り
待ちわびた孫の産声聞かず逝く
今日もまた呼名もできず帰る道
菜園に今日もですかと褒められる
公園のD51今日も淋しそう
カタカナに漢字のルビが要る時世
太陽が寝坊しだして風涼し
プランコが揺れて思案の風を切る
スポーツの栄冠得るは運もいる

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

令和三年早いもんです神無月
弟子の頃月が出るまで仕事した
月の夜影にびくっとさせられる
月給をもらった頃がなつかしい
名月を忘れた老いも褒めて寝る
名月もゆっくり見とるゆとりなし
カレンダー破る音だし月替る

雄大 石花菜 龍枝 けいこ 恭子 隆昌 瑞子 利恵子 狸月 ひとみ 隆浩 洋次郎 真桜子 磯洋一 弘 美津子 美恵子 哲男 廣光 博 正和 正美 正彦 憲三 芳江

ぐるぐると夫婦げんかのある平和増税が暮らしぐるぐるの巻きにする貸した本ぐるぐるの返し戻らない大臣の椅子はぐるぐるの交代で地球儀をぐるぐる廻し世界旅ぐるぐると散歩を兼ねて田を回るぐるぐると頭も腕も回す日々書いては消して煙を作っている煙害に喘ぐ人畜木も森もSLに乗ってトンネル窓閉める財布から煙のように消える銭ニコニコと煙にまかれていくれる煙突もオール電化で姿消し狼煙上げ合図をするも見捨てられ老いらくの恋が燻るデイケアーやりくりを託す財布の紐がポロ子や孫に工場を託しほっとした願い事子に託しては裏切られ介護士に託す重たい車椅子脳元気ラジオに託す英会話億の金子供に託しグッドバイ高齢者託す施設を早くして遺言も妻に白紙の委任状

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

笑子 正太郎

虫の声こよみ通りに秋がきた
終戦のごたごた生きて今平和
生きる価値ここにあったかゴミ出し日
連休の混雑避けた空財布
混雑の意識などない蟻の群

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

ストレスを吐く青空の聞き上手
吹き荒ぶ逆風越えて生きた自負
合併でダルマになったメガバンク
神様のいたずらだらう僕の顔
できるだけチャランポランで生きてます
いたずらの日数ばかり過ぐコロナ
酒断ちのストレス酒でまぎらわす
AIの普及は良いが会話ゼロ
いたずらに生きて黙黙食べて居る
神様のいたずら鼻べちゃを生んだ
いたずらつ子昨今とんと見かけない
いたずらな風だ私のふところに
ピカソだと母の似顔絵誉められた
いたずらが忘れた笑顔とり戻す
角取れて丸く暮らせば日日平和
こんなにも青き空なり旅に出る
三〇年同居毎日幸せに
ストレスを丸洗ひする大太鼓
ストレスをまるごと吸うてくれる酒
だまされて心の風吹きまくる

麦青 次男 由紀子 茂夫 醉芙蓉 祐子 さちこ 完司 節子 日出子 風露 宣子 智恵子 大鯨 野蒜 萩江 重忠 玲子 美知江 道春 紀美恵 恵子 照彦

やすの 信子 薫 泰子 亜成 朝子 武彦 祥昭 勝弘 尚世 和織 義広 鈍甲 一步 賢子 かすみ 彰一 博泉 武彦 弘委智 ルイ子 郁夫 欣之 清

札束の嵐が襲う永田町
理想の恋は嵐の中でハグされる
終章の行に嵐が顔を出す
あの時が嵐だったと気付く虹
葛藤の嵐乗り越え夫婦愛
2000万貯めて空しい低金利
年金を受けとるだけの世話になる
お腹の尻西瓜のようによく育ち
さよならとネイルアートを秋にする
時時はマスクははずして秋の風
溺愛が過ぎて子供が輪がぶれ
月が出た虫が鳴いたと酒を汲む
喜寿過ぎて焦ることなど何もなし
過去はもう追わぬ笑っていたいから
燃え尽きぬ傘寿は黄泉へ背を向ける

柳塔まつえ吟社(高根)相見 柳歩報

爺ちゃんの恋に婆ちゃん嫉妬して
嫉妬かなグレイゾーンのままにする
彗星の浮気で荒れた天の川
ライバルがマドンナの手を離さない
ののろと横断歩道八十の足
ののろと生きて行くのもおつなもの
貼り紙も魔よけにならぬクラスター
十円の値引きシールに価値を見る
湿布貼るこれから痛み出す場所へ
悔しさを張り付けてあるカットパン

秀雄 弘一 麗 あかり 信子 壽峰 修 千賀 星雨 一子 高鷲 高志 一文 茜 仁

芳山 美智子 瑞人 豊仙 知恵子 米估 弘充 みちを 青帆 あきら

大吟醸のシールひとつで美味くなる
 あいみよんの閃きどこか懐かしい
 閃いたそうだがやっぱりあの話
 社交好き腹にいちもつ黒いもの
 漂泊の黒カモメにはほど遠い
 おまわりさんも泥棒も黒マスク
 この暗さ明い明日きつと来る
 黒は孤独で数ある色に憧れる

志捨ててしまった街の隅
 雲よ雲君のデザイン見て飽きず
 ふわり雲まだ旅立ちはや早すぎる
 お互いがこれが最後と出す賀状
 庭の草お互い意地と陣地取る
 お互いの遠慮が過ぎて疎遠なり
 動き鈍いが飯を食うのは超早い
 青い空押し上げて行く入道雲
 早割のオセチを予約五蘭盆会
 最長を四日過ごして辞任する
 学芸会主役外れて馬の足
 心打つ体験談に出る涙
 発車ベル孫も早食い血筋かな
 ゴキブリも芝居がうまい死んだふり
 お互いに許し許され五十年
 平均寿命十年残し逝つた妻
 相槌を打って信念崩れ去る
 打たれてもひょいと出てくる杭であれ

俊雄
 いわゑ
 武彦
 新録
 みよし
 あい子
 富次
 野鶴
 真接子
 勝弘
 正彦
 野薫
 邦男
 宣子
 廣光
 一徳
 淳
 美津子

信長が舞うた人生五十年
 討ち入りがなければただの昼行灯
 渡りに船か表舞台に総修理
 フィナーレを惜しみ舞つてる紙吹雪
 正鶴を射抜かれぐーの音も出ない
 舞いながら妻がステーキ焼いている
 下駄が舞うあーしたてんきになーれ
 組閣には陰で舞う人転ぶ人
 気まぐれなやんちゃ娘が嫁ぐ朝
 秋の空せんたくものが落ち着かぬ
 気まぐれが祟りスルーする誘い
 秋は気まぐれ晴雨兼用持ち歩く
 気まぐれな独居初老はパラダイス
 好きやでと言われた方が眠られず
 気まぐれなコロナに楽しみ奪われる
 見事な白壁ろくがきしたくなる
 なおみさん人種差別をつらぬいた
 縮む脳八丁味噌を足しておく
 十七歳堂々二冠見事なり
 突然の中止緊張宙に舞う
 ナミの音痴はあんなに音を外さない
 敗戦に見せたあなたの潔さ
 お見事にピンピンコロリ逝きはった
 恋人を裂く気まぐれなキュービッド
 無茶ぶりを見事にかわしまいウエイ
 匠の技誤差一ミリを許さない
 咲いて見事散るも見事なサクラ花

克博
 まつお
 福貴子
 大子
 進
 さくら
 勝弘
 妙子
 満作
 理恵
 ふりこ
 満知子
 民子
 久仁雄
 廣子
 ゆみ子
 美世子
 たかこ
 克己
 和夫
 眞澄
 ダン吉
 萌
 いさお
 裕之
 志津子
 俊雄

西宮北口川柳会(兵庫) 緒方美津子報

ほんとうに打たれて強い人いるの
 仲間だなじ痛みを知っている
 まだ四十路もうすぐ孫が出来るらし
 自画像の右半分は亡夫の顔
 子らは裏から出入りして芝居小屋
 早口の話はちよつと眉に唾
 この秋はやせた秋刀魚も我慢です
 打ち水が湯気上げてる熱帯夜
 煩惱を捨てたらあかん早よ老ける
 さびついて打つても響かない夫婦
 年かなあやさしくなつてきた主治医
 遠い耳お互い様でまあいいか
 愛を下さい果ごもりに入ります
 初メール講師役した孫へ打つ
 世話やきが過ぎる二人のこぜり合い
 早い話ワクチン待ちのオリンピック
 打ちあけて肩の荷おろす月あかり

伯備
 ひとみ
 哲男
 千賀子
 りこ
 和宏
 盛夫
 利子
 堅坊
 光久
 哲子
 洋次郎
 千代
 正和
 恭子
 敦子

川柳塔すみよし(大阪) 古今堂蕉子報

脳トレを日課に足も鍛えます
 脳軟化症がすんなり出てこない
 脳味噌が錆びないよう今日も酒
 脳よりも心壊れるのが怖い
 将棋好きファン獲得見事です
 褒められて裏の裏読む脳回路
 風が舞ううさわ話に色付けて

直子
 里子
 昌紀
 郁子
 小枝子
 雅美
 万紗子

一点張り見事的中万馬券

あかつき川柳会(大阪) 磯島福貴子報

人間の身勝手怒る温暖化

米中の指導者似たり身勝手さ

尻をふたり車に残し朝帰り

責任は他人手柄は一人占め

解釈で法も人事も意のままに

請求ばかりで感謝の絵馬がない

生態系壊し害獣扱いし

美ら海に基地押し付けた私たち

身勝手を許してくれた妻介護

道路まで溢れる花の鉢並ぶ

王様が裸になっていく気儘

金貯まる黄色い財布軽いまま

九条に黄信号灯つてる

黄信号無視して進む菅政治

黄信号増えるこの世の衣食住

叱られて逃げた銀杏の黄の中へ

学問の自由にとる黄信号

晴男

堅坊

吾一

秀夫

壽峰

古池蛙

敏治

敏

美晴日

(松)敏子

紀乃

欣之

直子

常男

光之

寿之

忍

つよし

ひろ子

菫蕪のぐにやりと曲る物忘れ

こんにやくのようなおひとへ膝まくら

貧困に追いうちかけるコロナあり

レジ袋一枚買えぬ最賃増

定食屋庶民の味の秋刀魚消え

夜もすがら庭で賑わう秋の色

カウントダウン条約批准日は近し

おじぎする稲穂見上げる彼岸花

コロナ禍も集う彬の百日紅

勝ち馬を愛するメディアの節のなさ

思い出をたたみ込んでる秋扉

豊中もくせい川柳会(大阪)初代

正彦報

黄昏の頃なら写真許します

いい想いずつと大事に玉手箱

涼風に生命線もぐつと伸び

コロナ禍のマスクを通る風も秋

目安箱不平不満を入れて行く

パンドラの箱を武漢で開けた罪

瑠美子

りゆうこ

もと

溪節

征之

シマ子

(近)正

万作

高鷲

(河)正

保州

多津子

英三

真理子

公子

時子

健二

多美子

多美子

我が書齋オモチャ箱だと妻が言う

朝夕の涼しさ油断できぬ今

真夜中におもちゃ箱から出たマリオ

涼風にコスコス揺れて畑仕事

やんわりのアドバイスなら角立たぬ

三涼四暑いつともになく秋の声

九十歳鏡へ身なり問うている

わが家での宝石箱は孫五人

自助よりもまず公助でしよ政治なら

迷わずに小さな箱を選びます

泣かれるとつい甘くなる躰糸

ミスしても涼しい顔ができる僕

ドル箱と言うが円箱とは聞かぬ

ダンボール箱は働きのものである

風当たり弱いところを選んで立つ

物置の隅に昭和のみかん箱

核のゴミ北海道に飛び火する

一服の清涼剤になるハイネ

川柳藤井寺(大阪) 太田扶美代報

見清

(岩)玲子

満作

孝代

ふりこ

弘委智

肇

黒兎

英旺

ひとみ

美智代

勝弘

則彦

美津子

かずお

正彦

きらり

洋志

洋志

キオスクのカフェオレ飲んでご出勤
 カフェオレはよく飲みました銭湯で
 カフェオレに遠い思い出一つある
 いらついでみてほしいにち24時
 好きなはず言つてはくれぬ八十路坂
 好きやつたら肩を抱くなりしてやアホ
 憫がつくまでの五分の長いこと
 てきばきと出来た昔をなつかしむ
 風の向きばかり気にして黙つてる
 プロポーズ五年も待つている娘
 ドックフード待てにじれてる哀しい目
 じれるから見逃している早とちり
 じれているだけの自分が嫌になる

川柳塔なら

大久保眞澄報

知育体育ずつと人並みわが家系
 打つた時は大きく見える背番号
 体育が嫌で文系川柳へ
 運動会子供に行けず孫で行く
 美容体操でこころ綺麗になりました
 おねだりに体操座りする孫ら
 ころばん体操時々するがよく転ぶ
 二時間目体操はずむランドセル
 体育と給食が好きランドセル
 百歳へ体幹鍛えてる傘寿
 体育の日だねと母は四股を踏む
 跳び箱は苦手なままでよく走る

かずお 勝弘 一步 美代子 喜代子 まつお いさお シルク ダン吉 ちづる みつ江 香代子 扶美代 すみ子 保州 裕之 見清 則彦 一歩 希久子 寿之 満作 美智子 惠美子

万事取り仕切る妻は体育系
 廃校の体育館のがらんどろ
 跳び箱も組体操もせぬ過保護
 体育の日に薫り出す青みかん
 宴会の離れ小島にいるつらさ
 子や孫を送る尾灯が遠ざかる
 離陸する機影に思慕が増すばかり
 戦列を離れて人が見えて来る
 親離れとうにした子の帰省待つ
 單身へ夫婦の愛が試される
 スマホから離れて空を見てごらん
 子離れでやつと夫婦のさし向い
 強い方強い方へと乗りかえる
 姉ですとこんな時だけ顔を出す
 妹は甘え上手で泣き上手
 ちやつかりが身についている二男二女
 五歳児がお買物には付いてくる
 下げて来た酒はすつかり呑んで去に
 うつかりを隠しちやつかり澄まし顔
 ちやつかりと借りてそのまま姉の靴
 飲む食べる喋る余りを持ち帰る
 うつかりちやつかりさんの手が温い
 ちやつかりと月に抱かれる芒の穂

みつこ 壽峰 武人 誠 天 もと子 恭昌 ダン吉 華蓮 俊八 雅美 俊雄 まつお ひとみ ゆみ子 かずお 勝弘 千代 裕子 弘子 欣之 榎子 堅坊

絨毯の織り目織り目に血が滲む
 胸襟を正し誤作動くり返す

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

令和の世なつた途端に荒れ模様
 両腕に太陽光の蓄電所
 模様替えしたら一日捜し物
 一杯の酒できれいな暮麻疹
 胸の底塩漬けにした恋心
 お互いの模様が判るダイヤ婚
 未完成の私の胸の中の蝶
 胸の中さらさらさらと立てる波
 再会が過ぎた時間呼び戻す
 巣を出ると胸のふくらみ眩し過ぎ
 こみ上げて読書終わらない夜長
 再会の願いが募るめぐみさん
 再会をしても分からぬマスク顔
 そば打ちは趣味を求める退職者
 空模様見ているばかり策がない
 担担麵ギザギザハート癒す昼
 再会を果たせず友は冥土旅
 マネキンが秋の衣装で胸反らす
 麵棒は平行でなければならぬ
 麵が絡まるように愛が絡まる
 素うどんに只の天滓たつぷりと
 模様替えカーテンだけが光ります
 裾模様日の目見れずに半世紀
 今年こそ再会します天の川
 正座して曾孫を抱いた母卒寿
 模様替えしても変わらぬ我が住まい
 自粛する胸にひっそり綿埃

みちを くにこ 紀の治 楓花 余光 余光 石花菜 美ツ千 照彦 八千代 ゆたか 麦青 富隆 隆昌 道春 雄大 幸子 風露 由紀子 けいこ 小鹿 重忠 久子 清明 俊文 コスモス 規雄 完司

二〇一九年度(令和元年度)川柳塔社総務部報告

・9月29日「第25回川柳塔まつり」を開催。
参加者341名。

・11月8日「第31回高山山川柳碑合祀祭」を開催。9名を合祀した。

・「第7回春の川柳塔誌上大会」を実施。745名の応募を頂いた。

・「川柳塔」2月号で「こんにちはは新同人です」の特集した。

主な受賞・表彰
*本社句会月間賞永久保持者 木本 朱夏
*秋の叙勲・瑞宝中綬章受賞 副井ゆたか

出版・句集の刊行
*新家 完司 川柳句集(七)
*令和元年

*鴨谷瑠美子
*ロータリーの友柳壇入選句・百句集

*酒井 健二 川柳句集
*月さえる今宵私も吠えてみる

*石田ひろ子
*精鋭作家川柳選集(近畿篇)

*きとつこみつ
*精鋭作家川柳選集(近畿篇)

*小谷 小雪
*精鋭作家川柳選集(近畿篇)

【精鋭作家川柳選集】(近畿篇)

*有海 静枝

【精鋭作家川柳選集】(中国・四国・九州篇)

*斉尾くにこ

【精鋭作家川柳選集】(中国・四国・九州篇)

*前田 楓花

【精鋭作家川柳選集】(中国・四国・九州篇)

*藤井 智史

【精鋭作家川柳選集】(中国・四国・九州篇)

物故者(9名)

古田 太虚 令和元年8月25日没 89歳

中原みさ子 令和元年9月5日没 77歳

磯部 義雄 令和元年9月12日没 81歳

細川 花門 令和元年9月28日没 78歳

前 たもつ 令和元年10月4日没 87歳

田浦 實 令和元年11月3日没 81歳

中川ひろ介 令和2年3月12日没 72歳

阿部 紀子 令和2年3月26日没 82歳

海老池 洋 令和2年4月28日没 93歳

新任役員(再任・留任は含まず)

副理事長 内藤 憲彦

常任理事 栗原 道夫 穂谷 和郎

参 与 松原 寿子

理 事 上出 修 栗田 忠士

杉野 羅天 敏森 廣光

富永 恭子 紫 しめの

第17回 川柳「信濃川」

新春誌上大会

*新作2句・定型のリズムでお願いします。

課題 「あう」

選者 13名共選

相田 柳峰・大内せつ子

みぎわはな・平井美智子

坂本 加代・永見 心咲

瀬戸れい子・吉道航太郎

他

締切 1月31日 消印有効

投句料 1000円

(野口英世さんか郵便小為替)

1位 魚沼産コシヒカリ

10キ口 他

投句先 〒940-2042

長岡市宮本町

3丁目-2433

相田 柳峰宛

TEL 0258-46-5999

柳界展望

★第51回川柳中村誌上大会結果発表。同人成績。

秀吟 柳田かおる

新しい道ですマイナン

バー届く

▽ご芳志△

★「第二十五回鶴彬川柳大賞」参加者227名。同人成績。

鶴彬川柳大賞

高瀬 霜石

傷口に開いたままの汚

染水

▽訃報△

★「第14回岡山県川柳大会」は、10月3日浅口市

○原章峰さん(理事・島根県)は9月16日逝去。享年94。

催。同人成績。

○加川靖鬼さん(理事・尼崎市)、10月28日逝去。享年88。

天位 小島 蘭幸

無になろうなろうと飲

んでいるようだ

▽新誌友紹介△

★「第91回奈良県川柳大会(誌上大会)」は、参

大阪市 折田 昭子

加者288名。同人成績。

鳥取県 竹重ひとみ

秀句 稲見 則彦

大阪府 津守 令子

縁日の帰りだろうか親

大阪市 田中 俊子

子連れ

紹介者 平井美智子

句会部よりお知らせ

川柳塔本社1月句会は、下記の要領で誌上句会といたします。皆さまのご投句をお待ちしております。

記

『川柳塔』12月号に投句用紙を同封します。
(未読の方は川柳塔社事務所までご請求ください。)
投句締切 12月28日(月)必着
入選発表 『川柳塔』令和3年3月号
投句料 1000円(切手不可)

兼題	「お洒落」	齊尾くにご	選	(鳥取県)
兼題	「ぼろぼろ」	杉野 羅天	選	(熊本県)
兼題	「数」	三浦 強一	選	(北海道)
兼題	「キューン」	岩田 明子	選	(大阪府)
兼題	「安心」	小島 蘭幸	選	(広島県)

(各題2句出し)

問い合わせ・送り先

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-17
花野ビル201 川柳塔社
TEL 06-6779-3490

番傘フェスタ2021誌上大会

令和3年の番傘フェスタは誌上大会です

全国の皆様のご参加をお待ちしております

宿題 (各題 1句)

「息 吹」 赤井花城選

「しなやか」 岡崎守選

「さばさは」 小島蘭幸選

「駆ける」 零石隆子選

「ルール」 田中新一選

「無 限」 森中恵美子選

締切 令和3年1月29日(金)必着

投句料 1000円(郵便小為替) 切手不可

(投句はお一人様一口に限る)

投句用紙 規定用紙(コピー可)

投句先 〒530-0047

大阪市北区西天満5-6-26-605

番傘川柳本社 フェスタ投句係

発表・賞 各題上位3句にフェスタ賞呈 発表は番傘4月号

問合せ先 TEL 06-6361-2456

主催 番傘川柳本社

第九回卑弥呼の里誌上川柳大会

兼題と選者(各題2句)

「自由吟」 古谷龍太郎・森中恵美子 共選

「永遠」 むさし・大西泰世 共選

「苦手」 石橋芳山・樋口由紀子 共選

「葉」 井上一筒・赤松ますみ 共選

「瓶」 板垣孝志・木本朱夏 共選

投句用紙 専用用紙(コピー可) またはA4大用紙

広報募集 令和2年10月から

締切 令和3年1月15日(金) 消印有効

参加費 1000円(切手不可) 発表誌呈

投句先 〒842-0103

佐賀県神埼郡吉野ヶ里町大曲2426-2

卑弥呼の里川柳会 真島久美子

TEL・FAX 0952-52-1061

賞 各題特選1句・有田焼 一万五千円相当

各題佳作5句・図書券

(その他サプライズ賞あり)

※男女を問わず たくさんのご参加をお待ちして

います

句会名	日時と題	会場と投句先
八尾市民 川柳会	13日(日) 14時締切 家族・おいしい・歩く・雑詠	八尾市安中町3-5-1 渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川柳会	14日(月) 14時締切 叶える・気楽・うっかり・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830 福田正彦
南大阪 川柳会	14日(月) 13時30分締切 予約・終わる・ぼろぼろ・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901 松岡 篤
川柳 たちばな	16日(水) 席題・やっつ・揺れる・自由吟	立花北生涯学習プラザ 尼崎市塚口町3-39-7 ☎06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田 川柳会	19日(土)を誌上句会に 秘密・忘れる・やがて・ムード	〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	19日(土) 17時締切 ふくよか・焦る・吉	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」☎0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 ☎0172-36-8605
和歌山 三幸柳会	19日(土) 12時30分締切 雪・信号・前	和歌山商工会議所 4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川柳 ねやがわ	20日(日) 誌上句会締切 ゴール・ボーナス・味・白星 自由吟	〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日) 14時締切 成り行き・点滅・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
豊中 もくせい 川柳会	21日(月) 13時50分締切 白・貸す・ぱつと・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
はびきの 市民会 川柳会	27日(日) 14時締切 地下・失う・グルメ、席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 さんだ	休会いたします	〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳塔 すみよし	休みます	住吉区役所内 住吉公民館 2F 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお

★上記は年初計画です。諸般の事情上、詳細は各柳社にお問い合わせください。

12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	3日(木)投句会 景気・好き・どっしり 11月30日で締め切りました	〒633-0054 桜井市阿部787 安土理恵
城北 川柳会	5日(土)14時締切 拾う・ユニーク・期待・自由吟	旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
倉吉 川柳会	5日(土)14時締切 さらに・杭・祈る・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ 吟社	5日(土)13時30分締切 乱暴・旅行・ルーツ・寒い	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
川柳 ふうもん 吟社	5日(土)誌上大会 おろそか・助っ人・放置・ふらつく 濃厚・ジグザグ・敗者復活吟	〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
川柳塔 さかい	8日(日)投句締切 師走・進む・ボーナス 折句：は・こ・ね	投句句会へ変更
ほたる 川柳 同好会	8日(火)13時30分締切 近所・動く・煩わしいと思うこと	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池 蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳 あまがさき	8日(火)14時締切 余裕・鍋・それぞれ・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
あかつき 川柳会	11日(金)14時締切 さっぱり・皿・順調・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3-6 木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳 とんだばやし 富柳会	12日(土)14時締切 紐・半分	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0064 富田林市不動ヶ丘8-31 山野寿之
川柳塔 わかやま 吟社	12日(土)14時10分締切 兼題=絶景・乱・ギャグ 課題吟=滅	和歌山商工会議所 4階 和歌山市西汀丁36 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 楽原道夫
川柳大阪	12日(土)14時締切 ローソク・新・神社	メトロ・長堀鶴見緑地線・京橋駅 研修室 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六甲 川柳会	12日(土)14時締切 渦・いろいろ ともす(灯す・点す)・自由吟	魚崎西町会館 阪神尼崎駅から高架添い西へ200m 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳塔 打吹	12日(土)13時30分締切 底・包む・しみじみ・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

○ ○ 年 年 月 月 から から 一 半 年 年 9 5 8 0 0 0 0 0 0 0 円 円 } 該当の方に○をつけて下さい (無記入でも可)	紹介者	電 話	住 所	氏 名
			〒 —	フリガナ

川柳塔のホームページアドレス

<https://senryutou.net>

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 009804-298479

作品募集

2月号発表（12月15日締切）

川柳塔（8句）	小島 幸選
水煙抄（8句）	西出 楓選
愛染帖（2句）	新家 完司選
檸檬抄「ゆらゆら」 （2句）	石橋 芳山 共選
古今堂 蕉子	
インスピレーションナビ（2句）	大西 泰世選
「ふくら」	中村 金祥選
「休む」	藤井 寿代選
「発見」（3句）	高瀬 霜石担当
初歩教室「発見」は3月号発表	

3月号
檸檬抄「呼ぶ」
一路集「机」「アクション」
初歩教室「咲く」

お知らせ

本社12月旬会は誌上旬会として開催、11月30日締切りしました。発表は2月号です。

新型コロナウイルス感染症はヨーロッパを中心に再び拡大しつつあります。

三密を避け、うがい、手洗い、消毒、そして換気を忘れず、気持ちを引き締め、ご安全にお過ごしください。

本社1月旬会は誌上大会です
詳細は川柳塔12月号116頁ご参照
投句締切日12月28日、発表3月号
兼題「お洒落」「ぼろぼろ」「数」「ケン」「安心」

川柳塔柳篋

3冊 送料共 1,000円
事務所あてお申し込み下さい。

定価 八百円（送料100円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）
二〇二〇年（令和二年）十二月一日発行

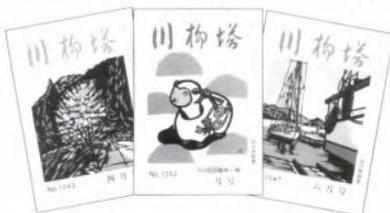
発行人 小島 和幸
編集人 木本 朱夏
印刷所 美研アート

〒513-0052 大阪市天王寺区大道一丁目四十一番
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社
電話（〇六）六七七九三三四〇番
振替 〇〇九八〇一四一七九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL (06) 4800-3018
FAX (06) 4800-3028
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの

一句を募集します。

兼題

「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸 選

応募要領 郵便八ガキに2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。

発表

本紙4月号にて発表いたします。

締切り

2021年1月31日(当日消印有効)

投句先

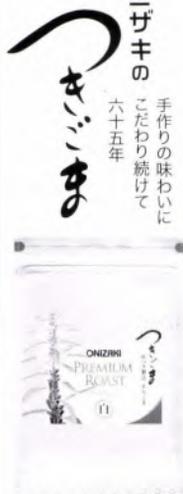
〒543-0052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

オニザキの

手作りの味わいに
こだわり続けて
六十五年



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

橋詰農園の味好みかん

～家族で作り上げるこだわりの味～



健康なみかんの木から採れる絶品

余韻に浸れるほどの「コク」をお楽しみ下さい

〒649-0141 和歌山県海南市下津町小南 349

TEL & FAX 073-492-1692

E-mail beetrus@nifty.com

http://www.hashizume-nouen.com

